文化論集第九号
一九九六年九月

一五、〇〇〇フランの顚末（前）

――『感情教育』について――

川中子　弘

1

フレデリックがアルヌー夫人に対して、どんな犠牲もいとわぬほど強い、至上とも言える愛を抱いていたことを否定することができるだろうか。ところが奇妙なことに、その愛が熾烈になりかけた矢先の、だから全体で四分の一程進んだところで、この人物は意外なほどあっさりと、宿命の恋を断念している。突然彼女は、「死んだのも同然」の存在となって、その愛情は醒めたのではないにしても、「鎮まって」はしまうのだ［97］(1)。それまでの胸に秘めてはいるが一途という他はない崇拝ぶりを考えると、この思いきりのよさ、このいさぎいい諦めぶりは、不可解というしかない。それなしには日も夜も明けぬばかりに騒いでいたほどの愛も歯がたたずにすごすごと引下るどんな強い障害に出くわしたというのだろうか。いかにもそれらしい困難は、怪訝の眼でその前後を見廻しても、ただちには認められないのである。だがそれは読むほうに落度があった。よく読み返してみると、無理もない理由があったのだ。最初はさして深い意味のないことに――そこがこちらの至らぬところだったのだが――思われた資産の問

題が、どうやら青年の運命を狂わせるほどの重要なさし障りになっていたらしいことに気がつくのだ。断っておくが、アルヌー夫人は金の切れ目が縁の切れ目になる、そういう類いの女性ではない。むしろそれとは正反対のタイプの女性ではあるまいか。だが、それにも拘わらず、フレデリックは、すぢ違いと思える金銭問題に足をとられて、至高の愛を断念するにいたったという他はないのだ。

パリで夫人への片想いを生き甲斐としつつ青春を満喫していた主人公は、大学の学期末論文も二度目はどうにか通過して、一時帰郷するのだが、そこで思いがけなく、あてにしていた自分の財産が予想をはるかに下廻ることを母親に知らされて、「頭をガンと撲られたように茫然となる」。死んだ父親から相続できる財産は、借金の返済やら銀行の破産で年収二、三〇〇フランにしかならないのだという。青年は「絶望し」、「運命を呪う」。大変深刻な問題だったことがわかる。しかしどうしてそれが宿命の愛を断念することにいきなり結びつくのかが判りにくいのだ。「破産し、無一物」になった彼がそこでまず考えるのは、もはやアルヌー夫人には会わせる顔がないということなのである、「こうなっては、どの面さげて彼女にまた会えよう」〔91〕。手紙を書こうとも思うが、「自分の境遇を打明ける」懸念から二の足をふむ〔92〕。主人公はかつて夫妻に亡父の遺産は年収一五、〇〇〇リーヴルにのぼると仄めかしたことがあったらしい。しかしそれが彼女へのこれほどの重荷になるとは、ではこの財産の吹聴はどういう意図を持っていたことになるのか。青年にありがちなその場限りの虚栄心からということでもなかったのか、とこだわらざるをえない。金額の提示に何らかの意味がこめられていたのではないかという、意地の悪い想像さえ浮かんでくるのである。いや、そう考えてはじめて、彼の行動の辻褄が合ってくるのではあるまいか。たしかにあれだけの恋にすぐに諦めがついたわけではない。「彼女のいない人生は耐えがたい」のでこれまで通り会う手段はないだろうかと散々思い悩みはする。友人のデロリエのように「財産がなくてもちゃんと生活をしている人間は大

勢いる」し、貧乏が才能をみがくことだってある。そういう努力はむしろ夫人のような人の同情を誘うに違いない、とあれこれ未練にひかされるのだが、いっそこのまま忘れられた方がいい、「あのひとはぼくを死んだと思って、懐しんでくれるだろう」〔92〕と自分にいいきかせ、結局は行末を案じた母の頼みを断わりきれないというかたちではあるが、そのまま故郷に居残って、パリの夫人への執着はどこに行ったのか、心を入れかえたように地元の法律事務所で働くことになる……もっともこの推移をみるかぎりだと、財産の当てはずれがアルヌー夫人との再会を断念する決定的な理由になっているとは必ずしもいえない。むしろそれ以外の理由（母の泣き落とし……）が、いやがる彼を故郷につなぎとめていたようにもみえる。しかし、やがてあまり当てにしていなかった叔父から相当な額の遺産が転がりこんできた時は、本当の理由が背後からせり出してくる。その時のフレデリックのふるまいは財産問題こそ、彼が夫人への愛をやむなく断念した原因であることを暗示している。彼はこのまま残るように引きとめる母の手を、今度はいささかの遠慮もなくふりはらって、矢も楯もたまらぬ勢いでパリへととびたって行く。それまでの地方暮しも、息子に故郷で地道な仕事につかせて老後を一緒に暮らそうという母の意向に気兼ねして、パリすなわちこの場合アルヌー夫人への思いを絶ったわけではなかった。といって、金ができたから夫人に会いに行くのだとあからさまに述べているわけではない。しかしもちろんこのパリ行きが、手放したがらぬ母をどうしても丸めこもうと出まかせにいうように、外交官になり、やがては「大臣」〔P. 98〕に収まるためでないことは明らかである。パリには「全て」があると彼のいう、その全てとは「芸術と学問と恋」のことらしいのだが〔91〕、パリに戻った後一、二度の気粉れを除けば、芸術（絵、著述）にも学問にも一向に身をいれる様子はないのだから、その彼が全てがあるパリに行くといえば、三番目の恋以外の目当てはないに決まっている。だから彼はパリに着くと、いの一番に彼女の家に駆けつける。もっとも相憎アルヌー夫妻は引越したらしく、その標札には「愛しい人の名」

が消えている。広い都会のどこを探せばよいのかと途方に暮れるのだが、だからといって今度は諦めようなどという了簡は少しでも湧くどころか、逆にここぞとばかり奮いたって、引越し先を草の根わけても突きとめようと懸命になる。あの慎ましい田舎暮らしのいったいどこを押せば、打って変わったこれほどの情熱が生まれてくるのかと不思議なほどである。そしてどう考えてもこの変貌の原因としては、唯財産の多寡の違いがあるだけなのだ。あれほどまで身をいれた愛だったのに、夫人に厳しくはねつけられたわけでも、嫉妬した亭主に脅迫されたわけでもない。いやに物わかりよく自分から諦めて、そのためには「自分を死んだ人間とみなし」〔92〕、やがては最愛の夫人を死なせることさえ厭わなかった理由とは、結局はその辺りにあったと考える他はないように思われる。だからこそ、遺産が入った途端、まず最初に、これで「アルヌー夫人に会えると思って強い歓喜に全身がゆすぶられ」ることにもなるわけだ。あらゆる困難をのりこえて成就すべき愛のロマン派的至高性という神話はここにはない。それを顔色なからしむる、さらには死よりも強いらしいある現実の存在を認めないわけにはいかないからだ。主人公の行動を支配していたその論理を何と呼んだら良いのだろうか。フレデリックが自分に夫人を愛する資格があると思ったり、逆に指をくわえて田舎に引下ったりするのは、自分が財産の所有者であるかどうかに掛っていたのだから、それは経済的な次元に属するといえる。金の有無で成否が左右される主人公の愛は、しかしさらに市場システムに組みこまれていると、もう一歩踏みこんで考えてみたいのである。もし叔父の遺産が転がりこまなかったら、主人公は夫人と再び会うことはなかったのではないだろうか。故郷に戻って心ならずもそこに留まるまでは青年の人妻への愛は作品の導入部であって、その後夫人と再会してからようやくその充分な展開を遂げていくのだから、財産が相続できなければ、愛に一身を献げた男の悲劇的な物語は、そもそも存在しなかった。それ程の重みを持っているわけだ。ところがこの重みはなかなかに微妙で、高密度の物質が浮力をえるような特別な工夫でも施してあ

るらしく、それを背負う圧力にあえぎながら、当人は一向にそれに気付かないということが起りうるのだ。

そうなると、彼が夫人に初めて出逢ったのが、まさにルアーヴルに住む叔父のところに、他でもない遺産目当てのご機嫌伺いに行った、その帰りの船中だったことが思いだされる。青年のふるまいにおける遺産の重みをよくよくはかってみれば、このめぐり会いの中に奇妙なつながりが、冒頭からすでに影を落としていたのである。もっともこの時は、叔父からはかばかしい返事も貰えずにお預けをくらって戻るのと平行して、夫人の方もその出会いに強烈な印象を受けながら、唯姿をあおぎみるにとどまって再会の当てもなく別れることになるのだが、それはさらに憧れのパリを廻って船が辿りつつある、セーヌ川の悩ましい曲線とも対応していたことに気がつく。船は叔父の住む河口から溯上して、そこには全てがある約束の地パリの中心部（シテ島、ノートル・ダム寺院）へと青年を導きいれながら、しかしまさにその頂点に達しようとする瞬間にそれまでと同じ運動によって、それに触れ享楽するのを許すことなく、切歯扼腕たる青年を無念のうちに引離しはじめるからである。航跡はこのままうねって彼を人生の出発点である故郷ノジャンに連れ戻すのだが、それはさらに欲望の対象へと無限に近づきながら最後の一線で不可侵の境界に隔て閉じこめられる彼の愛の軌跡を予め描き出していたのかもしれない。「やがてパリが見えなくなると、彼は大きな溜息をついた」〔3〕。この溜息に、今後彼が辿る運命の予感がこめられていたわけである。パリの背後には唯一愛した女性が――それが船上でめぐり会った人妻だとはまだ判らないにしても――潜んでいたのだ。パリに行かなければそのひとには会えないのだが、しかし彼女に会うには航路の始発点にいる叔父の財産が必要なのである。さしあたり、相続を宙吊りにされた青年は、パリにも女性にも接近しながら、今は唯指をくわえたままなすすべもなく都市の中心を通過して、ルアーブル発の航路を遠心的に辿らざるをえないのだ。遺産、パリ、夫人、これらの関連のなかに輪郭を現わしかけているものを見定めなければならない。差当り、若い乗客が持ち合

わせていた唯一の財産の行方を追ってみることにしよう。彼はなけなしの一ルイ金貨を気前よく楽師に恵むのだが、それが初めて会った夫人の前で行われたという状況に目をこらさなければならない。もし彼女がいなかったら、普段は目もくれないだろう放浪芸人のために自分の食事を犠牲にするという、やや常軌を逸した行動までいくことはなかったかもしれないのだ。思慮を欠いた若い男の、見栄をはった他愛もないふるまいと取れなくもない。しかし後に、相手の女性は巨額の借金を青年に依頼してくるのだし、そしてこの依頼は彼の秘めた年来の欲望に関して、その利害に深く叶うものだったのだ。そうであれば、この時の鷹揚なふるまいは全く別の意味を持つようになるのではないだろうか。それほどの深謀遠慮が金貨の贈与者にあったと言うのは憚りがある。しかしテクストの廻り合わせで――これからも度々そういう言い方をしなければならないが――そうであるかのようにふるまったとは言わねばならない。いずれにせよ、この市場コードを遵守する作品では無償の贈与は許されていないらしく、昼食を抜いてなけなしの金貨が支払われたとすれば、それに見合うだけの何かを購おうとしてだったとまず考えなければならないのだ。でなければ心付けは与えられなかった。それはこの青年がやがて、金がなくなれば永遠不滅と思われた愛をさっさと諦め、相続すれば母親の願いには一顧だにくれずに、愛を求めてパリに走ったのと同じように確実なことなのである。『感情教育』の登場人物はほぼ全員が、後述のように思考でも行動でも、経済的なコードに支配されているのだが、その中にあってフレデリックだけが――愛するアルヌー夫人とともに――例外的に物質的利害に捉われない括淡たる人物であるかのようにみえる。しかし実はそういう表向きをアリバイに、逆にこのコードのもっとも有利な活用を図っていたのではないかと思われるふしが彼にはある。やがて遺産を相続した主人公は、なぜ一五、〇〇〇フランという大金をアルヌーに貸したのだろうか。負債で首が廻らなくなったアルヌーに寛大にもそれを差出した時、これが昔からの友情を裏切って行われた以上、単に新しい友人の困窮を見るにみかねてとい

うだけではない別の理由が働いていたと疑ってもよいのではないだろうか。しかも彼の妻は、船上で初めて出会った時、一ルイ金貨の心付けですでに気前の良さを見せていたあの女性なのである。これは貨与というより、その後催促がましいことは余りしないのだから、贈与だったともみえる。しかしもしそうだとしても、贈与とは、前述のように何らかの価値の無償の放擲という一方通行的な充足行為ではない。そうした見かけのもとに遂行される、おそらくは貨幣使用以前に溯るより始源的な経済交換の残存形態であって、等価交換の対象と目ろまれるものが明示されなかったり、商品としての明確な認定さえなく、そのために価格の一般的設定も行われていなかったりするにしても、これもある何かへの需要に発する消費行動として理解すべきではないのだろうか。ところで一九世紀なかばにおいて、ブルジョワジーをプチ・ブルや庶民から隔てる収入基準は年収でおよそ四～五、〇〇〇フランだったと言われる。[2] するとブルジョワが三年間体面を保つにたるだけの額を、主人公は借用証書も求めずに貸したことになるのだが、しかしそれによってこの金の負債としての重圧がいささかでも軽減されるわけではなく、それは返済されないかぎり、各人物が利を求めてたがいに鎬を削りあうことが、自ずから市場コードの厳格な遵守の遂行となっているらしいこの作品にあって、債務の履行を陰に陽に求めてやまないだろう。というより人々は各自の利益を追求するなかで、自ずとこの市場的障碍に引きよせられそれを恰好の餌食として攻撃することが、結果的にそのまま負債の清算という市場コードを達成するための仕掛けを正確に作動させているのである。この作品において、経済の liquidation（清算）が物語の liquidation（終結）ともなるのは、市場コードの実現がほぼそのままこの物語の仕組みをなしているからだと思われる。したがってこの負債のかたがつかない限り作品が終ることは許されていないということを予め断っておかねばならない。

一章　世界という商品目録

『感情教育』の前景に登場する一ダースほどの人物たちは、ただ勝手気ままな私利私欲に駆られて、ある時は協力しある時は裏切り敵対し、その結果全体としては統一に欠けた、混沌たる運動にのみこまれて浮き沈みしているだけのようにみえる。ところがある距離をおくと、錯綜した非分節的な出来事のかさなりが、整然とした構造として浮かびあがってくるように思われる。おそらく舞台の背後に廻れば、実は唯一つの中枢の歯車が、たしかに他の様々な連動する歯車の複雑な組合せを介してであろうが、それらのしばしば互いに無関係にみえる出来事をひきおこし制御している装置のようなものが覗けるに違いない。友人のデロリエは、社交会とは、「数学的法則で動く人工的創造物」であり、たとえば昼食、要職にある人物との出合い、美女の微笑という「一連の連鎖的な行為」が、「原料をいれるとそれを百倍の価値のものにするあの機械のように」、巨大な利益をもたらす仕掛けなのだと信じている。これはある程度テクスト自体の暗喩でもあるだろう。「あの機械」とは、一九世紀半ばとくに第二帝政期に最盛期を迎えていたフランスの産業革命における、大量生産による驚異的な商品の、そしてそれを通じての富の、生産装置を思い浮かべていいと思われるが、たしかに登場人物たちの入り組んだ、一件偶発的でしかない関係の結節とそれに基づく出来事の形成は、結局はある宝物ないし富の追求という一つの目的へと向かって動く、機械の各工程段階だったことがわかるのである。

リセを卒えた二人の青年は、それぞれの野望を抱いてパリに出てくるが、それはまだ原料にすぎないものを、この巨大な加工生産機械に入れることで製品化して、やがて「百倍の値打ち」に自分を商品として売りつけたり、それをもとに欲望の対象を買ったりするためだろう。そして、この自分の売りこみや消費が市場としての――そして

市場主義が抬頭しつつある――パリという都市を前提としていることは言うまでもない。もっともこの商品と富の生産機械は、どんな原料ないし人材的投資でも受けいれるわけではなく、階級的選別をその仕様に含んでいる。それは富者を維持するための、局在的富の再生産しか行わないのだ。そうした装置は――パリだけに限らないが――その五～六〇年前にインプットの手直しがなされ、ブルジョワジーもそこに公けに参加する資格をえたが、この調整がその大義のもとに遂行された平等の原則からはほど遠いものであることは、一八四八年を前にますますおおいがたくなっていた。富の再配分への要求が持たざるものの間に除々に高まってくる。もっともその運動に共感しながらも、しかし本日ただいまの逼迫に追いこまれている者には、たとえ未加工であれ自分をただちに売りこまざるをえない。それに需要の発生が、流通の媒介者を通じてだが、あるものを商品として対象化するのだから、目先のきく商人による需要の創造や素人の気まぐれが新たな商品の存在に光を投じることもあるだろう。要するにパリは、ものや人が突然予測しがたい商品価値を帯びうる、つまりすべてが商品として売買されて流通しうる高度に市場的な場になっているらしく、それが二人の青年をこの地にそれぞれにひきつけていたのだ。一人は富で何かを買うために、もう一人は反対に富や地位を得るために。フレデリックは遺産を相続するやパリに女性に会いにくるとしても、その女性がパリから逃げだしてしまうと、決してその後を追ったりはしないだろう。その愛はただ市場経済の発達したパリにおいてしか追求しえなかったとでもいうようなのだ。

パリではなんでも商品になりうると言ってしまったが、たとえば芸術は金銭にかえられるのだろうか。日々行われている質的差異の、価格という均質な数量的度合いへの変換は、いわゆる使用価値、交換価値、労働時間などの要因によっては説明のつかない現象である。あるものとその価格化は、いわば手術台上の「ミシンとコウモリ傘」を引離す深淵と同じものに隔てられているはずなのだ。ところが後者が暗喩として結びつく詩的契機に伴う眩惑を

少しも感じることなく、われわれはこの深淵を日常的に行き来している。まるであるなにかが、はじめから商品として内在的本質的な価値を持っていて、その価値に応じて価格が設定されているかのような幻想のなかで、われわれは足下の深淵を意識することなく買ったり売ったりして日々の生活を営んでいる。価格化には、原料費、加工費、仲介手数料、運送料、利潤、買い手の消費能力などといった算定基準がないわけではないし、たしかにそのためにいかにももっともらしい権威を帯びてわれわれの前に登場するのだが、しかしそれは結局は全くの虚構でしかないだろう。二点の絵画の、あるいは同一絵画のしばしば驚くほどの価格差はこれらの与件では説明がつかないからである。価格とは、丁度言葉がその指向対象である世界に対してそうであるように、それが課されるものやことは本来的に有縁的連関のない、恣意的で自律的な体系なのに違いない。一つの絵画の取引き価格の違いは、その価格がそこに発揮された技術力、独創性といった内在的な美的価値によって決定されるかのような幻想を払拭するのに充分である。いやすでに、美自体の評価が世俗的権威、流派的敵対、宣伝、タイミング、市場的都合などの外的条件の産物でありうる。たとえ、美の質的価値が決めうるとしても、その価値と商品としての価格という互いに何の共通点もないものの間に、どんな合理的対応を打ちたてることが可能なのだろうか。いわゆる一流の画家の未完成なデッサン（五、六本の描線のなぐりがき）が、二流と目される画家の精魂こめた佳作よりも高値で取引きされているのは美とは別の問題ではないだろうか。さらに、絵画の号数による価格算定は美と価格の対応に根拠がないことをさらけ出している。ではこの場合、材料費と労働時間が算定基準なのだろうか、という振り出しの間に引き戻されるのだが、しかしそれではある作品に高額がつけられる理由を説明できない。あるいは二人の画家の、時として数倍におよぶ価格差も、そこから導くわけにはいかない。要するに交換価値は、諸要素の共犯的虚構なのだ。それらの要素（労働費、材料費、完成度、需要……）の一つとしてそれ自体では実質的根拠になりえず、唯それら相

互のたえざる責任転嫁的な送り返しの中で、幻想的にもっともらしさを作りだしている。最終的な要素は消費者の購売意欲であろうが、宣伝によってそれが唆られて、売上げ増大につながりうることは、これも価格の非現実性をよく示しているだろう。さらに付け加えれば、ある文学作品が人々の嗜好に投じて大量に販売されたとしても、その市場価格が材料、労働、美的価値と殆ど何の関係も持たないことは改めて述べるまでもない。この場合それは、価格の設定が事後にしか判明しないことからも言える。ここで言う価格とは本の単価ではなく、総売上げから生じる、印税その他の売り手側の利潤であるが、すると本の価格とは予め決めえないことになる。それは人々が個々の消費行動を通じて、しかし市場相場に参加しているという意識を持つことなく、結果的に――しかし全く絶版にするまでは常に暫定的に――しか算定されえないわけだから、これ以上にはっきりと価格算定の虚構性をあらわにするものはないだろう。とはいえこれは大量生産される全ての商品に当てはまるし、美術作品や骨董のようなものも、市場取引きにおける評価額と落札価格との違いを通してすでに垣間見せていることなのだ。第一、この専門家による評価額自体が虚構の所産である。にも拘わらず、専門家や画商が、まるである美とある金額とを結ぶ一般的尺度が本当に存在するかのようにふるまい、もっともらしく商取引きを実践しうるのはなぜなのかといえば、それは、相場という、両体系間の乗りこえがたい深淵を、いつか誰かが最初に目をつむって渡って以来営々とつみあげられてきた、市場の取引き実績からなる値段表が、もはやその恣意性も虚構性も意識されずに、彼らに伝え課されているからである。一〇万で仕入れたものを、その一〇万の根拠は判らなくても、一〇万以下で販売しようとはしないということだ。つまりいつからか転倒が生じているのである。ものがあって、それに価格を与えて商品へと記号化するのではなく、始めに価格表があって、それを通じて世界が商品として立ち現れてくるようになったのだ。これは言葉の経験に似ている。始めはものを命名する過程があった、という起源を論理的に設定することができる。し

かしその名称は指向対象とは――命名の心理的動機には立入らないことにして――有縁的関連がなく、恣意的である。つまりものと名称の間には深淵があったのだが、一度命名によってそれを跳びこえて以来、詩的契機などによる眩惑的な落下を経験する稀な一瞬を除けば、それが意識されることはないからである。ものから名称に行く難儀な過程が履まれることはもはやありえず、世界は名称の一覧表を通して指向対象として、さらに統辞論的に整序されて、つまり記号化されてしか現われてこない。「今朝から、雨が降っている」、「川の方へ泰子さんが走っていった」という出来事は記号的にしか起きていないのだ。価格と言葉のこうした類似はおそらく偶然ではなく、同一の記号的基盤に発しているに違いない。どちらの記号的約束ごとも、その受容は社会に人間として受けいれられる基本的条件でさえあろう。つまり幼児はこの二つもしくは唯一の深淵を成長過程のどこかで跳びこえることを余儀なくされる。言葉と数の習得による世界の虚構的把握の訓練は、社会生活に必要な基本的な学習項目である。おそらくそのうえで世界の商品としての価格化の受容という経済的学習が行われる。ものごとには、丁度そのどれにも名が与えられているように、おそらく所有の自覚とともに、そのどこかに必ずそれぞれの価格が記載されていることに気付きはじめるのだ。世界の記号的目録としての百科事（辞）典のように顕在的ではないにしても、その数値という同一の単位によって序列化された商品の目録として、世界を一元的に編集した大百科カタログの存在を仮定することは可能なのである。そこにおいては、やはり丁度百科事（辞）典が互いに全く類縁関係のないものやことを唯同じイニシァルや綴りで始まるという理由だけで、その質的相違はいささかも顧慮されずに隣り合わせや一つのまとまりの中に置かれるのと同じように、全く異質なものや行為が同等なものとみなされる。同一の単位によって評価され揃えられ、そこには数量的な度合いの差しかないので、取引きは等価交換として成立することになる。あらゆる見掛けにも拘わらず、価格はその商品自体の質的価値から導きだされているわけではないからである。

ものと価格を理論的に隔てる深淵を、しかし人が日々やすやすと往来していることへの驚きを、アルヌーも彼なりに一度は体験していたに違いない。いっぱしの画家のつもりだった彼が、結婚後、「数枚の絵がいい値で売れたのをきっかけに画商（le commerce des arts—芸術商）」〔171〕へと転じたのは、よくあるような挫折した画家がつぶしをきかせた安易な商売替えというより、その契機を見るかぎり（「絵がいい値で売れた……」）、美的価値と価格が現実に等価交換されえたという驚くべき発見があったからではないだろうか。もっともこの等価交換に重点をおくと、美をつくって金を得る画家と美を手に入れて金を得る画商との隔たりは殆どなくなってしまうのだが、それは実際の売買を通じて例の深淵を渡った後だから言えることなのだろう。そして一旦渡ってみると、美とは何より消費者の需要の問題となる。やがてアルヌーが贋物を扱うのも、陶器工場の経営にのりだすのも、美術・工芸のそれぞれの美的価値とは無関係でありうる価格の虚構性に目覚めたからではないのだろうか。そしてそれは、理論上は越えられない美と金銭との次元的隔たりを、等価交換の成立を通じて渡った最初の売買の中にすでに書きこまれていたことだといえる。後に他人の金をだましとって、つまりいわばゼロ商品を五万フランで買わせて詐欺罪で告訴されそうになるのも、だから両体系間の交換関係の幻想性を知悉したうえで、それをいわばとことんまで突きつめた行為だったかとも思われる。商道の虚実に開眼したらしいこの人物にとって、世界は前述のような商品の無尽蔵な堆積体として姿を現わしはじめていたのに違いない。二月革命後の六月暴動で国民軍に参加していた頃、彼は北部鉄道の路線の土提にジャガイモを植える（遊休地の活用ないし耕作地の開発）とか、パリの大通りに名士に騎馬行列をさせて、道すじの窓を借りきってそれを三フランで貸す（祝祭空間としての都市のスペクタクル的商品開発？）といった殆ど無から利潤を創造する類いの、ひょっとすると天才的なのかもしれないアイデアを主人公に打明けるが、この想像力も常日頃磨きあげた商品目録的世界認識のたまものと思われる。では、こうして絵画が金

銭と等価交換されたのだから、あのもう一つの美（beauté）が彼の眼に商品として映らなかったはずはないのである。

二章　結婚と売春

もう一つの美、つまり女性の需要と供給は、大古の昔から階級や地域、文化のわけへだてなく行われており、その欲求は生物学的基盤に根差しているのだから、支配階級（王、貴族、僧侶）の専有からとりわけ一九世紀前後市民層に盛んに販路が拡がりはじめたらしい絵画のそれなどとは比較にならないほど、古く根強い、安定した一大市場を形成してきたといえる。この美ははやりすたりの影響を受けることがないのだ。その取引き――という言葉を使えば――の仕方は、ごく単純化すると婚姻と売春の二種類に分けられる。この両者は、今日の家族制度をつくりだした多かれ少なかれ父権的社会においては一見乗りこえがたい溝でへだてられている。しかし道徳的価値観を取除くと実はそこにはせいぜい同一の事象の二つの様態という程度の違いしか残りそうもない。どちらも愛を提供することで代償に金銭などの財を受けとっているからだ。女性は結婚によって妻となり母となって、夫の家の衣食住の管理およびとりわけ出産による家系存続にいわば身を挺して従事しなければならないが、この職分を遂行するかぎりでは生活は保証される。他方、売春において女性は、単にその度ごとの売買交渉によって金銭を受けとって愛のサーヴィスを与えればよく、妻、母という隷属的な家事労働者の役割に縛りつけられることからは免れる。しかしその自由の代償として生活は不安定にならざるをえない。ロザネットが時に女中に借金するまで手本が不如意になるのは、経済管理には不向きな気紛れな性格がわざわいしているというより、その前に彼女の職業に固有の不安定な収入のあり方があって、その帰結として気紛れな消費生活を余儀なくされているからではないだろうか。年齢

上の制限もある。結婚した女性が、ある年齢を過ぎた時に、丁度せっせと積み立てた年金の恩恵に預かるように、それまでの出産・育児や家庭のきりもりなどの労働を通して、そして様々な絆（夫婦、親子、親戚、隣近所……）を形成することで、次第に家庭内の地位を揺ぎないものにし経済的な発言力も強めていくのに対して、もう一方の女性は女性としての色香が褪せると、職業を変えでもしないかぎり収入の道がたたれる。面倒を見るべき次世代を家族として準備していないのだから、特別な財産や後継者を作っておかないかぎり生活は余り恵まれたものにはなりそうもない。あまつさえあの差別、女性の二様態の労働の仕方を、単に区別するのではなく、強圧的に引離して一方を聖化し他方を不名誉と侮蔑と汚辱の烙印によって時には犯罪すれすれの排除の境界にまで閉じこめる差別の重圧に耐えねばならない。これらはいわば待遇上の相違である。しかし愛と金の互酬交換という点では、両者の間にいかなる相違もつけることはできず、同じ類いの売買行為に属すると考えられるのだ。

ダンブルーズ邸のパーティに出席したフレデリックが、居ならぶ貴族やブルジョワジーの婦人たちを眺めながら感じとったのは、ほぼそういうことだった。胸もあらわな挑発的な衣裳に身を包んだ彼女たちは愛の奴隷としてのハレムの女を彼に思わせ、さらに「あらゆるタイプの美（ボ）（＝美女（テ））」〔160〕が寄り集まったところは、よりどりみどりの女たちを侍らせた売春宿との「淫らな比較」へと導いているのである〔161〕。上流社会の貴婦人から娼婦へのこの移行は、両者を隔てる断絶がかりそめの約束ごととして辛うじて成立しているにすぎない事情を暗示しているが、それを主人公が気がついたことは、彼のこの後の行動の意味を解くうえでなかなか重要な手掛りになるだろう。一般にこの作品に登場するパリの男や女たちは、結婚と売春の区別をやや曖昧にしているふしがある。女性でいえば、ダンブルーズ夫人は不倫においていささかの疚しさもなしに妻の役割を逸脱し、ロザネットは娼婦から妻と母の立場へと人格的断絶を経ることなしに取引き様態上の転換をはかる。この区別を小心よくよくと守ってい

るのはアルヌー夫人ひとり位ではないだろうかと思いたくなるのだが、ところがこの貞淑なる妻で子供思いの母親が、案に相違して他の女性以上にその点でいかがわしい面を隠しもっていたのではないかという疑いがあるのだ。さしあたり、妻と娼婦を分つ神聖たるべき断線を、いとも安々と往きつ戻りつすることで一貫してそれをはぐらかしなきも同然にしている人物がいて、それが彼女の夫だということに注意をひいておこう。この「美（ボテ）」の商人からみると、妻と娼婦の区別はどうやら同一商品のデザイン上の相違でしかない。いやその相違すらないのかもしれない。たしかに、彼の所有する二人の女性は全く対照的な姿で提示されている。愛人のロザネットは浪費家で気まぐれで、あれこれの遊びや衝動的な買いもの、芝居見物などのその場限りの享楽に耽り、気分もむらがあって「途方もなく陽気に騒いだかと思うと、子供みたいに怒りだす」〔145〕。それに対してアルヌー夫人は家庭を預かる主婦、とりわけ子供の教育や財産を管理する母として登場する。家族に食物を与え、子供を細やかに育てしつけ、フレデリックが訪れると「ほとんどいつもおちびさんに読み方を教え、マルト（＝姉娘）がピアノの音階練習をする後に坐っている」〔145〕か、「針仕事」をしている。そういえば彼がはじめて会った時も、すでに彼女は船上で裁縫箱をひろげて刺繍に余念がなかったし〔6〕、その最後の訪問においてさえ、家庭的婦人の特技を生かして、わざわざ青年のために刺繍をあしらった財布を作って持参するのだ。この家庭婦人つまり母にとって、夫のアルヌーの憤慨すべき点はその浮気ではない（「彼女を怒らせているのは夫の不行跡ではなかった」〔171〕）。彼の事業上の不振が子供の将来に投げかける財政上の不安のためでもあるのだ。彼女は主人公に、「夫の悪徳よりも彼のそうしたやり方〔＝投機への打込みや金遣いの荒さ・引用者注〕を非難し」〔171-2〕、「やることなすこと子供たちを破産させることばかり」〔168〕と愚痴をこぼす。子を思う母の背後に、一個の女としての夫への愛憎の念は――もしあればだが――おおい隠されている。この二人の女性は、一方はいわば日払いで働くあなたまかせの放縦な娼婦、他

方は子供の将来を考えて堅実に家計をきりまわし、夫以上に財政の収支に苦慮し、時には夫の尻拭いも引受ける威厳のある良妻にして賢母、と典型的なまでに対照的に描き出される。そこには越えがたい隔たりがある。にも拘わらず「美」の商人アルヌーは、妻と愛人へのふるまいを同一にすることで、この境界線を、それだけ深く撹乱するのだ。この区分の曖昧化はこれもアルヌー個人を越えたテクスト上の戦略に属するというべきだろうか。というのも、彼女たちの「二つの住居」がすでに「よく似ている」からである〔146〕。「二軒の食器セットは似通っていた」し、「安楽椅子に投げだされたビロード帽まで同じ種類」なのだ。この類似の上に、アルヌーによる同一化が進められる。同じ品物が両家を往き来するのだ。画商は、「一方にあげたものを取返して他方に与える」ので、「衝立、箱、扇といった数多くのちょっとした贈り物が、愛人の家と妻の家を往ったり来たりする」〔Ibid〕。前述のように贈与とは無償の一方通行的な提供ではない。対価としての金銭による支払いを見返りとして表立って要求しないとしても、それはやはりサーヴィスなどとの等価交換を暗黙裡に前提とする。アルヌーが二人に時々贈り物をするとしても、それは彼の所有権を維持する費用の一部として捻出されたのだ。逆に女性側からみれば、アルヌーとの関係は多かれ少かれこうした財貨の供給なしには成立するはずがない。したがって彼を唯一のそして長期の収入源とするかしないかという違いはあるとしても、同一の品物による彼女たちへの支払いは、二人を隔てる社会様態上の擬制的相違に揺さぶりをかけ、その権威の根拠をさらに薄弱にして、結局そこには唯一の売買行為しかないのだという認識を秘かにはびこらせる。それも二人の女性に同じ価格（同じ品物の贈与）がつけられたわけだから、もしこれが夫人に知れたら、それはこの社会ステータス上のわずかな差を妻である自己の存在理由として誇りを持つはずの彼女には、とうてい許し難いこととして映るに違いない。夫のアルヌーが自分にくれたものと同じカシミアの肩掛けを他の女性に贈っていることが発覚した時の彼女の怒りは〔166-7〕、夫に情婦がいたこと自体よりも、そ

れによって妻である自分と情婦とをあからさまに等しなみに扱った、夫の無礼な態度にも向けられていたと思われるのだ。「彼女を憤慨させたのは夫の不品行ではなかった」〔ibid〕、もう一つの理由はそこにある。彼女はむしろ「自尊心を傷つけられ」たという。なぜなら夫が「思いやりに欠け、品位がなく、名誉心の薄い男」〔171〕だからである。この《sans délicatesse, sans dignité sans honneur》とは、別の言い方をすれば、妻と娼婦との間に画されるべき一線を「いささかのばつの悪さ」も覚えずに掻き乱し、妻も金で買える他方の女と変らないことを、自分への「思いやり」もなくさらけ出して顧みない「品位のない」、夫の商品的世界観をさしているのではないだろうか。「名誉を重んじない」sans honneur とは「体裁を重んじない」とも取れるのだ。様態的相違を本質的対立であるかのように拘泥する夫人の考え方は、肩掛けのいさかいの後、夫が食事に誘った時の反応にも現われている。夫としては自分の「愛情のたけ」を見せるつもりで「黄金亭の個室で二人きりで夕食をとろう」と提案するのだが、妻はそれを怒って断わる。なぜならそれは彼女を「娼婦扱い」にし、「侮辱」することだからである（《s'offensant même d'être traitée en lorette》, 175）。彼女が大事にしていた銀の小函が、ある日ロザネットの客間におかれているのを発見したフレデリックは、「言語道断の冒瀆行為」〔260〕に接したように感じるが、こうした物の流れは、社会の規制や禁忌ないし偏見に敬意を払うには余りにも価格的平準化に馴致され、そのために骨の髄まで平等主義の滲透した商人にとっては、ごく当然の行為（商行為）でしかなかったろう。夫の物の見方に衝撃をうけたアルヌー夫人は、では彼に真向から対立する考え方の持ち主だったと言えるのだろうか。ここで気になるのは、彼女がアルヌーと結婚した経緯をみると、ロザネットが初めて男に売りとばされた時の状況に余りにもよく似ていることである。

彼女は夫が自分を心から愛しているし、「今でも愛しているのよ、彼なりにだけど」〔171〕と言うのだが、では

彼女自身はどうなのか。彼女はアルヌーを愛しているのかどうかは全く問題になっていないのである。しかしもし仮に愛情を抱いていたとしたら、夫の不倫への怒りが、妻としての体面や子供の財産の不安に終始して女としての嫉妬へと結びつかないのは不思議だと言わねばならない。それだけ取ると彼女の夫への態度は、身を売る時に愛情的つながりは二の次になる娼婦のそれと一脈通じていることになるだろう。となると、ではなぜ彼女はこの人物と結婚したのか？　夫人の語るところによれば、ある日、当時まだ画学生だったアルヌーがたまたま写生に出かけた先で、教会から出てくる彼女を見かけ、結婚の申込みをする。その時相手側に「ためらいはなかった」という〔171〕。どうやら一目見て即座に申込んだような具合で、だからそれほど彼女が気に入ったのだと言えなくもない。これが当時の婚姻の慣習や儀礼にどれだけ合致しているのか判らないのだが、いずれにしても相手の身元や気性を確かめたり、しかるべき人を間にたてて訪問し、交際を重ねるといった過程をふまれた気配はない。ただ器量好みで選んで、即結婚へとことを運んだかにみえるなりゆきは、犬の子を飼うのならともかく、一生の伴侶を決めるにしては、やはりお手軽すぎる印象を拭えない。これも娼家での女選びにこそふさわしいやり方といえなくもない。にも拘わらず相手側は一も二もなく承諾したというのだ。未来の妻の方に、この唐突な求婚者への愛情が芽生えたとか、そういうものが育つのに必要な時間の経過があったということへの言及はどこにも見当らない。いやそういう相互の精神的交流に目を注ごうという配慮さえ無いのだが、それは愛情の問題がこの結婚においては全く重要ではないか、もしくはそもそもの初めから存在していなかったからではないだろうか。ではなぜただちに申込みに応じたのか。その理由として書かれていることは、単刀直入に「彼が財産家だった」という一言なのだ〔ibid〕。まずこれ以上簡にして要を得た言い方はない。金目当ての結婚、金と引換えに愛を与える取引きだったのである。いわゆる正式な結婚だったには違いないが、器量好みの金持ちに女性の美が金で買われたという事実は紛れもなく、それを娼婦

の身売りと区別することは難しいのだ。あるいは、だからこそこの愛の売買は、結婚の本質に根ざすかたちで成立していたというべきなのである。少なくとも、妻と娼婦をへだてる境界線はすでに結婚の動機から曖昧にされていたのである。それもやがて商人になる夫だけのことではなかった。愛と金の等価交換を可能にする彼の価値観は、その申込みに応じた夫人の側にもかなりはっきりと分ち持たれていたことになる。一体誰がためらわずに求婚を受諾したのかは明確には示されてないが（《On n'avait pas hésité》）、そういうことは相手が金持ちであれば余り重要ではなかったという風にとれる。意志決定主体の on は、結婚に対する未来の妻の感情は問題にされていないことを窺わせているが、その分だけ婚姻は彼女を商品とする取引きの性格が強くなるだろう。それにプチブルの家族において若い娘の結婚で決定権を握るのは、やはりなんといっても子供より両親だっただろう。すると on の使用は婚姻の商取引きの様相を逆におおい隠していたともいえる。ところがこれはロザネットが最初に母親によって男に売りとばされた時の状況と、構図的にきわめて近いのである。彼女の両親は職工だったが、一五歳の時、家財を売りとばして酒代にあてるような母親に、仕合わせになれる、立派な贈り物を貰えると丸めこまれて、ある晩テーブルにごちそうが一杯に並べられた部屋にむりやり連れていかれ、そこで「一人の紳士」の囲いものにされる。それ以来男たちに愛を売って生活していくようになるのだが、結婚と売春、ないし金持ちの妻になることと食べもので釣り贈り物などで支払うという社会ステータスの差はあるにしても、金と愛の等価交換を前提とした取引きという点で二人の女性の身のふり方に区別をつけることは困難だと言わねばならない。まさにこの文脈に、あの一五、〇〇〇フランが置かれねばならないのである。美術・工芸であれ女性であれ、「美」は商品であるという考えがどの登場人物の行動の選択にも重く圧しかかっている価値観のなかで、その場の中心をしめる一人の妻が、しかも夫との仲が冷えきった折もおり、ある青年に巨額の借金を申込み、一方彼女を心から愛し、思いを実現する機会を虎視

たんたんと狙っていた相手の青年が、それに応じて惜しげもなく大金を差しだしたとしたら、それだけでこれははたしてそう見える通りの善意に発した無償の贈与なのか、それともロザネットに母親が斡旋した男からの贈り物と同じ性質の供与ではないのか、とひとまず疑ってかかる必要があるだろう。彼に夫人への愛がなければ、これだけの大金が長年の友人との約束を踏みにじってまで、アルヌーに渡されることはなかっただろうとは差当り言ってよいように思われる。したがって何がその反対の秤皿に対価として載ることが期待されえたのかとつい想像をめぐらしてみたくなるのだ。だがそんなことを言えば、主人公の愛情の純粋さを疑ぐることになるのだろうか。だがまさにそれが疑えないからこそ、この大金は無償の供与とはなりえなかったともいえるのだ。

三章　一五、〇〇〇フランの贈り物

供与の経緯は、だから詳細に検討する必要がある。まず、一五、〇〇〇フランは一体誰に貸されたのか？　フレデリックは借用証書など取らずに大金を貸したわけだが、もしそれを作成していたら、借用主の欄には当然アルヌーの名が記されていただろう。それが作品を通読してのおおよその印象であり、主人公は友人である画商の困惑を見かねて融通に同意したのだというふうについ思うところではないだろうか。しかし、さし迫った差押さえの危機を逃れようと工面に訪れたアルヌーが、フレデリックに借金の相談を持ちかけた時、相手はそれを最初はすげなく断っていたことに注意しなければならない。窮状に陥った友人への心からの同情の念といったものはそこには見られなかった。だから、彼が間もなく意を翻してその金を友人に用立てることになるとしても、それは友情に発する行為ではなかったのではないかと疑わねばならない。その大分後に主人公がシズィと決闘した時、それをとめに駆けつけたアルヌーは、その原因を自分のいないところで悪口雑言を吐いたらしいシズィにフレデリックが友情の念から

喧嘩を売ったからだと頭から決めているが、それに似た誤解がわれわれの借金の解釈につきまとうおそれがあるのだ。第一もともと、アルヌーへの友情の念から主人公は彼の家に頻繁に出入りしていたわけではないだろう。お目当ては別にあったのだから、苦境に陥った画商への彼の最初の反応が冷やかなものだったとしても不思議ではない。それに、もし友情だけが問題ならば、この金はアルヌーよりもむしろ、共に青雲の志を抱いてパリに出てきたリセ以来の友人デロリエに渡っていたはずなのだ。一五、〇〇〇フランはもとは、大学教授になる望みも断たれ、あれこれの辛酸を嘗めさせられたこの弁護士が、今や人生の唯一の活路として残された新聞創刊の夢を実現する資金として用意されていたのだから、たとえフレデリックにアルヌーへの友情があるとしても、二つの友情を天秤に掛ければ、友情の古さは考慮しないとしても少なくとも先約に重みがかかるのではあるまいか。にも拘わらず、旧友への大事な約束を裏切ってまで一五、〇〇〇フランがアルヌーに渡されたとしたら、やはりその理由は、アルヌーへの同情以外にあったと思わねばならないだろう。では急な翻意の経緯はどのようだったのか。二人のその時のやりとりを読むと、その途中で友人の陥った困窮が突然フレデリックにとって意味を持ちはじめる箇所を突きとめることができる。それはアルヌーが、この負債が払えないと、「私ひとりではなく、子供たちや可哀いそうな妻の身にもかかわる」と打明けた時、そしてさらに言葉をついで、荷造りしてどこかに一山あてに行くまでだとパリからの逃亡を仄めかした時なのである。フレデリックは狼狽して、「まさか！」と叫んで相手の立場に深い関心を表わしはじめる。これは思わず心底を覗かせてしまったと言うところだろう。それを見たアルヌーが、今度は「落着いた様子」で、「こうなっては、どうして私がパリに住めますか」とパリ逃亡をもう一度突いてくるのは、自分の言葉のどこが青年の急所を打ったのかを見逃さなかったという風なのだ。なるほど、青年が「で、その金はいつ返せるんですか」と態度を一変させるのは、それに続く長い沈黙の後なのである。こうして画商は若者の弱みをしっかり

握ったのではないだろうか。こういういきさつを経て、旧友の仕事の資金になるはずだった一五、〇〇〇フランは、画商に手渡されたのだから、それは画商を気の毒に思うからでは少しもなく、夜逃げを迫られた彼が妻を遠くパリの外に連れだす事態を、なんとしてもくいとめるため以外ではなかった。では大金は誰に貸されたことになるのだろうか。アルヌー夫人の存在なしに夫にその金が提供されることはありえなかったとは少なくとも言える。ところで友人への裏切りを伴うこの決心に、彼がただちに踏みきれたわけではない。ひとまずその場は知りあいにでも当ってみるからとアルヌーを引きとらせ、散歩をし夕食をとりヴォードヴィルを一幕見物した後にも、まだふんぎりがつかずに思い悩んで帰宅した彼が、急遽決意を固めるのは留守中に届いたアルヌーへの手紙に目を通した後なのである。そしてそれはまさに大金供給の動機に関する疑惑を確認させるかたちで行われるのだ。開けてみると、それは「友よ、家内も私と共に期待いたしております」という文面で、なるほど夫人の略署（パラフ）が添えてあった。「彼の奥さんが！　あのひとがぼくに頼んでいるんだ！」〔184〕。ここで趨勢は決まったと言える。そこへ間髪をいれずに、まるでようやく傾いた彼の気持ちがぐらつくのを恐れるかのように、朝帰ったアルヌーが借金の首尾やいかんと再び姿を現わして、ことは否応なく結着をみる、「さあ、ここにありますよ」と。この金はすると誰に用立てられたことになるのだろうか。その金は大袋入りで銀貨一五袋分に相当するのだが、実は朝それが届いたとき、彼はすでに、これだけの大金（ブルジョワの一家族が三年間体面を保つにたる、或いは曲がりなりにも新聞社を起こせるだけの金額）を新聞に投資するのは惜しい、色々と立派な美術工芸品が買えるし、第一アルヌー夫人に「どれだけ沢山の花束や贈り物」ができるかと、すでに先約を後悔しはじめていたのであり、この時もまるで頃合を見計ったかのようにそこにアルヌーが借金の相談に駆けこんできたのだった。陶器商の苦境を知る前から、夫人のために使うなら旧友を裏切ってもいいという気持がすでに彼のなかに萌していたわけである。一五、〇〇〇フランの供与は、

したがって夫人へのこの「花束や贈り物」の延長上に、彼女をパリに引留めるという切実な願望において実現したと言わねばならない。この貸借関係において名目上の借主はあくまでアルヌーだが、夫人の存在なしには成立しなかったというだけでなく、金は彼女に向けて差し出されていたのではないか。しかも最初は自分には何の関係もないとばかりに名義人の背後に隠れていた彼女が、除々に交渉の表に姿を現してくる。被害を受けるものの一人として負債の背景に影をよぎらせるだけだったのが、次には略署の頭文字によって嘆願者のひとりとして名をつらね、さらに成立後は公証人にその抵当登記をすることをアルヌーに提案したのは彼女だというのだから、名義上の借り主以上に負債を重く受けとめていたわけである。実質的な貸借関係は彼女との間に成立していたからではないだろうか。そう考える方が、やがてもう一つの債務に関して、夫の代理にせよ夫人自身がフレデリックの部屋に依頼に出向いてる成行きとも辻褄が合うだろう。銀行家ダンブルーズへの計四、〇〇〇フランの約束手形がこれも期日までに払えずに、しかも今度は夫人が依頼に来るだけではない。約束手形には彼女自身の署名がしてあり、その件がこじれて後に彼女の家財が差押さえられるはめになるのだから、第三者への口利きの依頼だとしても、ここでの経済関係は夫人との間に直接に結ばれていたことになる。さらに、この第二の依頼の訪問において、第一の依頼がこれも何を隠そう彼と夫人こそその実質的な当事者であることが、一瞬照らし出されてもいる。用件を切りだす前に、夫への先日の心遣いを感謝する夫人に、フレデリックは「それはあなたのためでした」を「意味する身振り」で答えているのである〔187〕。であるなら、夫人のほうが抵当登記を提案しても、なるほど不思議ではなかったと遡及的に首肯けてくる。もっともこの折角の抵当の配慮は実現されないのだが、しかし結局フレデリックへの一五、〇〇〇フランの返済が遂行されるのは、夫人の手によってなのである。第二の約束手形の件も、第一の賃借関係も、やはりアルヌー夫人との間に成立していたというべきではないだろうか。だがこれは、単なる尋常な金の貸し借り

だったのだろうか。そこにはそう呼ぶのをためらわせるものがある。フレデリックが金を渡すに当って、利子はもちろん受領書さえ取らなかったことは今は不問に伏そう。主人公は夫人がパリを去るのを妨げようと、金を貸したのだし、その動機が夫人への愛にあったことは言うまでもない。するとこの貸与は愛する女性を窮地から救うためだったということになりそうだが、果たしてそれだけなのだろうか。この前後の彼らの言動を辿り直してみると、ふしぶしにその種の同情とは微妙にずれたものに沿って、口にこそ出さないが三人が行動していたと思わせるものがある。借金や支払い延期の依頼と合意の下に、語られることのないある別の取引きが暗黙のうちに進められていた形跡があるのだ。といってもアルヌーが借金の依頼に当って、何かいかがわしい交換条件を申し出たというわけではない。少なくとも作者は、前作同様に風俗紊乱で告発しようと身構えるたぐいの読み手に向っては、そんな慎みのない取引きはこの本のどこにも書かれていないと胸をはって答えられたに違いない。たしかにその手の読者に尻尾を掴まれるような動かぬ証拠だの言質だのは表面的には残されていない。にも拘わらず、ことはすべて、この語られざる不可視の中心をめぐって展開していたというしかないように思われるのだ。

アルヌーはフレデリックに、二回妻の自慢話をしている。ところがその二回が二回とも、それぞれ借金と決済延期という二件の依頼のほぼ直前に当っているのである。これは偶然なのだろうか。女房自慢などべつに底意なしにやらぬでもないというには、前後に二度しかない自慢話のそれぞれのタイミングが合いすぎている。たしかにアルヌーが青年の前で妻の長所を吹聴するのは一五、〇〇〇フランの支払いがまだのっぴきならないものになる以前のことではないのか。しかし当時彼の事業はどれも裏目に出ていた上に、ロザネットにみつぐことなどによる濫費は目に余るものがあったようだから、財産状態はたとえこの負債がなくても、「近々の破綻」を予感させる程すでに恒常的に悪化していたろうと推測できる。ペテン師の悪評は相当前から立っていたのだから、なりふり構わず金策

に動かねばならない状態は昨日や今日にはじまったことではなかったのである。第一これほどの負債が、アルヌーのいうように「その日」になって急に返済を迫られたとは考えにくい。期日は次第に近づいてくるのに、支払いの目途は立たないままだったのだ。ダンブルーズへの約束手形の件もそれは同じことで、期日は前々から承知のはずのことである。とすると、画商の女房賞讃がよりにもよってフレデリックへのこの二件の頼みごとの前だというのは、やはりそれなりの理由があってのことではないだろうか。

アルヌーの女房礼賛はしかもかなり立入っている。「気立てがよくて、献身的で、頭がよくて、身持ちが固い」位ならほほえましいで済むが、「妻の肉体的な美点」まで持出して、宿屋で自分の宝ものを見せびらかす人たちのあの軽率さで「惜しみなく秘密を暴露」したとなると、聞く方は、一体なんのつもりかと相手の顔に不審の一瞥を投じるところだ。〔174〕。二回目も、頭の良さ、気立て、家計、どれを取ってみても「比類がない」と賞めちぎった後で、目を廻しながら低声で、「女のからだつきでも」〔185〕と付け加えている。ついでに言われたようなことの中に真意をこめる場合もあろう。ひょっとすると、その種の斡旋業者が客の耳元に囁く言説にはこんな構成で女性を売りこむ仕方もあるのではないかと想像しても、この際場違いではないのかもしれないのである。この美（絵画、陶器）の業者が、もう一つの美の商開発にも手を染めようとしていた可能性はないだろうか。彼が世界の商品的平準化の帰結として、婚姻と売春の区別などには少しも捉われない自由な考え方の持主であることはすでに述べた。ちなみに夫人を娼婦扱いだと憤慨させたレストランへの招待は、この一回目の女房礼賛の直後なのである。一方、この後アルヌーは、妻にロザネットとの関係を問いつめられて、あの女はフレデリックの情人なのだと苦しまぎれに言いのがれをしている。しかしこうして自分の情人の所有権をその場限りの方便であるにせよ、青年に譲渡したことは、彼女と同列に置くことに何のこだわりも持たなかったもう一人の女性の所有権についても、じつは同

じ道をひそかにつけるものだったのではないだろうか。それに前者の所有権の変更は名義だけでは済まなかった。二月革命の始まった日、ロザネットは実際に青年の愛人――それも何から何まで夫人の身代わりとして――になるのだし、それはやがて間に一子を設ける仲にまで発展する。この二人の関係に気付いた陶器商は、だからといって情人を寝取られた男の、見苦しい嫉妬めいた様子を、ちらりとでも見せただろうか。むしろまたしても、「彼女を妻とひき比べ」、「その長所を賞ちぎって」、『あれほど見事な尻を持った女はいないね』などと平然とうそぶき〔319〕、骨の髄に徹した平等的世界観の面目躍如たるところをみせていたのだ。ロザネットは享楽の一般的対象としてすでに商品化されていたのだから、金次第でことが運ぶからといって今更驚くこともないのである。しかしながらこのことは、ここで改めて彼女と同列視されたもう一人の女性が、将来実際に寝取られるはめになったとしても、不倫だからとそう悲劇的にうけとめることはないのだろうと想像させる。それどころか、もしそのお陰で大金が入り、一家に降りかかった破産の憂き目を免れられるならこれは結構そろばんの合うビジネスになるのだとは言えないだろうか。アルヌーがロザネットのことで達観して応じたのは、金を払えば誰もが平等に商品の所有権が持てる平素の商品的世界観のたまものである。この頃借金で首が廻らなくなっていたアルヌーには、だからロザネットへの権利はなくなりかけていたという理屈が成立する。もしそうなら彼女が誰の情人になろうと文句をつける資格はないが、この見方をもう一人の女性の所有権に適用することを妨げる障害は論理的にはないだろう。夫に借金を払う能力がなく夜逃げを迫られている以上、妻に対する彼の所有権はいわばその分きわめて薄弱になっているだろうし、一歩間違えれば破綻をひきおこしかねないその不安定さにあって、喉から手が出るほど欲しい金を差しだす男がいたら、その男は夫以上にその妻に対して権利を持つのではあるまいか……たしかに、そういう風には、ただちにはなりえない。娼婦ではないのだから、神の下の生涯契約である結婚制度が女性への夫の権利を、財産が底をついて

も表向き保証している。しかしその先をどう解釈するかは、夫と妻の胸しだいであり、少なくとも夫の方は妻と娼婦を分けへだてなく扱いうる自由、平等の世界観の持主であることは判明しているのだ。だからといってアルヌーが、繰返すように、借金や仲介の件でそれを叶えれば魚心に水心などと品性に欠けるような取引きを持ちかけたとか、相手がそれに応じたとは、確かにこのテクストのどこにも書かれていない。しかしそれにも拘わらず、ことはまさにそのように展開したというしかないように思われる。

四章

第一ブルジョワ紳士たるフレデリックの日頃の態度から言って、そんな取引きを正面から持ちかけられていたら、烈火の如く怒って一言のもとに侮辱を撥ねつけていたことは間違いない。あるいはそういう挨拶の仕方は心得ていたに違いない。実際、陶器商が二度目に妻の肉体を自慢した時は、腹にすえかねて、別れの相手の握手を拒絶しているし、シジィに招待された会食の席で、招待主がアルヌー夫人を《tout le monde connaît ça》（あんな女は誰でも――肉体的に――知ってるさ）と娼婦なみにこきおろした時は、我慢ならずに皿を投げつけて決闘騒ぎを引き起こす。主人公は、アルヌー夫人をロザネットのような商品として買える女と比べられるのに耐えられないほど清潔な夫人像を抱いていたことになる。だから夫人の部屋を飾っていた銀の小箱をロザネットの客間に発見した時も、「冒瀆に対するような憤慨」を覚えるのだろう〔260〕。他方、金に関しても、眼の色をかえてひたすらその追求だけを考える他の登場人物と比べて、彼が無欲恬淡たる人間にみえることは否定できない。富と地位を約束しているらしいダンブルーズの呼びかけの手紙には目もくれず、莫大な遺産を相続するはずのロックの娘の熱い秋波を尻眼にかけるのだから、「金など全く眼中にない」〔269〕という当人の主張も満更うそではないのかもしれない。ア

ルヌー夫人を口説くにあたり、「他の連中は富、名声、権力を得ようと懸命になっているが、私はそうじゃない」〔270〕と自分を売りこむが、言葉通りなら純粋、寛大、廉潔の士ということになろう。商品的世界観を体現するアルヌーなどとは本来お歯の合わない上品な人間なのである。従ってアルヌーが穢らわしい取引きなど持ちかければ撥ねつけこそすれ、万が一にも応じることなどありえなかったろうと思われる。しかし富、名声、権力に一顧もくれぬというのがたとえ本当だとしても、それはそうなるだけの余儀ない理由があったからではないだろうか。もう少しはっきり言えばダンブルーズの呼び掛けやルイーズの媚態を無視したのは、誰のせいだったのかである。どちらも、あの女性への愛が叶えられるかもしれない切迫した期待の中で他のことは暫時応対を見合わせたにすぎなかったからではないのか。「私の唯一の関心事、私の全財産、私の人生と私の考えごとの目的であり中心」〔270〕である女性への愛にひきずられて、他を顧みる余裕がないからといって、必ずしも無欲だとはいえないだろう。はたして、彼の「人生の目的」がもはや叶えられる見込みなく断念を余儀なくされるや、無欲恬淡なはずだった人物が、百万長者の妻にいいよるわ代議士選挙には打ってでるわと、人一倍強い富、名声、権力への執着ぶりをさらけ出すだろう。その欲望が、差当りはすべて夫人に向けられていたというだけなのだ。だから逆にそれほど熾烈だったといえる夫人への愛を、ついに叶える機会が、今や長年の苦労の甲斐あって目の前に差しだされているかもしれない時に、それに手を出さないでいられたとは考えにくいのである。しかも当時の彼は追いつめられていた。焦燥のあまり、ついには夜中に押入って彼女を拉致することさえ思いえがいた青年に、手段を選ぶゆとりは失われかけていただろう。また、商品経済化が進む中での金の威力には、清潔な青年紳士も決して疎い方ではなく、女性もその例外でないことは、ロザネットを、「あんな女は金でどうにでもなる」〔215〕とアルヌーの向うを張るようなことを口走っているのでも察しられる。だが娼婦ならともかく堅気の人妻に対してはどうなのか。表面的にはともかく、彼の考え方

はこの点でアルヌーとそれ程違っていないのかもしれないのである。父の遺産が思いの外少ないからといってあれ程打ちこんだ「人生の目的」への執着を断ち、叔父の遺産を相続するや母の手を振切ってパリに夫人に会いに行く、その行動を決めているのは「美」の商人と同じ世界観なのではないだろうか。だから、ようやく探し出した夫人に、どうしたら「自分の価値を示せる」(se faire *valoir*) かと思案した挙句、「金以上に良いものは見出せずに」、相続の一件を仄めかすことになるのだ〔136〕。するとやはり、最初の船上での出会いで大道芸人にナポレオン金貨を与えたのも、金以上に良いものは見出せなかったからではなかったか。この青年は本当のところは何を考えていたのかという疑いをどうしても掻きたてられずにはいられないのである。金の威力への期待から、夫人の愛の商品化や売買へと露骨にことが進むわけではもちろんない。しかしそれは露骨に進まないというだけで、そう考えたところで論理的な飛躍があるというわけでもなさそうなのだ。

一五、〇〇〇フランの貸借が行われるのはⅡ部三章においてであるが、それを通じて暗黙のうちに成立したとわれわれの推測するある取引きは、その前の段階で実に周到に準備が施されている。まず、あとようやく一歩のところでフレデリックの宿年の愛が叶えられるかに見えるのはこの頃なのだ。アルヌー夫妻の関係は愛情において冷えていたばかりか、近づく経済的破綻への漠然とした予感のうちに一層険悪さを増している。青年はある時は夫の、ある時は夫人の不満の聞き役となって、夫婦の亀裂に呼びこまれるように、両者の間に親切顔で入っていく。夫の浮気がもとで夫婦げんかをしている最中にはからずも踏みこんだ時などはこれ幸いと夫が逃げだした後、夫人から彼はたっぷり愚痴を聞かされる。主人公は仲裁顔でアルヌーの弁護をしながら、夫人が彼を非難するのを聞くと「心の底ではぞくぞくするほど嬉し」かったという〔108-9〕。この仲介的位置は、彼女の懐に入ることで長年の愛を実現する恰好の足掛りになるかもしれないという期待を抱かせる。その内「〔夫への〕復讐や愛情の欲求から」自

分に身を任せないとも限らないのだ。しかしこうして初めて希望が芽生えると、返って彼女への愛も激しくなって青年を苦しめるようになる。そのうえ夫の悪口をいうことで共犯者となった青年に、これまでになく心を開いたせいだろう、「彼女がこれほど魅力的で深い美しさを湛えて見えたことはなかった」という。仲裁役は思わず「閨房の奥のベッド」に目を走らせてしまうし、なぜか瞼を閉じてじっとしている夫人の風情を眼の前にすれば積年の思いがこみあげて、「両腕で抱きしめたくなる」。たしかに二人の間は急速に進展し、「姦通の始まり」のような親密な気配さえ生まれてくる〔169〕。世間知らずの青年が、長い苦労が報われて、とうとうあと一歩のところまで来た、と考え始めたとしても無理はないのである。ところがこの肝心の最後の一歩でどうしても身動きがとれない。アルヌー家に「居候」同然に入り浸っては、思いを遂げる機会を虎視たんたんと狙っているのだが、思いきって愛を打ちあけるきっかけが掴めない。蛇の生殺しのような悶々たる状態に置かれて、いっそ夜中に痲酔剤と合鍵をもって寝込みを襲おうかとまで考えるのはこの頃である。そこで、誰もいない遠いところに彼女を連れ出そうと決意するのだが、そのためにはまず二人を別居させねばならない〔172〕。だからある日アルヌーが最近の妻の不機嫌で愚痴をこぼした時、青年はすかさず、「私だったら奥さんに仕送りして、一人で暮らしますね」とおためごかしの忠告で引離し作戦を実行する。青年にとって都合のよい状況が生れているのだが、それだけに最後の決定的きっかけが掴めぬまま膠着状態を抜けだせぬ焦燥は返って深まるばかりなのだ。ところがアルヌーはその時機をまるで狙いすましていたかのように、彼に大金の借用を申し出てきたのである。しかも妻の肉体賛美をその前に聞かせたうえで。

フレデリックとしては、夫婦の不仲に乗じて夫人の懐に少しづつ入りこんだこの成行きはまずまずの上首尾とみなしていたに違いない。ところが、そんな彼の姿は、相手の夫妻の方からどう見えていたのだろうか。アルヌーは、

青年紳士が自分の家に入りびたりになっているのを、自分への全くの友情から出たことと思っていただろうか。後に青年がシジィと決闘をすることになった時、その原因は自分の名誉を守ろうとした彼の友情にあるとみなしていたらしいから、その線も捨てきれない。しかし彼のふるまい方を見るかぎりでは、彼がどうやら相手を全く別な風に眺めていたと考えた方がよいのかもしれない。事業不振で経済的苦境にあえぐ男の家に、従来から妻に高価な贈りもの（傘・花）を惜しまなかった青年が久しぶりに訪ねてきたと思ったら、まず相続のことを匂わせたりするのだから〔136〕、すでにこれは鴨がネギを背負ってやったきたようなものではなかったのだろうか。それに彼の気前の良さは、大道芸人へのナポレオン金貨ですでに証明ずみのことであった。それに彼が内奥に秘めたつもりの夫人への愛が、一体どこまで当人の思うほど秘密になっていたかは疑問である。普段の様子を見れば、彼の心底など案外外から丸見えだったかもしれないのだ。いやここは、人物の心理的洞察が問題になる場合ではない。作中人物は表面的自立性を保ちながらも、個人を越えたあるテクスト上の戦略に一工作員として組みこまれているかのようで、深謀遠慮に富む行動をとってその遂行に協力しながら、じつは当人は高等戦術の存在さえ意識していない可能性があるからである。したがって、気前の良い裕福な若者から大金をせしめるために、さも最初から夫婦が共謀して一芝居うったのだというわけにはいかないのである。まず夫婦げんかを演じて二人の間に何にせよ共犯関係などありえないことを得心させて下地をつくったうえで、妻の愚痴の聞き役などに仕立て、いかに彼女が夫を嫌悪し愛情に不満があるかをくり返し吹きこんで、秘めた愛をそそのかし希望を膨らませる一方で、持てる魅力を傾けて時には今にも触れなば落ちんという風情で、それでなくても意馬心猿たる崇拝者の心をしっかりと手元に引きつけておく。そろそろ相手がしびれをきらした頃合を見計らって、おもむろに借金の依頼をすれば相手は新局面打開の手段として喜んでとびついてくるに違いない、そういう段取りであったなどというわけにはいかない。まさか金繰り

に困って青年を訪ねた日の朝、お誂えむきの大金が届いたばかりだとはいくらアルヌーでも知らなかったに違いないのだ。ところが奇妙にも、実際にはことは確かにそのように運んでいたとしかいわざるをえないのだ。隠された陰謀の存在を否定するには、何もかも符節が合いすぎている。アルヌーが最初に妻の肉体的長所をひけらかすのは、フレデリックが彼にとうとう別居を勧めた（「私だったら、奥さんに仕送りして、一人で暮らしますね」）直後だった。親切ごかしの忠告の向うに、夫人を夫から引離し、あわよくば思いを遂げようという青年の下心がどれだけ隠されていたのだろうか。おそらくそれは見通しだったからこそ、別居の提案に逆に技がかけられるのだ。「アルヌーは何も答えなかった。そして一瞬の間をおいて、妻を賛美しはじめた……」〔174〕。まるでこの一瞬に、青年の情欲は思う壷にはまってもはや抜きさしならぬところに差しかかったと見て、その思う壷へとさらに駄目押しに押しこもうとした気配ともみえる。こうしていやが上にも焦らせたところで次の矢が放たれる。いきなり訪ねてきて、「もうおしまいだ」、家を抵当に入れたこの借金を払わないと「私はいいが、子供や哀れな妻が」と芸もない泣き落としにみえて、相手の急所はしっかり握ったことの次第は前述の通りである。だから同じ日に出した依頼の手紙には、妻もあてにしている旨を抜かりなく書き、略署もさせておくと、はたして効果覿面だったのだ。色々ためらってみせても、術中に陥った青年には結局逃れる途などないことは初めから判っていたかのように、再び――そしてそれもまるで天井から薬の効き具合を見守っていたかのような正確さで――彼の気持が傾いたところへすかさず借主が登場して、一五、〇〇〇フランの件は結着を見る。すべてが借金を成功させるために心の機微をたくみに突いた計画に従って運ばれていたような具合なのである。もっとも今述べた通り、ペテン師の風評があるからといって、その立案者を一登場人物に帰するには、余りにもうまく出来すぎているのだが、それはともかく、この依頼に青年が応じたのが友情や善意からでないことも、もはやほぼ間違いないだろう。手を出さずにはいられないものが相手

から代償として差し出されていたのだから、借金ではなく、取引だったのである。でなくて相手がそれを引渡そうとしなかった時、借主がうろたえて、自分は罠にはまったのではないかとどうして悔やしがるだろうか。

では、金銭による友人の救済という見かけの下で成立したこの取引きの契約では、何が売られようとしたのか、負債はどう清算されるはずだったのかは、改めて言うまでもない。実際、その契約はアルヌー夫人が依頼の前景に出てくるに従って輪郭を濃くしている。もちろん彼女の場合も、夫と図って自分への愛に苦しみ業を煮やすらしい青年をたぶらかし、大金を捲き上げる算段をしていたと言うわけにはいかない。しかしそれを否定しきるには夫人の言動は腑に落ちない点が多すぎるのだ。むしろこの作戦を筋書きどうりに運ぼうとふるまっているとしか思えないのである。一五、〇〇〇フランの件では引用と略署での関与にとどまったが、続くダンブルーズの手形への返済猶予では、名義人の夫は引込んで、彼女自らが出向いてくる。取りかわされたはずの暗黙の契約を考慮すれば、売買の直接の当事者同志が話をした方が手っ取り早いとは言える。少なくとも彼女は直接に署名できる。一五、〇〇〇フランは夫人のために貸したと二人が片言と目配せで確認した時から、誰が当事者なのかは明確になっていた。その上で四、〇〇〇フランの約束手形の返済猶予の件がきりだされるが、これは表向きにも、もはや彼女を差しむけた夫アルヌーと債権者ダンブルーズのではなく、彼女とフレデリックの間の用件だった。手形には夫人の署名がしてあって、その返済も夫人のシャルトルの持ち家を売って当てるつもりらしいし、猶予は銀行家の度量ではなく、ただ青年の胸三寸にかかっているような口振りなのである。「可哀いそうに！　引受けました、任せておいて下さい」〔187〕。ここで帰ろうとする夫人を、青年はもちろん引きとめる。話はまだ半分しか終っていないではないか。といってもその後二人がしたことといえば、庭に出て子供の将来を案じる夫人を、「その内変ります、決して絶望しないことです」と相手が慰めたことぐらいに見える。だがその後にバラの贈与と返礼の挨拶が続いていたのを見

逃してはならない。この紋切り型の求愛の所作を通してある取引きがぶじ締結されていたのである。夫人が自分の言葉をおうむ返しに、「決して絶望しないことね」と繰返すと、それは青年には――自分の愛への――「励まし」のように聞こえる。肝心の件にいよいよコードの転換が行われたのである。そこで庭のバラを摘んで夫人に与えるのだが、花を摘むこのしぐさの月並な象徴的意味は、そのバラが「庭で唯一輪」だとわざわざ断わりをつけることで〔188〕、彼が唯一愛する女性へと焦点を絞りつつ、はっきりと予告ないし願望的性格を帯びて示される。その意味は後のやりとりで確認されるだろう。青年は、以前アルヌーの郊外の別荘から馬車で戻る途中、夫人が夫から誕生祝いに贈られたバラの花束を窓からひそかに投げすてたことを仄めかして、自分のバラも同じ目に合うのかと低声でたずねる。『いいえ、これは大事にとっておきますわ！』バラを指に挟んで、「錘の糸」のように廻しながら答えるのは、相手の希望の表明に対するはっきりした約束ではないだろうか。錘（fuseau）は運命の女神の持物であり、また錘のように扱われるバラは、摘まれた時は夫人を投影していたが、今度はそれを捧げた青年を――換喩的に――表わしているように見える。さらに別れぎわに、夫人は首を傾げ、「接吻のように甘いまなざしで、花の匂いを吸いこんで」見せるのだ〔188-9〕。彼女をここでそのまま帰すところを見ればこれでこの日の用件は終了したのに違いない。夫人の所作は相手の無言の打診への無言の応答である。花の匂いに酔ってみせることは暗黙の愛の契約書に署名したに等しいのではないのか。少なくとも相手はそう了解したが、それは決して彼のひとりよがりだったとは言えないように思われる。とはいえ所作の言語はそれぞれの利害に絡んで多義性を免れないから、いざという時に法的に動かぬ証拠になりにくいという信用取引きの憾みは残る。といってまさか一字一句を吟味しての世間なみの契約書がかわせる事柄ではないし、そんなことになれば返って青年は憤然と席を蹴らざるをえないだろうから、結局はこういう風に話を進めるほかはなかったのである。相手にはそこがつけ目になったといえるのか

もしれない。

ダンブルーズへの仲介を首尾よく果たしたフレデリックは、早速手紙で夫妻にそのことを知らせる。ところが相手は「大変結構！」（"Très bien!"）と使いの者に返事をしたという。一読したかぎりではそれでさほどいけないこともないように感じられるのだが、やはり隠された文脈に立っての反応と言うべきなのだろう、青年は「自分の働きはそれ以上の値打ちがある」、と明らかにこの反応に不満を抱いているのだ。ではそれ以上の何に値する働きだというのか。「訪問か、せめて手紙の一通も来るものと期待していた」〔191〕。この期待は通常の儀礼の範囲内に見える。しかしはっきりと口に出しては言はないが、そういう意味での訪問や手紙を待っていたのではなかった。「アルヌー夫人は一度来ているのだから、一体誰がまた彼女が来ることを妨げようか？」ここに失望の理由が隠されている。じつは彼女の前の訪問は、儀礼の範囲をこえた、危うい意味を帯びていたのである。それまで数度彼女は青年を訪問しているが、それはいつも夫と一緒で、この彼の家で二人きりになるのはその時が初めての「驚くべき出来事」だったのである〔188〕。若き人妻が若き独身者の部屋を一人で訪ねるのが特別な意味をもつことは容易に想像できる。だから部屋に入った時、入口の戸が締まったのを彼女は気にしてみせるのだ。しかし気にしながらも結局締めたままで用件を済ませたのは、そこにある種の合意が成立していたことになるのではないか。彼女は彼の部屋に一身を賭して願いごとにやってきた、いわば俎上の魚のようなつもりだったかもしれないのである。だから後から考えれば主人公は、うかつにも好機を逸してしまったことになる。訪問の目的を述べるに当って、夫人はまず、「夫があなたの家に行くように私をよこしたのです」〔187〕と説明していなかったか。この穏やかでない訪問を他でもない夫があえて妻に勧めた動機は、前回の秘密の契約に即して推しはかるべきことではないだろうか。金に困った夫が妻の身体の美点を述べ、それを聞いた青年が大金を貸し、その後に夫が妻を彼に一人きりの異

例の訪問をさせる。見間違いのないようなつながりがあったのかもしれないのだ。しかし青年は不慣れでそこがよく呑みこめなかった。全ては今回の依頼をなしとげた後だと考えていたのだろう。今回の訪問を許可したアルヌーだから、お礼に妻をもう一度よこすだろうと、おそらく夫人のバラを吸いこむ甘い目つきを見た後ではとりわけ期待していたからこそ、「彼女がまた来ることを誰が妨げるだろう?」という不審や不満がまず青年のうちに首を擡げたのだ。なるほど、「大変結構」だけでは物足りないわけである。しかもその後も依然として音沙汰がない。その気持ちをはかりかねて、「彼らの方で忘れているのか、下心があってなのか」と悩み訝るうちに、語られてはならないはずの文脈が主人公の疑惑を通じて表面に露呈してくるのが見える。これは作者のどういう計算なのだろうかと途惑うのだが、青年はこう考えたのだという、「彼女が彼にしてみせたあの意味ありげなそぶり、愛の告白のようなものは、それでは打算づくめの駆けひきでしかなかったのか?」すべては金目当てにたくらんだ色仕掛けの狂言だったのかと疑りだすわけだ。これまでわれわれは作者による慎重な自己検閲の手続きの裏を掻いてきたつもりのなのだが、それだけに、こんなにはっきり物を言っていいのだろうかと拍子抜けもし、心配にもなるのだが、これは真意が埋れたままになることを怖れた作者の苛立ちなのであろうか、それとも名人上手の手から水が洩れたとでもいうのだろうか。いづれにしてもこの疑いの中にアルヌー夫人への親切な行為がその代償として何を考えていたのか青年の本音が、語るに落ちるかたちで白日にさらけ出されている。そのうえ、「連中はおれに一杯くらわせたのか?　彼女も示し合わせていたのか?」とまで考えるのだから、隠された取引きの存在についてはもはや贅言の余地がない。確かに契約は交わされていたのだ。ただそれが不履行に終る雲行に慌てて馬脚をあらわした。これは一種の美人局に掛ったようなものではないだろうか。いずれにせよ一五、〇〇〇フランの投資や仲介の奔走がこのままだと、唯の善意で終らせられかねない。しかし言質も取らず言わず語らずに進めたことで、表立って文句

を言える筋合いではないのだから、当座は泣寝入りするほかはなかった。彼はあれほど入り浸っていた夫妻の家にしばらくは顔を出すことさえ憚かる。その理由として「一種の羞恥心」あるいは「名誉への配慮」〔192〕が挙げられるのだから、それだけでも、単なる金の貸借りや親切づくではない、後暗い計算があったと想像させる。金の貸与や仲介だけならどうして羞恥だの名誉だのが、「大変結構」の返事が返ってきたからといって問題になるだろうか。さらにつけ加えると、あれだけの大金が動いたのに、契約書を交さなかったのはともかく、その後催促らしい催促もしていない。いや数日後に、一五、〇〇〇フランの本来の借主であるデロリエが、友人のその場逃れの曖昧な言いわけに業をにやして迫ってくるその手前、やむなく返済を求めてはいるのだが、それは「びくびくしながら」〔184〕なのである。「一週間、いや五、六日のうちには」という約束の刻限をすぎた相手に、これはまた不思議な気兼の仕方ではないか。その時は「翌日」と、よくある引延ばし文句で逃げられた後もう一度、今度も背後にデロリエの監視つきで「意を決して」請求に出るものの、金はできていないし、今すぐ要りような金でもないのだろうと厚かましくかわされて、あっさりと引込んでいる。これは主人公の奥ゆかしい性格のなせる業というべきなのだろうか。確かに意を決するまで、一方では一緒についてくるデロリエの足音が「彼の良心をたたく鞭打ち」のように聞こえ、他方アルヌーには「変に恥ずかしがり、それに言っても無駄かもしれないという懸念から」つい二の足をふむ、そんな板挟みに悩むところは気の弱さのあらわれと見えなくはない〔185〕。しかしこれは自分の金なのだから板挟みになること自体が普通なら変なのである。貸与の素姓を考えると、ひょっとするともともと請求の意志など彼にはなかったのではないだろうか。返済のあてなしに借していた、あるいは一味違った決済の仕方を期待していたらしい胸の内がこの及び腰のなかに覗いているのではないだろうか。デロリエへの良心の痛みも友人との約束を裏切ったというだけではなく、裏切った理由のいわくいいがたい後暗さに根差していたのかもしれない

のだ。後の青年の行動は、低く見積もっても、そう気の弱い性格でも、良心の呵責に悩むような人物でもないようだからである。普段の様子から到底返済の目途など立ちそうにないと踏める陶器商へのこの巨額の融資は、本当は返済されては困る性質のものだった、自分の善意に相手もまた善意で答えるはずのものだった、のではないだろうか。だからアルヌー夫人がこの負債への抵当登記を夫に勧めたと知った時、なみの債権者なら当然胸の内を撫でおろすところを、この人物は反対に、「屈辱的な思い」を味わわされたのだ〔186〕。貨与にこめた夫人への愛のもくろみが、結局は夫婦の絆の前には何者でもないという思いを抱いたのに違いない。

五章　シジィとの決闘

では思惑はずれということでこのまま貸主が引込んで、一五、〇〇〇フランの話は立消えになるのだろうか。ここが肝心なのだが、そういうことはこの健全な、つまり円滑な経済関係を基盤とする市民社会では起こりえない。それだけの金が支払われたなら、どんな形であれそれは必ず返済されねばならないのである。これは商いの心構えというにとどまらない、誰もが従うべき行動の掟であり、それを通じて何よりも、始まった物語を終らせる鉄則なのでもある。きちんと返済されないかぎり、曖昧なままでは、物語も終りようがないのだ。ただ普通の契約不履行ということなら然るべきすじに訴えでれば、それで結末はついた。ボヴァリ夫人の負債のように、ある日執達吏がこつぜんと戸口に不吉な影を投げかけて、三つのレベル（経済、社会、物語）での清算（リキダション）は容易にけりがついたのだ。ところが取引きの内容からいって他聞を憚るていのものであるうえに、なまじ騒いで世間なみの清算などされては、返ってそれまでの苦心が水の泡になる混みいった事情があって、確かに最後には廻りまわって司直に捩れた結び目を解いてもらうことになるとしても、それはまだ先のことで、さしあたりことは内攻するほかはないらしい。唯、

泣き寝入りが続けば内に抑えこまれたものの圧力は高まるばかりで、どうしても貸借上の当座の均衡回復が必要である。だから鬱憤ばらしに何かないかと探している男を相手にした方の運が悪かった、ということなのだろう。シジィとの決闘騒ぎの経緯を元から元へと、いわば因果の鎖の目を丁ねいにたぐっていくと、どう考えてもこれは一五、〇〇〇フランの一件へと、屈折し捩じまがりつつ溯っていかざるをえないのだ。

直接の発端は、シジィに招待された会食の席でのアルヌー夫人をめぐる言い争いである。しかしこの対決の背後には、ロザネットをはさんだ数日前の恋敵同志の確執がある。その時、フレデリックとロザネットがレストランの一室で仲良く食事をとっている席に、後から青年貴族のシジィが割りこんできて、しかもどういう風の吹き廻しかそれまでしんみり語りあっていた高級娼婦が突然闖入者の方になびき始め、ついには主人公を袖にして相手について出て行ってしまう。シジィにとってはロザネットはかねてからの憧れの女性であり、この成行きに鼻高く、意気揚々と立ち去ったまではいいのだが、ところが後がよくなかった。二人の前に今度は情夫のアルヌーが現われたのだから勝ち目はない。逆に自分が二人の邪魔にされて追いはらわれるはめになる。シジィはこの時のことを根にもって、会食中、彼女の名前が取沙汰されるや、この「売りもの」の女を罵倒するのだが、その憤りの矛先は愛人の「詐欺師」アルヌーばかりか、さらに八つ当り気味にその妻へと及ぶ。アルヌー夫人というのは「誰でも知っている」そういう類いの尻軽女だと言いはって聞かないのだ。同席していた主人公は黙っていられない。「うるさい、あの人はあんたの付きあっているような女とはわけが違う！」、と相手の顔目がけて皿が投げつけられる〔223〕。では喧嘩の原因はアルヌー夫人の――あるいは夫――の名誉を守ることにあったとなりそうだが、そう言いきるにはことはもう少し奥へと入りこんでいたように思われるのだ。すぐに決闘ということになって、その時と場所が決まった後、レストランの外に出たフレデリックは胸いっぱいに息を吸いこむ、「余りにも長い間、彼は自分の心を抑え

つけていた。それを今ついに吐きだしたのだ」〔224〕。余りにも長い間抑えつけていた鬱憤を晴らしたのだから、原因は昨日今日のことではないとまず考えられる。少なくとも一週間ほどは戻らなければなるまい。あの日シジィは最後はロザネットに振られて悔しい思いをするのだが、しかしこの青年貴族よりもはるかに苦い無念の涙を呑んだ人物がいたことを忘れてはならない。前述の通り、彼が来るまではフレデリックがロザネットは自分の愛人になるものと思いこんでいたのだ。たしかに脈はあった。彼女の方からどういう風の吹廻しか、わざわざ誘いの手紙を出してきたうえ、一緒に出掛けた競馬場では、「楽しいわね、あなたが好きよ」などと嬉しがらせを言い、順調な滑り出しをうけて二人きりで食事をする運びになったのだから、自分の望みはもはや叶えられたも同然だと思ったとしても無理はない。ところがその瀬戸際に呼ばれもしないシジィが闖入してきたのだ。女は掌を返すように新参者をちやほやしだし、ついには呆れる主人公を後に仲良く二人で出ていった。昼から期待をあおりたてられていただけに、この時の不首尾の落胆は想像に余りある。こうなると、人の恋路のために大ばん振舞いをしたレストランの勘定を払うだけでも忌々しいのに、ユソネが娼婦の犬を家まで送り届けてきた馬車代の請求書まで廻ってくるのだから泣き面に蜂である。翌日は一日中憤怒と屈辱の内に過ごすことになろうというものだ。その腹いせの機会がこのシジィとの会食時にめぐってきたのではなかったか。

ところがよく考えてみると、競馬場に行ったのが日曜、シジィが主人公を食事に招待した水曜日というのがたとえ一週間遅れだとしても、まだせいぜい十日ほどしか経っていない。「余りにも長い間」心を抑えつけていたと言うにしては少々短かすぎるように思えるのだ。抑えた憤懣の射程つまり決闘の淵源は、競馬場の日の出来事よりももっと向うから発していたのではないだろうか。第一、それまで脇目もふらずに捧げてきたアルヌー夫人への愛はどうなってしまったのか。夫人をよそに、ロザネットへのこの打込みようは一体どういう了簡なのか。

アルヌー夫妻からあの「大変結構」という素気ない返事を貰っていらい音沙汰がないまま三週間程家に引きこもっていた青年のところに、ダンブルーズから仕事の件ですぐ来るようにという手紙が届く。一旦は銀行家に会いに行こうと外出したものの、それにしても夫妻のその後のふるまいが今更ながら腑に落ちず、途中で急遽行先を変えて彼らの家に馬車を乗りつける。ところが二人とも留守で、アルヌーは旅行で翌日まで戻らず、夫人は郊外の陶器工場に出かけているという〔192〕。それを聞いて主人公は、「彼女は一人きりだろう。ついにチャンス到来だ」と「抑えきれぬ衝動」にかられ、自分の将来が掛っているかもしれない銀行家の呼び出しを尻目に、勇躍工場へと向かうのだ。この「チャンス」とはもちろん愛をとげるそれに違いないが、この愛が何より契約履行としてのそれであることを付け加えておこう。工場でようやく一人の夫人を掴まえた主人公は、長い交際でこの時初めて、そう露骨ではないにしてもかなりはっきりと自分の意中を打明けるのだが、それができたのは、そういう愛の性格に基づくと思われる。なぜなら、それまで告白の機会は本当になかったのだろうか。いや、そもそもそれは機会の問題だったのだろうか。確かに子供、女中、部屋の配置が「のりこえ難い障害」になって邪魔をしていたと言うが〔172〕、この工場でも二人の子供が来ているのだし、そのうえ昇給の口添えを頼むセネカルがうるさく附きまとうのだから条件がそう良くなっているわけではない。むしろ青年自体の内部に障害があったと思われるのだ。「打ちかち難い羞恥心」が愛を打ちあけるのを「妨げていた」のだし、あえてそれをした場合に「彼女の軽蔑に直面する」のが恐くて、手立てもないままいっそ夜中に押込もうかなどと考えたりしていたのだ〔172〕。にも拘らず今度はためらわず愛を告白し口説きおとそうと気負いこんでいる。この態度の違いはどこから来たのか。愛を求める権利が今の自分にはあると思っているらしいその理由としては、少し前に結ばれたはずのあの暗黙の契約をおいては他にないように思われるのだ。なるほどそんな契約が成立しているなら、たとえばうっかり愛を打明けて「彼女の軽蔑に直

面する」心配などはそのどこかで通りすぎているわけだろう。愛と金の互酬交換に立つ取引きが交わされたという認識が暗黙の前提になっていればこそ、この告白はついに行われたのである。このことは改めて、一五、〇〇〇フランと仲介の依頼において何が起きていたのかを照らしだしている。ところが夫人はこの差向いの話で、契約を交わした身振り言語の多義性をいいことにだろう、交渉に応じてこない。いわば白を切り通す。案に相違して彼女の口からは、とりつくしまもない辛気臭いお説教の類いしか引きだせないのである。男が女を愛するのをあなたは認めないのかと青年がつめよれば、「その女性が結婚できる状態にあるなら結婚すればよく、他の男のものならば身を引けばよいのです」。この一般的な男や女がある特定の人物を差していることは言うまでもない。「では幸福〔つまり私フレデリックの〕はありえないと？」「ええ、嘘や不安や悔恨の中に決して幸福は見出せませんもの」。まるでかのおそるべきエマ・ボヴァリィの轍などふむまいと決意したかのような模範的な答え方なのだが、この態度を夫人は一貫して崩さないのである。「何をおっしゃる」とくいさがる青年、「至高の歓喜が得られるというのに」。夫人、「その経験は高くつくのですよ！」なるほど田舎医者の奥さんの例に照らしてそれはそうなのかもしれない。「では貞節とはただの臆病でしかないと？」「というより先見の明があるということですわ」と一分の隙も見せないのだ。婦徳のカテシスムで全身鎧われていて、精一杯切りこんでも、義務だの宗教だの分別だの世間なみの挨拶でいなされて歯がたたない。やがて下の男の子が夕食を告げにくる。上の娘もやってくる。それでも求愛者は諦めきれないで、「あなたのいう御婦人たちは、それでは心がないのですか？」そうではないが、「必要なら耳を閉ざす」のだと、両側に子供を従えて敷居に立ちはだかる。子供を守るためなら、中に一歩も入れまいという構えである。相手はもはや言葉を失って一礼して立去る他はない。「自分の希望の空しさをこれほどまでに思い知らされ」、あとはもう死ぬばかりというほどに「絶望して」、蹌踉とパリに逃げ帰るのだ。夫人の言うことは尤もなのだが、しかし、

今更そんな判りきったお説教を聞くために、一五、〇〇〇フランを払ったわけではなかったといいたい。第一、青年の部屋までひとりで訪ねてきて、しかも差出されたバラの花を「接吻のような甘い眼つき」で吸いこんだ、あの時の艶めかしい女性はどこに行ったのか？　あのどこを押せばこんな貞女の鑑のようなことがぬけぬけと言えるのか？　この豹変は、あの眼つきが署名していた約束を反故にしようとしている。いやこのままだと、そんなはしたない契約の存在自体が闇から闇へと葬られかねないのだ。しかしそういうことにはならない。たとえそれで相手や世間の眼は一時眩ませても、ことはそれでは済まされない。負債はそれがどんなに極秘に行われようと最初から当事者の手を離れ、ある一般的コードの場へとひきづり出されているので、もはや個々人の思惑だの奔走だの愛憎だの巧妙さだのを越えて、それ自体の規則に従って展開するしかないからである。フレデリックが、翌日競馬に連れていって欲しいというロザネットからの誘いの手紙を見出すのは、甚だ意気鎖沈して郊外から戻ったこの時なのである。何の気紛れかと不審に思いながらもその誘いに応じるのだが、それは当て外れに終った夫人への愛の代償となりうるものがそこに期待されていたからではないだろうか。一瞬はためらう、「しかしアルヌー夫人に知られたら？」と。しかしすぐに思い返して、「いや、その方が良い！」。なぜならそうなれば彼女への「復讐」になるからである。(ça me vengera！202)。venger の本来の意味は「償いを求める」(en tirer la réparation) であるが、夫人の拒否した愛の代償が、手紙の主によって支払われるという見込みがこのどこかで生まれていたに違いない。翌日のデートはいわゆる腹いせに発するのだが、それはだから、いよいよという間際に無残に希望を打ち砕かれ、それでまたしても内に抑えこまれたあの債権、あるいは抵当物件としての宿年の愛を代理的にみたすものへの要求、つまり今言った意味での vengeance (代償請求としての復讐) という意味においてである。

ところで代理性は主人公の愛が実現する時の一貫した特徴であり、それはテクストの最も深い部分に根差してい

るようだ。彼はどう巧妙にふるまおうと、ずれることによってしか愛を実現することができない。いいかえれば彼の真の愛はおそらく初めから不可能なものだった。だから他の女性たち（ロザネット、ダンブルーズ夫人、ルイーズ）への愛が彼の行動目標になり、且つ内二人は首尾をとげるのが、他でもないアルヌー夫人への愛が挫折したほぼ直後なのは偶然ではない。ロザネットとの関係が初めて成立するのは、今度こそ間違いないはずだったアルヌー夫人への愛がまたしても失敗に終った時、それも夫人のためにわざわざ借りて、内装の演出まで細かく心配りをしておいた一室においてなのである〔284〕。ダンブルーズ夫人に言いよるのも、アルヌー夫人との初めての熱い抱擁をロザネットに途中で邪魔された後である〔360-1〕。従ってこの日競馬場にロザネットと一緒に行くのも、彼のそういう恋愛行動のパターンに属していたわけだ。それにアルヌー夫人からロザネットへ移る道すじは、すでにアルヌーによって開かれていた。その情婦が夫人の範列をなしていることは、両者を等価として同列視するアルヌーの常日頃の行動様式によって充分にコード化ずみであり、しかも夫人の手前を憚かって情婦を青年に押しつけた逃げ口上は、瓢箪から駒が出るかたちにせよ、彼女の所有権の譲渡を準備してしまっていたのかもしれない〔176〕。したがって競馬場の帰りに寄ったカフェ・アングレの一室で、彼がロザネットに覚えた「渇き、欲求」（il en avait *soif, besoin*, 212）とは、前日斥けられた夫人への充たされない愛を骨核としているのではあるまいか。つまりロザネットへの情欲において真に問題になっていたのは夫人への愛だったと思われる。両者がこの文脈で一まとまりで語られるのも偶然ではないだろう（「彼の〔夫人への〕愛は否認され、彼の〔ロザネットへの〕情欲は胡麻化された……」212）。そういえば競馬場に行った日の不首尾の模様は、前日までの夫人への愛とどこか似通っている。急速に親密になり、もう一歩のところまで進んだ夫人への愛が、一五、〇〇〇フランの援助を介して今度はほぼ確実なものになったと思われた刹那に、高まった期待が裏切られたとの同じように、思いがけない誘いの手紙に出か

けるといつもにも似ずいかにも脈のありげな素振りに、すっかりその気になっていたところにシジィがやってきて惨敗を喫する（「彼女への渇望、欲求が生れていて、彼女が〔シジィに会うために〕出て行ったことは彼には裏切りのように思われた」212）。後者の場合もいよいよ後一歩のところで遂げられるはずだった思いが、土壇場で肩すかしをくらうのだ。これは夫人との愛の図式的復習ではないだろうか。では競馬場に行った日のロザネットへの「裏切られた情欲」〔Ibid.〕が直接の原因でシジィに皿を投げつけさせた青年の憤りとは、実はそのさらに底に、夫人への「受けいれられなかった愛」〔Ibid.〕が蟠っていたと言わねばならない。「余りにも長い間」憤懣を抑えつけていたと言うのもこれならば納得がいく。といっても夫人への愛が数年におよぶことまでここで考慮する必要はないだろう。しかし夫に対する夫人の愚痴の聞き役ないし「居候」(parasite, 171) として家に入りびたり、急に距離を縮めた彼女の魅力に悩殺されて、どうしたらこの愛を実現できるのか、焦燥に駆られ、あれこれ手段を思いめぐらせていた時期には溯らねばならないだろう。何より、一五、〇〇〇フランの貸与と次の頼みごとでの悩ましい眼付きによる謎かけで、悶々の情がようやく膠着状態から脱して実現しかけ、それでなくても高まっていた欲望が爆発寸前になっていた頃のことや、この希望がそれだけに激しく裏切られた暗黙の取引きとその後の経緯全般には少なくとも、この「余りにも長い間」の射程が及んでいるだろうとは考えられる。愛の契約に違背した夫人への「復讐」からロザネットに向けられた愛が、これもまた「欺かれた」〔212〕とばっちりが、皿となって投げつけられたのだ。では返済されない一五、〇〇〇フランが、潜行し姿を変えて主人公の行動をひそかに支配しつづけて、効外の工場訪問ばかりか、競馬場行きから決闘までの一連の出来事をひきおこしていたということになるだろう。決闘の淵源には、騒ぎ立つ欲望の渦中に投じられた一五、〇〇〇フランの契約とその不履行があったわけである。契約違背に対する、復讐の変形した表現だったのだ。復讐とは、後述のようにあらゆる領域における人間関係の必

然的な経済性に立脚してのバランスの回復なのである。この均衡化は顕在的な部分においては、正義の名のもとに法律の制定を通して権力の管轄下で曲りなりにせよ処理される。しかし数量による一般的な価値相場の定式化が行われていないかそれをするのが本来的に困難な領域（愛、友情、個人的奉仕……）での、貸借の不均衡の、しばしば陰湿な匡正もそこには含まれる。いずれにせよ一五、〇〇〇フランを受領しながら代価による支払いを曖昧さにまぎれて拒否した夫人の詐欺まがいの行為は、清算されない限り、その不均衡をただす方向で次々に復讐の波紋を拡げていかざるをえず、それが取りも直さずこの物語の結構をなしているのだから、経済コードは同時に物語展開の論理もしくは広くテクスト的システムのようなものを成していることになるだろう。実際、決闘事件のみならず、この作品での出来事、つまり登場人物たちのそれぞれの思惑に従っての結託、反目、裏切りといった行動的結節は、経済コードへの厳格な遵守に立った諸反応の連鎖として形成されていると思われる。となると、この作品においてはたとえば多くの登場人物が参加した二月革命とは、テーヌやルカーチが考えただろうように主人公の愛の単なる背景なのではなく、これもこのコードに依拠した一連の出来事のひとつで、この愛とも内的連関にあるものとして考えられるのである。

ところで、皿の投げつけは、高まりに高まった欲望が契約不履行によって急激に抑えこまれたための暴発の排け口だったのだが、そのきっかけは何でもよかったわけではないだろう。シジィが先日の恨みから、ロザネットを「結局、金で買える女」とこきおろし、パトロンのアルヌーを「詐欺師」〔222〕と罵り、その累がさらに夫人にまで及んだ瞬間に、はじめて皿が放たれたことに注意しなければならない。何が主人公の癇にさわったのかよく判るのである。ロザネットが金で買える女だとは主人公自身が呟いていたし、画商がペテン師だという陰口を聞くのはこれが始めてではない。シジィは調子に乗って、よせばいいのに、男出入りの多かったソフィ・アルヌーという、夫

人と同姓の伝説的女性を引合いに出して「あんな女は誰でも〔肉体的に〕知ってるさ」と、浮気女ないし娼婦扱いをしてみせたのがまずかったのだ。そこで爆発する主人公の怒りは、だからといってかの貞淑なる夫人の名誉に汚名をきせたことに発すると単純に考えるわけにはいかない。目途の立たない愛を経済的援助という名目で実現に結びつけようという主人公の魂胆は、考えてみれば、夫人を金で買おうとしていたわけだから、たとえ娼婦扱いしたところでその彼に怒る権利などないはずである。だがまさにそれだからこそ、シジィの言い方は彼の気に障わったのではないか。それは失敗に終った彼のひそかな腹積りの本音を突いたのだ。その企らみは、テクスト的にもその無意識に押し込まれていたように、彼自身に気付かれていなかったのかもしれない、それだけに一番触られたくない急所になっていた。そこを突かれてあわてて身をかわし逆襲に出たその自己防衛的な開き直りとして、裏切られて憎さが百倍になった愛する夫人への憤懣の口が思わず開いて、シジィへの皿の投げつけになったということのように思われる。他方でそれはアルヌー夫妻の友人としての儀礼的配慮という体裁を帯びながら、それがここまでむきになったのは長い間の鬱積もさることながら、実は自分が先頭になって売春的取引きに夫人を巻きこもうとしたことへのアリバイ工作でもあったからである。にも拘わらずそれが青年の潔癖さの現われ位にしか思われなかったら、作戦は功を奏したことになる。丁度アルヌーが二度目に妻の肉体を女性斡旋業者の売りこみよろしく賞めそやした時、彼が怒って立ち去ったのが、その賞賛されたものが所有できない苛立ちからなどではなく、相手のはしたなさへの抗議であると思われかねないように。

六章　弁護士デロリエの愛

一五、〇〇〇フランの未返済が経済コードに従ってひきおこした反響は、迂余曲折を経てついに決闘騒ぎに発展

したのだが、それはこの、曲りなりにも死の危険をはらむ出来事の内に衰え鎮静化し、そのまま消滅することになるのかといえばそうではない。そういうわけにはいかないことなのである。なしくずしに消えさるどころかこの負債は、返済されないかぎり最後まで尾を引かざるをえないのだが、それも余韻を残すといった消極的な惰性的引きずりにおいてではなく、それが次々にひきおこす出来事を経るごとに返ってインパクトを蓄わえるかのように勢いを盛りかえし、何の関係もないようにみえる騒動の内にもその影の跳梁ぶりが透しみえる。借金が返済されねば、催促は矢のごとく募り騒ぎは大きくなる道理である。それが片付かないとお終まいにならないのだから仕方がない。市民社会のモラルを凝縮する商取引きの鉄則というべき清算（liquidation）が済まないうちは、ここに登場する市民たちが織りなす物語もまた結着（liquidation）が付かない。一七年間の音信不通の後、忽然とアルヌー夫人はフレデリックの住居を訪問してきて、それで長篇小説はほぼ終結を迎えるのだが、この最期の夢のような出逢いとは、何より二〇年ほど借りっ放しの一五、〇〇〇フランを債権者に耳を揃えて返済してそれでともかく幕を引くためではなかっただろうか。そういえばもう一人の夫人、田舎医師ボヴァリィ氏の妻も借金が嵩みにかさんだ挙句に自殺をするのだが、その死後にも細々と続く物語にようやくとどめが刺されるには、彼女の借金の片がすっかり付かなければならなかった。もっとも夫人（アルヌー夫人）が二〇年後になって義理がたく借金を返そうとはまだ誰も思ってもみないのだから、登場人物たちは作品に結末をつけようと競うように忙しなく駆けずり廻り、それが結果的にこの負債の清算を求めるものになっているのである。

まずデロリエが夫人を訪ねて返済を迫る。それはフレデリックの金なのだから、弁護士は当然友人の代理だということになりそうだが、しかしそれが少しもそうでないことに注意しなければならない。借金の事情をよく思い出してみると、もう一人深刻な被害者、少なくとも当人はそう固く信じている者がいたことに気付くのである。ある

いは一五、〇〇〇フランの負債が以後重く夫人の身に圧しかかったとすれば、その同じ重みは債権者であるはずのフレデリックにも、実は圧しかかっていた。しかしその重みを彼がどれだけ正確に量っていたのかは疑問である。たしかに上掲のように、一五、〇〇〇フランを是非とも借りようと彼の跡を執念深くついてくるその人物の足音は、「良心を打つ鞭の音」のように聞こえるし、また「友人に対して卑怯な真似をしたという思いは、霧のように良心にわだかまって」いる。しかもこの疚しさは、おそらく大金を払いながら自分の愛にみるべき進展がなかった「悲しみ」に匹敵するものだった（“par dessus son chagrin……”, 186）。もっとも彼のこの良心の疼きもすぐに癒えたらしく、負債も身に覚えのないものになるのだが、貸した方は忘れるものではない。お陰で主人公は、幾度もこの虚の負債を自分でも知らない内に払わされる目に遭うだろう。しかしもし正面切って負債だと言われたら、言い掛りではないかと反論することもできたのだ。たしかに貸すと口約束はしたが、一五、〇〇〇フランは自分の金であって、それをどう使おうとはたからとやかく言われる筋合ではない。約束が果たせなかったのは申しわけないにしても、それで貸し借りなしの元々であって、逆に借りを作ったと思われるだけでも心外なのに、言うにこと欠き「盗まれた」〔186〕とは、もっての他ではあるまいか。確かに弁護士が口に出して主人公を泥棒呼ばわりしたわけではない。そう言える筋合ではないのだが、もしそうしていたら、この後の話の展開は大分違っていたろう。というのも相手の意識がきわめて薄弱で返済が表向き問題にならないからこそ、この一五、〇〇〇フランのいわば負の負債の焦げつきは最後まで燻ぶりつづけ、曖昧なかたちで〈復讐〉を次々に彼の身に、そして関係者に招きよせてやまないからである。債務の厳密な履行要求が事件に直接関与しない他の登場人物を捲きこんで大きなうねりとなり、清算への緊張を高めていく。一五、〇〇〇フランをめぐって、実際にはアルヌー夫人とフレデリックに向けられた正負二重の債務が平行して進展していたわけだが、負の方が秘められているだけ取り立てが悪質なのである。

口頭とは言え、貸すと言明したのだから、それはもはや個人の恣意をこえて社会契約の一般的な場にひきだされていた、とこの場合もいえる。そのうえで、それが弁護士にとって並々ならぬ意味をもっていたことを酌んでやらなければならない。強い野望を抱いてパリに出てきた彼は、法学生として優秀な学業成績を収めるものの、肝心の教授資格試験には失敗し、教授――を通しての成功――への途を絶たれる。やむなく家庭教師などで糊口をしのぎつつ気鋭の弁護士として多少の成功を収めるが、やがてそのどちらの仕事にも行き詰って、もはや彼には自分の新聞を出すという「昔からの夢」〔154〕以外にその不遇な人生の希望を托すものはなくなっていた。新聞でこそ「自分の鬱憤をぶちまけ、考えを吐きだし」、自分を拒絶した世間に「目にもの見せて」（se venger）やれるのだ。「財産や名声」もそうなれば後から自然についてくるだろう。この唯一の希望を実現するのに必要な資金があの一五、〇〇〇フランだったのだ。それにしてもこの友人の資金がなぜ元画商の負債額、ということはある愛の売り値と金額が一致したのだろうか。それはおいおい見ていくことにして、ともかく主人公は友人の熱弁に一時（いっとき）心を動かされて、その提供を約束する。しかしいざ公証人に頼んで取寄せた銀貨の袋を目の辺りにすると迷いが生じて、「これだけの大金をあんな新聞のために無駄にする」〔181〕のが惜しくなる。そこにやってきたアルヌーの窮状を聞くうちに、前言を翻えすことになったわけだ。デロリエとしては土壇場で、掌中にしたも同然の金を、そこに托した未来のすべての希望と共に、気紛れな友人の裏切りでふいにしたわけで、もはや前途には闇しかない。この状況は、どこかで聞いたおぼえがあるように思われる。十中八九まちがいないと思った願望が、実現の直前にとんびに油揚げをさらわれる感じで水泡に帰して絶望に陥る。これはむしろ友人フレデリックの被害パターンではなかったろうか。弁護士はすると、同じ一五、〇〇〇フランに関して友人と全く同じような成行きで損害を蒙っていたことになるのだが、この点で興味をひくのは、陰陽二重の債権者となった二人が、やはり同じように焦げつきへの憤懣を表

現していることである。フレデリックは金を貸したアルヌーに妻自慢をされて立腹し、「彼にも彼女にも二度と会うまいと心に誓って、転げる石のようにブレダ通りを下って」いく。この自慢は二人が「別れる」どころか「反対に、〔夫は妻を〕髪の末から魂の奥底まで」愛しており、「〔彼女の〕何もかもがあの男の所有物である」ことを彼に見せつけ、その上金による返済のことまでまじめに（抵当登記の提案）持ち出すのだから、その借金は、本来の愛の目的を達成しないまま欺し取られたことになるからだ〔186〕。ところが同じ時刻に、その金が本来自分の懐に入るはずだった彼の友人の方も、「怒って大声で罵りながら殉教者通りを駆けくだっていた」のである〔Ibid.〕。怒って通りをくだる二人の描写は隣合わせに置かれているのだが、このテクストの平行的布置は、二人が同一の金に対する表裏一体をなす債権者ないし被害者であることを浮彫りにしているのではないだろうか。弁護士がやがてアルヌー夫人を訪ねるのはこの被害者としての資格においてなのである。

殉教者通りを行く彼は、「自分は金を盗まれた」、「大損害を蒙った」とみなし、旧友への「友情は死んだ」と感じる〔Ibid.〕。この友情の喪失に喜びさえ覚えるのだが、「それは代償（compensation）だった」からである〔Ibid.〕。compensation とは財やサーヴィスの供与や損失が招く貸借関係の不均衡を回復するための行為であろうから、復讐の同義語と言ってよい。するとこの点でも弁護士は裏切った主人公と平仄を――対称的に――合わせていたことになる。まず主人公は弁護士に供与するはずだった一五、〇〇〇フランの約束を反故にして愛するアルヌー夫人のために転用したのだから、弁護士のいう友情の死は、愛のために先に友情を裏切った相手への等価のお返しである。さらに友人は一五、〇〇〇フランの貸与と四、〇〇〇フランの仲介にも拘わらず愛が報いられなかった時、その復讐として（“ça me vengera” 202）その相手をロザネットに乗換えたが、弁護士のふるまいはこの点でも相手と一致している。リセ以来の同級生への友情は消滅するだけでなく、どうやら新たな友人であるセネカルへとそれが移っ

ているからだ、「……彼はセネカルの考え方に傾いていった」〔Ibid.〕。二人とも、本来の約束に従って回収できなかった一五、〇〇〇フランへの代償（vengeance-récompense）として、その相手への愛ないし友情を見限って、他の人間にそれを移し換えたという点で一致している。彼らのふるまいのまるで双生児のようなこの一致は、やがて弁護士の態度を介して合せ鏡のようにその友人の行動の隠された意味を明らさまに照らしだすという解釈上の利点を伴うのだが、それは因みに二つの軸の交わりから生じているように思われる。一つはこの作品の世界が唯一のコード、数量的な経済コードに依拠しており、人物たちはそれがほぼ絶対的に求める均衡回復に従うかぎり、基本的に同一のふるまい方（返済つまり復讐＝代償による清算の追求）しかできないということである。しかしそれにしても均衡回復の仕方に選択の巾がないわけではなく、二人のこの隅々にいたるほどの一致は、後述する両者間のある親和性にも由来していると考えてよいだろう。

もっとも一時の激昂が鎮まり、やがて主人公から会いたいという誘いがかかると、あの時の恨みはどこに行ったのか、そのままずるずると、よくある仲の良いもの同志の喧嘩がなんとなく元に治まる感じで、交際が再開される。この時弁護士と再会した主人公は、実は最近ある件で不連にも一五、〇〇〇フランのまる損をしたと、打明けるのだが、相手はそれを自分への裏切りの弁解ととって、「遺恨の念はすっかり晴れ」たという。だがこれは本当だろうか。弁護士は主人公に、だから「前の約束」のことは一切口にしなかった〔241～2〕にしてもそれは表向きのことではないだろうか。その後の弁護士の行動を辿ると、それは大筋においてすべて友人の裏切りに対する復讐の追求としかいいようがないからである。相手のフレデリックにはそこが汲みとれなかった。彼は「相手が言及しないことに欺かれて、〔違背の一件は〕忘れてくれたものと思い込む」。油断して、自分の方の焦げつきを回収する手立てはないだろうかと、立入った相談をもちかけるのだ。しかもその件で、「正式な委任状をつけた代位証書」〔245〕

を彼に渡している。ではその後しばらくして弁護士がアルヌー夫人を訪問するのは、友人の代理として、彼の貸した金を取立てるためだった、とつい思ってしまうところなのだ。たしかに、「フレデリックに代って殆ど彼になりすましたつもりで」〔246〕訪問するにはするが、それは友人のための代理ということではなかった。あるいは、この訪問の権利は誰かの代理という弁護士としての職業上の権限とは別のところで与えられていた。あのもう一つの負債の追求が問題なのだ。よく読めば、フレデリックは彼に回収の相談はしても夫人訪問などは一度も依頼していないし、もし訪問すると知ったら、負債の性質上断固反対したに違いない。実際、借金の取立てに関して相談を受けた弁護士が、アルヌーばかりか夫人へも訴訟の手をのばすことができると忠告した時、相手はすかさず「だめだめ！　彼女はいけないよ！」と叫んで予め釘を差していたのではないか〔242〕。たしかに彼は夫人訪問時にデロリエ博士と取次がせ、「モロ氏の件で」と代理をふりかざして乗りこむのだが、それは追い払われないための用心である。従って、この訪問に踏みきるに至った弁護士の心的過程をみると、友人の利害のための助力とか親切という要素は皆無だと言っていい。それどころか、「あいつの一五、〇〇〇フランなんか勝手にしろ！」と罵っている。その上で友への「裏切り行為」を働くことを思いめぐらすのだ。さすがにこれは一度は「恥ずかしく思う」のだが、どこが悪いとすぐに居直って、それが結局夫人訪問の動機になったようなのである〔245〕。では友人の代理でないとしたら、訪問の権利を彼はどこから得たのだろうか。心理的曲折を経ながら結局友人を裏切る方へと落着した彼の貸借対照表の帳尻は、したがって相手への貸しとなって出ていたわけだが、この不均衡はどこから生じたのかといえば、あの約束違反の一件以外に見当るものはないのである。「あいつはおれにずいぶんひどい仕打ちをしたんだから！」〔246〕。したがってこの代理とは友人の利益代表（représentant）のそれではなく、身代り（substitut）の意味なのだ。「彼にとって代わって、殆ど彼になりすます」（“……se substituant à Frédéric et s'imaginant presque

être lui", 246) こと、もっと判りやすくいえば友人の替え玉となって彼が享受する様々な財やサーヴィスを我が田に引きこもうという算段なのである。それはだから約束違反によって生じた一五、〇〇〇フランの負債を回収するための私的な差押えのようなものであったと言わねばならない。たとえば彼が夫人訪問に先立って、ダンブルーズの家に行き、前々から銀行家が友達に勧めていた「秘書の地位（place）」〔245〕を要求しようという考えが浮かぶのも、友人の代りに（place）その利益を取込んでもいいという債権者の発想が予めあったからに違いない。それを実行に移さずに終ったのは、会社の株を買いとるというその条件をみたせないからなのだが、それにつけても、先立つものの無い我が身を顧みて、あの金策の不首尾がかえすがえすも無念に思われる。そんな経路で、「一五、〇〇〇フランを取立てる算段」を思いめぐらすのだから、訪問は自分の――友人のではなく――「盗まれた」にひとしい金を取り返す意図においてだった。友人の貸した一五、〇〇〇フランではなく、友人に貸した一五、〇〇〇フランの間接的な取立てだった。どこを読んでもそういう風にしか書かれていないのだ。しかもそれは裏切った友人がどうその金を使ったのか、その隠れた事情に大変に忠実な仕方においてであった。あんな自分勝手な男の一五、〇〇〇フランなんか知るものかと考えた後、「なぜあいつはそれを貸してやったのだろう?」という疑問が首をもたげる。「アルヌー夫人のあの美しい眼に対してだ。夫人はあいつの愛人なのだ」、という考えにそこで突き当たるのだ。「おやおや、これも金の効用か!」多分この辺りから弁護士の奔走の目論見が変わっていったものと思われる。それに続いてあれこれ思いめぐらすその内容は、はっきりとは表現されないものの、もはや一五、〇〇〇フランの件は金銭的問題としては背景に退いている。「なんて馬鹿げたことを考えるんだ!」とか「この裏切り」とか「おいおい、お前さんは恐いのか?」とか、彼女は彼の愛人なんかじゃないときっぱり言ったんだから「おれがどうしようと自由だ」などとぶつぶつ呟くのは〔245～6〕、その借金のかたとなった女性へのかた代りの愛、「目も眩む

ような豪華さ」を体現し、「はかり知れぬ数々の快楽を象徴し集約するものとして〔……〕のこの上流社会の女」への欲望からなのである。つまりあの一五、〇〇〇フランの負債は主人公と同じような仕方で返済されることが期待されていたわけだ。だがこれも不思議なのは、どうして突然に彼の欲望が、それまで何とも思っていなかった夫人に向けて焦点を結んだのかである。その経緯に精神的、あるいは生理的理由を見出すことは難しい。どうやらこの欲望は、単に債権者の自覚に発しているのではないだろうか。彼の行動の潜在的指標である貸借対照表に、あの「盗られた」金の等価である抵当物件として彼女の愛もしくは肉体が、友人の金の使い道に示唆されて、この時に記載されたからではないだろうか。フレデリックは一五、〇〇〇フランを貸与して始めて夫人に愛を打明ける権利を得た。それと同じように、弁護士は友人の掴ませた不良債券を、いわば現物のサーヴィスを通して回収する権利を得ていたのだ。これはだから所有権の問題である。しかし同時に、欲望の市場的記号性も関与している。需要が商品を生むのではなく、商品が需要を――市場主義とともにますます――生むとすれば、ある女性への欲望つまり需要は、彼女が商品化されて市場システムに組みこまれない限り、生れてこないと言える。すると商品のリストは欲望の界域をなしていて、そこに記載されていない（例えば、メディアによって商品として宣伝されていない、あるいは商店に陳列されていない）品目には、おそらく想像力すら働かないのかもしれないのである。弁護士は、焦げついた一五、〇〇〇フランを返すがえすも悔しく思っている内に、それを夫人に供与したらしい友人のふるまいを通して彼女の愛の商品的価値とその価格に気がついたのではないだろうか（「おやおや、これも金の効用か」）。そこで夫人訪問にふみきって、儀礼の手順はいっさい抜きでいきなり愛を打明けるのだから、フレデリックを通して支払い済みの金に見合うだけの商品の所有権を主張する、ありきたりのビジネス行為しかそこにはなかった。すると男性が債権者となりそれによって女性の愛が商品としてリスト化された時に成立するこの欲望は、肉体的欲求

に紛らわしく解消するとしても、それをも一要素とする記号的欲望であったというべきで、その発生から結末までのプロセスは、たとえば昆虫や動物の交尾における信号の交換からなる記号的実践と比較しうるもののように思われる。ところで記号の重要な能力は抽象的一般化にある。そのお陰で形態も性格も全く異なるものを同一の名称（男、犬、魚……）で呼んで怪しまないのだが、市場コードでそれに対応するのは価格による平準化であろう。世界はすべて、それを当時侵食しつつあった市場を介して、潜在的顕在的に一般等価物によって数量的目盛に一元的に階梯化され、百科事典的なリストに記載されて再編成されつつあった。そこで同一の目盛に置かれていれば、一日の労働賃金と一本のバラの花が等価交換されてももはや何の抵抗も疑いもさし挟まれなくなりつつあったのではないだろうか。市場のルールが社会のコードになろうとしていたからだ。そしてその辺りに、いわばデロリエの成算が掛かっていたわけだろう。一五、〇〇〇フランで買われた愛なら、フレデリックが違約して払わなかったその金額を結局夫人に借したことになる身としては当然、金による返済をまだしていないだろう夫人にその負債に見合うものとしての愛の支払いを、友人からの裏書き譲渡として自分デロリエに払うように指定する権利を持つことになり、二重の貸借はそれで一挙に解決する手はずだったのである。だから彼と友人との個体差は斟酌されない。彼は夫人がフレデリックの名に動揺するのをみて、「しめしめ、彼に思し召しがあるのだから、おれさまにもその気になるだろう」〔246〕と不思議なことを考えるのもそのためで、負債の額が同一だからなのである。友達とではとりわけ女性へのもて方に雲泥の差があることを認めている〔245〕デロリエが、夫人が二人に対して全く平等に愛の思寵を――自分にはそれも初対面から――与えるだろうと束の間にせよ思ったとしたら、それは価格による世界の平準化が彼の思考に浸透していたからなのである。簡単にいえば、金を払った女性に当然の権利で手を出すようなつもりでいたのだ。そしてこのことは、最初の一五、〇〇〇フランの貸借で暗黙裡にどんな約束が交わされていたの

かを改めて照し返している。弁護士のふるまいという合わせ鏡を通じて、その時は文体的角度の加減で陰に隠れていたものがもろに姿を曝け出すのだ。夫人に委任状を振りかざして、こんなものが執達吏に渡ったら唯では済みませんぞと脅しながら、相手の手にむりやり接吻し愛を求める弁護士の姿は、何より友人の内奥に秘めた思惑を、戯画的に誇張しつつだが正確に映し出しているのではないだろうか。

たしかに弁護士は友人の愛の内容を詳細に知っているわけではないが、結論から言えば正鵠を得ていた。友人が語らなかった愛と金の等価交換だけははっきり見抜いて行動しているのだ。夫人を口説く弁護士は、いわば友人をオリジナルとするコピーであるが、同一の取引きの陰画的債権者に市場コードにこれ以上忠実な行動の仕方は考えられなかったともいえる。しかし同時にそこにはこの作品の登場人物たちに――固有ではないにしても――顕著な人格領域のまたがりも交錯している。彼らは、まるで一人の人物から出発して一種のグリザーユ画法で少しづつ類似と相違によって、次々に輪の重なりを少しづつずらして描いて形成されているようなのだ。彼らはだから互いに重なり合った連環をなしていて、その上に市場コードに基づく敵と味方、対立と協力の人間関係がこの人格的相関の磁力を微妙に受けつつ結ばれたり解けたりしているのである。フレデリックを出発点にして考えると、彼はまず商人的世界観を体現するアルヌーとは一見正反対の人間のようにみえるが、その行動は、アルヌー夫人を愛する一方でロザネットとも関係を結び、とりわけ前者への愛の実現に金で圧力を掛ける点で、商人とあまり違っていないことに気付く。両者は夫人の所有をめぐって――敵対することなく――対立するが、この違いだけが二人が完全に重なることを妨げているのかもしれない。同郷のもう一人の友人マルチノンは、「成上りの百姓の見本」〔266〕と主人公に陰口をたたかれるが、しかし彼は、いわばアルヌー夫人に出会わなかった場合のフレデリックなのである。大資産家のダンブルーズに取入ってその相続者の娘と結婚し議員になって成功を収めるのだから、何から何まで対

照的にみえるのだが、しかしダンブルーズはまずフレデリックに、将来の政治的野望への足場としての会社の秘書の地位を申し出ていたのだし、主人公は彼の娘ではないにしてもその管財人でありやはり大資産家の娘と結婚して、巨額の遺産と知事の椅子くらい手に入れる機会は――別の身代りにしてやられて棒にふってしまうとしても――いくらでもあった。それらに背を向けさせたのは社会主義的理念からでも超俗的無関心からでもなく、アルヌー夫人への執着に溺れる余りであって、従ってもし彼女との邂逅がなければ、彼はまさしく銀行家の娘婿と同じ轍をふんだであろうと想像してよいのである。他の人物も、主人公の交友圏に属するかぎりは人格的に重なる部分を持つ。決闘の相手であるシジィは、共に貴族というだけでなく、祖母の喪があけて（ということは遺産も少し入ってきたということだろう）以来余念なく社交生活ぶり（競馬、会食……）を謳歌するが、それはモロー氏が送る当時の裕福な青年のごく普通の生活を、つまり他の人物の眼に映るとうりの主人公の優雅な姿を示しているだろう。以上の保守派に対して、セネカルを引力の中心として形成される共和派グループのメンバーとも共通する点がないではない。たしかに画家のペルランや三文文士のユソネとなると富の有無において全く反対の境遇にあるが、道具一式を買いこんで画家の手ほどきで一度は絵の勉強を始め（一部五章）、最初の失恋の後やはり机上に資料を山のように載せて「ルネサンス史」の著述に取組み、放棄していた作家への往時の夢を実現しようと試みるのだから〔186〕、ことと次第によっては（後者の場合、アルヌー夫人が訪ねてきて、あだな望みをまた掻き立てなかったら）、画家か文士になったかもしれない位の素質の類似はあったわけだろう。工員のデュサルディエとはさらに境遇的に隔たっている。しかし一方は社会主義的ユートピア、他方は愛の「理想」（「人の形をしたパラダイス」〔269〕）と目ざす方向は異なるが、理想の実現に向けての一途な情熱的追求の点では、変節に痛痒を覚えない連中のなかでこの二人だけが一致している。それに工員は愛についても主人公と同じような考えを抱いていたようだ。皆に問いつめ

られて、「ぼくは同じ女性をいつまでも愛しつづけたい……」と頬を赤くして答えているからだ〔57〕。同席していた者の何人かはその返事に「彼らの魂の秘めた渇望」〔Ibid.〕を見出すのだが、その一人に同席の主人公が含まれていたことは言うまでもない。なお、以上のシジィ、ペルラン、ユソネ、デュサルディエ、さらにセネカル、デロリエなど、主人公の部屋に押しかける連中は「全員気が合った」〔56〕というのだが、それは「政府への憎しみ」〔Ibid.〕においてだったらしい。最初から人間的に虫が好かなかった革命家セネカルとも共有する部分が主人公にあって、それは革命への共感である。たとえ彼の理解が「新聞にはびこる決り文句」の受け売り以上のものではないとしても、ダンブルーズ邸での社交的集いで披瀝したその過激な言論は居合わせた保守派の心胆を寒からしめ、それが評価されてセネカルたちに――それまでの単なる交友関係ではなく――革命派グループの一員として迎えられ、さらに二月革命の決起集会にまで参加を呼びかけられもするのだ。それに背を向けて夫人との逢引きに行くのだから、革命のグループ圏に完全に入りこむことはなかったが、その境界線（保守派との）にはいたわけである。ところで彼がセネカルやその仲間たちの一員になったのには、なによりデロリエという強力な媒介者の存在があった。デロリエは、友人の裏切りを機にセネカルの過激思想への傾倒を強め、アルヌー夫人訪問以後は「何に対しても噛みつき、極度の過激派ぶり」をもって任じるので、フレデリックも「すっかりセネカルばりだね」と思わず寸評を呈する〔262〕。しかしそれにも拘わらず、彼はリセ以来の旧友と完全に関係を断つことはないし、しかも強弱の差はあれつねにその分身として存在し続けていたように思われる。というと、貧富の違いから始まって怠惰と努力、安逸と野心、幸運と不運、革命への参加と放棄とあらゆる点で対照的な二人のどこに、そんな密接なつながりがあるのかと訝しく思われそうだが、彼はアルヌー以上に主人公と双生児的関係にあって、それがこの夫人訪問における清算行為の選択に重要な役割を果たしていたと思われるのだ。類似点は殆どないのだから、彼を主人公に

結びつける親和力はむしろ相補的なものかと思えるのに、なぜか当人はそれを類似的一致だと考えていて、友人に代って愛人になるはずだった訪問の誤算が生じた理由の一つもそこにあるだろう。後に一時セネカル的人格へと変貌をとげるが、この頃はまだ友人の分身をもって任じていたのだ。だから彼が「フレデリックにとって代って、殆ど彼になりすましたつもり」になる心理的契機として、市場コードによる一般交換の実現である「復讐」という外的契機だけではなく、sympathie と imitation も挙げられているのだ。共鳴と模倣は、両者にもともと人格的重なりがあったことを暗示している。身代りは、彼に「殆ど女性的な魅力をつねに及ぼしてきた」〔245〕という友人の「人格そのもの」への内面的な同一化が多少なりとも前提にあったからなのだ。だから彼のこの時の行動は、一般に小説の主人公が守るべき礼節上の制約を免れている分、友人に代ってあけすけにその本音をさらけだすと共に、同化したと思いこんだ人物との距離目測の誤認において、そのパロディを演じるはめにもなる。この奔走は失敗に終るが、しかし最後に彼が巨万の富を得、知事に出世するのはやはり友人の分身になることによってであることを付け加えておこう。

弁護士はいきなり夫人の手に接吻し、愛してますと打明けるのだから、いくら分身でも持っていきようが悪い。当然、「辛辣な、とりつくしまもない苛酷な笑い」〔248, 生島遼一訳〕で頭から撥ねつけられる。ところが権利的にも人格的にも友人――の等価――になりすましたつもりの当人には合点がいかない。「締め殺してやりたい程の怒り」[3]〔248〕を覚える。これでは愛による借金の回収どころか、夫人の方はたとえ身に覚えはなくても、返って負債を膨らませてしまったことになる。彼女の拒否は正当なる市場的行為への違反だからである。実際それは以後の展開で大変高くつくことになるだろう。弁護士がセネカルばりの過激派となって友人の前に登場するのは〔262〕、この訪問を報告する場面においてである。彼が夫人への債権のトラブルを訴訟に持ちこむように唆のかすのは表向

きの不首尾の当然の帰結としても〔261〕、しかしそれだけではもはや貸借の均衡は取れなくなっていた、その利息分が内攻して人格的変化をひきおこしたというところだろう。失恋で人が変るほど落胆したとも言えるが、それは一つにはこの恋愛沙汰がそう見えるような一時の出来心などではなかったからである。ふとした思いつきではあったが、そこに至る過程をよく見ると弁護士の全身全霊がこの求愛に掛かっていたといっても過言ではない。訪問に先立ってのためらいの中で、「これは彼の能力の証明であり、それを自分に示したかった」のだ〔246〕、と情事を仕掛けるにしてはやや筋違いの意気込みを見せていたことを思い出さねばならない。これは、夫人の征服が、支払われなかった一五、〇〇〇フランのいわば正統的な代償だったことに基因する。その前に「その金を手に入れていたら、今頃大変な武器になっていた！」〔Ibid.〕というのは、いうまでもなく例の新聞を創刊していたらということである。新聞は野望の芽を潰され八方塞がりに陥っていた彼にとって、自分の力を発揮して世間に自分を認めさせる唯一の希望になっていたのだから、それが水泡に帰した今、差当り用がなくなった彼の能力を、他に一体どう使えばいいのか。その元凶である夫人を、新聞の夢を閉ざした一五、〇〇〇フランの負債請求として籠絡すること、そこに弁護士としての知識、強固な意志、弁術の冴え、駆け引きの妙といった、差当り使い途のない能力のすべてを動員すること以上に適切な目標はなかったのではあるまいか。この存在のすべてを賭けた要求が、頭から手厳しく撥ねつけられたのだから、生きる最後の一縷の望みを改めて絶たれたに等しかった。人ぐらい変わっても不思議ではなかったのだ、「彼はこれまでになく暗鬱で敵意にみち怒りっぽくなっていた」〔262〕。とはいえこの人格的変化は、なにより債権トラブルないし貸借的不均衡の関数的表現でしかないことを忘れてはならない。つまり、ビジネスの失敗なのだ。だから人が変わった位では済まないことだともいえる。彼はこう打明ける、「一年経っても運(フォルチュヌ)が変らなかったら、アメリカ行きかピストル自殺をするまでだ」〔262〕と。Fortune は普通は富や社会的

地位を意味するが、古代の女神の名でもある。デロリエの悩みはこの段階で、回収目途のたたないアルヌー夫人の思し召しに躓いて、返済の他の手立て（運）を求めて外へと向けられる。恨みの社会化というのか、出発点から自分に経済的ハンディを背負わせていた不公平な社会制度自体の歪みをただすことが問題になる。この時顕著になった彼の適愾心は、「あらゆるものへの怒り」や「過激派的言動」として社会的拡がりを持っていた。それに対してセネカルばりだねという友人の感想が呈されたのだ。これが四八年二月二六日のほぼ前夜にあったことを思い起さねばならない。どうやら革命とは、この作品においてはいわゆる社会正義の実現というより、デロリエのセネカル化に垣間みえるような個人的な貸借関係の不均衡を解決する清算＝復讐以外ではないようだからだ。だから革命とは一見全く無縁にみえる主人公の愛でさえ、それが清算の追求である以上、動機において密接にそれと関連しているらしいのだ。

七章　ビジネスとしての革命

デロリエの貸借対照表の記入法には、しかし今一つ腑に落ちないものがある。約束を破った友人を恨むのはいいが、借りそこねた金を「盗まれた」とみなし、その代償を求めて、友人の愛する女性のところにまで押しかけるのは行きすぎではないだろうか。これは生来の図々しさから出たことのようにみえるが、しかしそれと粉れつつ、あるいはまさにそういう積極的な行動の仕方を招来した原因のひとつとして、予め債権者意識のようなものが彼の中に形成されていたためではないかと思われる。簡単に言えばそれは生れつきの貧富の差を天の定めた動かしえぬ所与ではなく、何かの誤りによって生じた歴史的産物とみなす考えに発するだろう。大雑把に言えば貧は平等であるべき富を一部の人間が簒奪したことから生じるのであり、富者は盗みの加害者、貧者は自分の富を不当に横取りさ

れた被害者なのだ。では貧富の差がある限り前者は後者に社会的に負債があることになる。後者は持たざるゆえの逆特権意識において持てるものに経済的要求をする権利が生じるし、富者は富者であるというだけで貧しきものに抱くべき疚しさを金銭的な気前の良さでうめ合わせようと努力しなければならない。この階級的というべき債務の存在は、他の友人たちの行動を通してもかなり鮮明に浮かびあがる。

画家のペルランは、主人公の口利きでロザネットの肖像画を描く。ところがそれはサロンに落選し、買い手もつかない。困った画家は「彼女の愛人」であるフレデリックに話を持ってくるが、後者は法外な売り値を聞いて断わる。主人公は相手を欲張りと言い、相手はしみったれと応酬して〔217〕、喧嘩別れになる。しかしその数日後、この肖像画がある画廊の人目をひく店先に飾られているのをフレデリックは発見する。絵にはロザネットの名と、その所有者としての彼の名が記載されているのだから、それは明らかにそれを買わなかった彼への嫌がらせである〔235〕。辱めをうけた主人公はこのことでペルランに「恨み」を抱く〔266〕。この段階でどちらに負い目があるかといえば、絵を買う買わないは主人公の自由なのだから、買わないことを根にもって恥を掻かせようとした画家の方にあるだろう。ところがデロリエが間に入って、主人公は「唾棄すべき」肖像画を五〇〇フランで買いとるはめになる。当然、気持は収まらない。貨借のバランスは彼にとって不利な傾きで崩れている。「フレデリックはその絵を辛辣にこきおろすことで、金を出した腹いせをした」〔267〕という。しかし体裁を傷つけられた上に金を払わせられたのだから、悪口ぐらいでは割に合わないのではないかと思えるのだが、それにも拘わらずこれでこの件はひとまずけりが付いたようでなのある。

同じ頃、作家くずれのユソネから手紙で五、〇〇〇フランの無心をされ、これも拒否するとしっぺ返しをくらう。相手はシジィとの決闘の件でさんざん愚弄した中傷記事を新聞に書いて「服讐」〔235〕するのだ。この金は、こ

れもなぜか新聞事業の資金なのだが、デロリエのように折入って頼まれたわけでも（手紙の追伸で言及されるだけ）、かりそめにも借す約束をしたわけではさらにない。にも拘わらずユソネは、日頃食事のごちそうなどになっている友人を筆誅の槍玉にあげるのをためらわなかったし、そのことで相手からの反撃があったとは書かれていない。貸借関係の均衡はこれで崩れていないのだろうか。

主人公の家に、肖像画を売りこみに来たペルランが辞去するのと入れかわりに、セネカルがひょっこり顔を出す。何の用かと思えば、はたしてアルヌーの陶器工場をやめさせられたので別の仕事を斡旋しろという頼みごとである〔217〕。アルヌーのところに紹介したのも主人公なのだが、その件では礼を言うどころか、「あんたがいなかったら、もっといい仕事を見つけていただろう」と返って非難される始末だ〔Ibid.〕。主人公はこの日は仕事の世話はできないが、その代りになにがしかの金を与えて帰す。それを当然の如く受けとったセネカルが、しかしながらその後返済の件で多少なりとも心悩ました様子は全くない。

三人との貸借関係において、主人公の立場はどうやら対等とは見なされていないといわねばならない。なぜか。一言でいえば、彼らが貧しいからなのである。デロリエは肖像画の件でペルランをとりなした時、それを根に持つ主人公にこう吹聴していた、「奴さんはついカッとなってしまったが、一文なしの男には許されることだ。君にはそういうのは想像もつかないだろうな！」〔267〕。貧しき者のみが享受する特権が存在するのである。フレデリックが彼らとの貸借関係において不利にみえるとしても、これはそれ以前に相手の方が割をくって生れている、その分の補塡の必要があるからなのだ。となるとこれはひとりフレデリックの特殊事例ではない。富者は貧者におしなべて社会的負い目があるはずで、時としてゆすりたかりも一箇の権利として黙認しなければならない。社会の歪みによって生じた貧富というほぼ制度的な貨借の不均衡をそれなりに是正する手続きとなりうるからである。人類の

平等思想がその前提にはあるが、それが何に基づくにせよ、[4] デロリエやユソネの主人公に対する金銭上の私的怨恨は、ではそのまま革命のエネルギーになりうるものだったと言わねばならない。というのもこの作品において革命とは、社会大義の実現というより、貧者にも陽が当るように富の配分法を変更することだからである。金持ちの主人公に友人たちがしきりに借金の請求をするが、特権階級が享受する社会の富や利権をこれまで割をくった者たちにもその恵みに預からせるのだから、革命とは、早い話が無心の相手を個々人から階級へと規模を拡大することなのだ。動機において両者を区別するのが難しいとなると、前者から後者への移行はごく自然に行われるだろう。一五、〇〇〇フランを貰いそこねたデロリエは、裏切った主人公への友情の死を宣告して、セネカルへと傾斜を強めていくのだが、よく見るとセネカルではなく、彼の「意見」つまりその過激な共和主義に傾き、「それに役立とう」と誓ったと書かれている。個人的感情に発することが社会正義の問題として帰結している。そういえばその前の文において、富める主人公への私的恨みは階級的矛盾として一般化されていた、「金持ちたちへの憎悪が彼のなかに漲った」〔186〕。個人の利害と革命は同心円的、もしくは前者は後者の核なのである。だから復讐、つまり市場コードに基づく貸借不均衡の清算はどちらにも通用する。革命後、大銀行家のダンブルーズは地方にある自分の所有地に民衆が「復讐」〔300〕から何かしでかすのではないかと危惧していたが、予想しうる民衆の行動に公私の区別をたてることができるだろうか。フェミニストのヴァトナは、他の多くの人々と同様に「革命を復讐の機到来」〔302〕として歓迎するが、女性として階級とは別のレベルで抑圧されていただろうから、革命のそういう動機はよりはっきりと映っていたのではないだろうか。しかし復讐とは何か。たんなる私的制裁というにとどまらず、人間関係の貸借の不均衡をただす基本的なルールというべきだろう。ただし貸借上の諸問題のうち、数量や定式、さらに前例などによって一般的な規定で処理しうるものとそうでないものがあって、司法的な解決が可能な前者よりも、規定

の曖昧な領域の方が実際の生活ではより大きな部分を占めるのではないかと思われる。しかし規定が曖昧で明文化しにくいといっても、貸借的均衡への要求が弱いという意味ではなく、それは前者に劣らず厳密であろう。復讐というと、後者の複雑な領域（とりわけ感情にかかわる）における貸借関係の均衡を求めることを思い浮かべがちだが、それはむしろ経済的解決としての清算、司法的解決としての処罰などすべてに通底する代償的原則であるように思われる。

復讐としての革命は、ここではだから「自由、平等、博愛という崇高なスローガン」のもとに遂行される人類の進歩とか人道的理念というふうには必ずしも語られていない。持たざる者たちが不当に横取りされた富を、復讐として奪い返すことなのである。だから制度的不均衡を是正するこのいわば集団的無心やたかりにおいて、どこまでがただの略奪でどこからが社会的正義なのか、勝利者の判断に頼る以外、一線を画することは難しい。王が逃げた後のパレ・ロワイヤルになだれこんだ群衆は、玉座を窓から投棄し、鏡、テーブル、タペストリなどの豪華な家具・調度を破壊し、王女のベッドに寝ころげ、酒を飲み、踊り、したい放題の乱痴気騒ぎをくりひろげる。それは「復讐よりもむしろ所有を実感するため」と説明されるが〔293〕、この不当に奪われていた富の取戻しにおいて、清算としての所有はそのまま復讐なのである。勝利の祝祭的興奮が鎮まると、いよいよ社会のさまざまな利益代表（主に職種別）が予算や利権を得ようと詰めかける。その中には石工組合や家禽販売業代表に混じって、仲間の画家と「美術フォーラム」なる団体を設立してその嘆願にやってきた、機をみるに敏なるペルランの顔もみえる〔298〕。誰もが、ルジャンバールのいうように、「共和国政府を食いものにしている」〔299〕のだ。しかし革命が起きたのはまさにこのため、富の再配分のためなのである。

すると、保守派も革命派も富を獲得ないし維持する立場の党派的違いはあっても、目的も思惟・行動の仕方もあ

まり変らないことになる。要するに革命側は支配層を追い出して、その後釜に坐ろうとしているのだから、貧者は運がよかった富者の模倣をしているだけともいえる。彼らのデイスクールがどこか似通うのもそのためだろう。

革命前、セネカルの出所祝いがデュサルディエの部屋で開かれた時、居合わせた面々は政府の施策、王の浪費、官吏の汚職を糾弾するが、彼らの「不正への憎しみ」は、利権を享受する者への羨望や怨恨と区別できるのだろうか。あるいはそれなしに生れただろうか。その一人のユソネが穴談めかして言う「〔わが哀れな家族に〕金を与えよ」が本音なのである。革命派が願う民主主義も共和制も普通選挙も、民衆から遠く隔てられ、特権階級が秘匿して享受してきた富を、彼らの手の届くところに引きこもうとする、何よりも経済的な手段であった。それを正義とみるかどうかは、貧富いずれの側に属するかという立場の相違に帰着する。だから、ここでの論調が、その前のダンブルーズ伯爵邸で金持ち同志の間にとびかった言説とは真向から対立することはいうまでもないとしても、しかし敵を攻撃する論理は同工異曲なのである。前者では富者は貧者に行くべき財を横取りしたのだから「泥棒」〔264〕であるばかりか、セネカルによれば「黄金の天井下で犯罪に耽っている」〔310〕のだが、「貧しき者は、それに対して、飢えで身悶えしながらも諸徳の涵養をおこたらない」〔Ibid.〕。ところが相手のブルジョワジーからは、貧者こそ悪人である。まず極度の貧困は救済する必要があるかといえば、否、その悲惨さは「非常に誇張されている」〔238〕と問題を軽んじたうえで、たとえ主人公の旧友マルチノンが認めるように「貧困が存在する」としても、それは学問や権力ではいかんともしがたい、「純粋に個人的な問題」であり、個人の悪徳の致すところなのだ。（「もし下層階級が悪徳を捨てれば……」）。「民衆よ、より道徳的たらんとせよ、その分だけ貧しさから脱するだろう」〔Ibid.〕。後に、資本家のフュミションも貧乏悪徳説を主張する。社会主義を批判して、一五、〇〇〇フランの元金から出発して三〇年間毎朝四時起きで刻苦精励して財産を築いたのに、その金を民衆は「私のものではない」

と抜かし、「所有は泥棒だ」とほざくといって憤慨する〔348〕。しかしこの最初の一五、〇〇〇フランが民衆にはないのだし、とりわけそれを殖やすための技能を身につける教育的投資はさらに彼らには欠けていることは考慮の外にある。それはとにかく、両陣営はたしかに対立するのだが、それは持つと持たざると攻防ところを変えた利害上の相違だけで、つまるところ所有への欲求という同じ土俵に立っているのではないだろうか。両者の言説が同じパターンを透かしみせるのもそのためなのだ。革命も保守も精神構造としては似たようなものなのだから、個人的につきあえばお互いにさぞや話がよく合うだろう。画商時代のアルヌーは共和派のユソネやペルランと交際するが、後に国民軍に志願してダンブルーズの生命を救い、信用をかちえる。それは三文文士と貧乏画家も同じである。この二人の共和派は新政府が行きづまると、共に大銀行家に取入って、前者は保守派を擁護した著述を彼に献呈し、後者も「それまでの考え方を変えて」〔343〕、絵画にとって良い政体とは王制であるなどと言明する。ユソネはさらに資本家フュミションの伝記まで書いて、保守派の一員になります。こうなるともはや交友が広いでは済まなくて、あきらかに敵陣営への転向であり裏切りである。ところがその種の変節がひきずるはずの懊悩だの後暗さだのの影はここには一抹もない。彼らばかりか皆が皆、ふしぎな程明るく悪びれないのだが、それもそのはずで、革命が富の再配分を求めてそれを引込む新たな回路を作りだすことに帰するなら、共和政府がその要望にこたえる見通しが立ち難くなった時、勢いを盛り返した保守派に別の回路を求めて接近するのは正当な経済的判断で、手段は変わっても目標はそのままなのだから、信念とか裏切りといったややこしい感情とは最初から縁がなかったことなのだ。これは潰れる寸前の企業を去って、将来有望なところに再就職するのと少しも変らないふるまいである。あるいは単に経営陣の交替ぐらいだろうか。他方すり寄られたダンブルーズはといえば、主義の変更では彼の方が一枚も二枚も役者が上である。二月革命直後、あご鬚をのばしフェルト帽を被って庶民に身をやつして外出し、それで

も財産が心配で、過激な言辞を弄するフレデリックの庇護が仰げるかと腰低くわざわざ彼を訪ねていき、前から本音では共和派として自由、平等、博愛のモットーを心から信奉していたことや、「労働者への共感」を表明してみせる〔300-301〕。その線に沿ってペルランの革命的絵画をれいれいしく客間に飾るものの、時到り保守の逆風が吹き始めればただちにそれを片附ける〔343〕。「晴雨計さながら絶えず最新の変動を表わし」〔366〕、主義の異なる幾つもの政府や政変を躓きもせず――言いたくもない「共和国万歳」〔321〕をその都度唱えつつ――生きのびたこの変り身の早さはあらゆる登場人物たちの鑑だといっても過言ではない。もっともその生き方は、「宗教と同じくらい崇められ」、「〈神〉と混同」された所有への拝跪においては、終始一貫していたのである。その苦労の甲斐があって、三〇〇万フランの遺産も残せたのだ。となると、作中一番の長者として世の手本とすべきこの人物の家紋にも注意をはらわねばならない。「黒地に金の左腕、銀の手袋をはめた握りこぶし」〔382〕という紋章は、彼の不屈の信仰が何に捧げられていたかを如実に物語っている。またそこに添えられた「あらゆる手段によって」〔Ibid.〕という銘句は、何事にもめげずひたすら辛棒して財産を守り育ててきたその生き方にまことにふさわしい。というより銀行家は家紋の教えにただ忠実に生きてきたのだが、するとこの紋章も銘も、一家一門をこえてこの作品全体の機構を支配するある思想の象徴であり、その守護神となっているのではないだろうか。

全ては富の追求に掛っていて、絶対相容れないかに思われた共和派と保守派の主義主張の対立も、幾つもある経済的手法程度の違いしかなく、結局は誰もがいわばダンブルーズ教の信者だということになると、あの最左翼から最右翼への目を見張る豹変も、ではさして驚くことではないのかもしれない。若くしてブランキなどの組織する社会主義革命の秘密結社の一員となり、警察の監視をうけつつ過激な活動に加わり入獄も経験した〔233〕、いわば筋金入りの革命家が保守独裁政権下の警官となってかつての同志を虐殺するとなれば、誰がみても裏切りというほ

かはないが、セネカル当人は、ペルランほどにも信念に変更があったことを認めていない。では負けおしみの詭弁なのかといえば、そうとも言いきれないふしがあるのだ。詳細は後にゆづるが、クーデタ直前は経済的に恵まれなかった彼の半生でもとりわけ貧に苦しんだ時期である。そんな時に彼は、もはや共和主義ではくえないと見切りをつけたかのように保守支持をうち出し、新独裁者下の警官の職をえるのだ。それまではフレデリックに頼んだりしても中々良い仕事がなかったのだが、これでようやくひと安心というところではあるまいか。なるほどこれでは、革命家の一八〇度の転換も、思想的転向というより文字通りにただの再就職の問題だったことになる。しかしこれも皆と同じ信念に彼が組していたからではないだろうか。第一、彼が保守派の大立物ダンブルーズのところに仕事の紹介を主人公に依頼したのは、まだ革命前の、革命活動真最中の頃ではなかったろうか。

それほど強くこの信念、いわばダンブルーズ教が人々を呪縛している中で、では一五、〇〇〇フランがただで借され、そのまま借り放しですむだろうか。システムとしての重みがこの債務の履行に圧しかかっていることに気付かなければならない。そしてその重みは、さらに人間関係のあり方を通してもたえず暗示されている。

この作品で登場人物が相互につくる人間関係は基本的に経済的である。具体的にはそれは貸借か仕事（アフェール）かの関係で、往々にして利益の見込めない相手には接近しないか、逆に交際する人間からは何か利益をひきだしたり、仕事の相手にしようとし、そうした思惑だけが彼らを結びつける。誰もが敬虔なるダンブルーズ教徒だということなのだが、これは作品の構成が市場原理に依拠することの具体的な帰結であろう。宗主の、銀行家兼大地主については贅言を奔するまでもなく、その行動はすみずみまでビジネス中心のスケジュールで組まれていて、交友もそれに準じて形成される。彼とやはり大地主のロック老人との関係は、後者が彼の土地の管理者になることで成立しているし、同郷の青年フレデリックとの交際も、最初の訪門の地縁からすぐに仕事上のそれへと変化する。自分の会社の株の購

入を青年に勧め、自分の仕事を一部任せる地位さえ申し出て、後者がもし応じていればその継承者になっていたかもしれない。彼はその件での呼びだしを――アルヌー夫人のせいで――すっぽかした青年に、先日は「われわれのビジネスの件で」〔238〕来てくれなかったねと穏やかに詰るだろう。前述のように二月革命以後、彼が改めて青年に接近するのは不穏な情勢に脅やかされた自分の財産の「庇護」をあてにしてだから、これもビジネス上のつきあいとしてだった。アルヌーとは二月八日の騒動で助けられて以来交際するようになるが、しかし二人はすでに四、〇〇〇フランの約束手形の件で貸借関係にあったし、清算されないままのこの負債で商人が、債権者の存命中悩まされないで済んだのは、彼の二月八日の人道的ふるまいに、顧みてビジネスの性格を帯びさせる。もっともそう思うのは日頃の商人の言動を知るための僻目なのかもしれない。画商時代の彼の交際は、まず店に来る客（販売）か仕入れの取引き相手（画家ペルラン、贋作づくりの老人……）という仕事上のものであり、その後の放縦な事業拡大は負債をふくれあがらせたらしく、友人のフレデリックばかりか愛人のロザネットも借金の相手にして、債務関係を拡大しているからだ。しかも、後述するように、この友人への負債はロザネットへのそれを始めとする幾つかの負債を巻きこんで大詰めの一連の訴訟へと発展するだろう。彼とヴァトナとのよく判らない関係も、仕事絡みの気配はあったし〔72〕、他方彼女とロザネットとのつきあいも半ば友情、半ば恋敵というにとどまらず、つきつめれば貸し借りの仲で、前者が告訴して執達吏が登場し、後者は危うく差押えをくらうところまで行く。ロザネットとなると、実の母親に売りとばされて以来、男との交際は仕事上多かれ少なかれビジネスである。フレデリックをお伴に出かけた競馬場で出会う知りあいの男性の多彩な顔ぶれは、自ら商品且つ売り手となる彼女の商売の繁盛ぶりを語る。フレデリックの場合も、彼とデロリエ、セネカル、ペルラン、ユソネなどとの交友が――例の社会的負債を考慮しなくても――経済的動機を多分に含んでいることは前掲の通りだし、アルヌーとはもちろん、その妻と

の関係も例外ではないらしいことはこれまで述べたことからも推察がつく。ではロック老人、というより愛娘のルイーズ、またダンブルーズ夫人との間はどうだろうか。ここには貸借関係はない。しかし仕事ないしビジネス上のつながりはある。一般に生計をたてるにせよ富を得るにせよ、経済的方法を自力による採取、狩漁、農耕、牧畜と、他力型の略奪、およびその中間の売買、金融と三つに分類した場合、相続はそのどこに入るのだろうか。それはある意味では略奪的ビジネス（海賊、侵略戦争、帝国経営。さらに卑近な例では窃盗、暴力団による脅喝や管理費つまり税金としてのショバ代集め……）に限りなく近い不労所得のように思われるが、いずれにしても富の配分法を一テーマとするこの作品で、このまとまった富の継承法が重要な位置を占めたとしても不思議ではない。それはここでは最大の富を効率よく獲得する方法なのだ。フレデリックの叔父の財産の行方に関する不安が作品冒頭に暗雲のごとく立ちこめ、その相続が青年にどうやら夫人を愛する資格を与えたのだから、それは物語の不可欠な契機をなしていたことになる。遺産は――あいにく欲張りな父を持つデロリエとは違って――運よく彼の掌に転がりこんできたわけだが、世襲ならともかく、しばしば被相続者のジャンセニスム的神の恩寵のような気紛れに左右されるのだから、これを仕事とか事業とか呼ぶのは語弊があるのかもしれない。しかし彼のダンブルーズ夫人との婚約の場合はどうだろうか。たしかに彼がこの大富豪の妻として上流社会の女性を、思いがけない凄腕をふるって籠絡した時はこんなに早く彼女の夫が死ぬとは思っていなかったのだから、遺産目当てに接近したとはいえない。「富豪の妻をものにした喜び」〔375〕と、せいぜい「社交界で巾をきかす〔…〕足掛り」に利用してやろうと思う位だった〔376〕。とはいえすでに愛を与えて何かを得ようという互酬交換的な枠のなかで行動していたとはいえる。いわばロザネットと同じ仕事を、性は異なれ、そして彼女の方は看板を出していたのにこちらは――例のごとく――闇市で、始めていたことになる。愛の代償に提供される夫人のサーヴィスと財の収入項目欄（主人公の側の）に、

すでに病気だったらしい銀行家の遺産がやがて記入されるのを待つばかりだったともいえる。だから、夫の死後ただちに「自分の財産状態」ses affaires〔379〕を夫人が説明したうえで求婚した時、富に「目が眩んだ」愛人が承諾する〔Ibid.〕のはそれまでの取引き関係の延長としてであり、婚約はまさしく巨万の富を濡れ手に粟で稼ぐ営利事業として行われたといっても過言ではないだろう。今度も、前のもう一人の夫人との場合のようにはっきり条文化して契約したわけではないが、その辺りの呼吸は、遺産額を先に呈示して求婚に持っていった未亡人もよく心得ていたことなのだ。契約（contrat）と合意（convention）の区別がつかないで不合格になったことのある法学士としては〔60-61〕、これはその違いがのみこめるようになったと賞めてよいのだろうか。

もう一つの資産の行方も周囲の気掛りのたねになる。ロックの財産は一人娘のルイーズに世襲されることは間違いないし、彼女は隣人の垢抜けした貴公子に首ったけなのだが、肝心の相手の方が気を揉む母親の心配をよそに例の人妻に入れあげているのだから、宝の山を意のままにする幸運児が誰になるのか定かではない。無欲の青年は、アルヌー夫人がこの田舎娘との婚約の噂を持ちだした時、「彼女が金持ちだと聞かされたんですね。とんでもない！金なんか眼中にありませんよ」と言下に否定する〔269〕。ではなぜルイーズはいつまでも彼を諦めなかったのだろうか。どうやらこの青年の返答は、長年の恋の成否がその一言に掛っているかもしれない時に、まさかそれ以外の返事の仕様が考えられなかったからこその言い草で、ルイーズ自身に対しては実はこれほどきっぱりとはものをいっていなかったのである。このアルヌー夫人との再会に先立って故郷ノジャンに戻った時、彼は財産付き娘にパリに好きな人がいるのではと聞かれて、いないと断言している〔251-2〕。のみならず、彼女がそれに気を許して誘惑に出てくると、それはかわすが、「私の夫になってくれる?」と聞かれると、「だけど」と口ごもった後、「多分ね……願ってもないことさ」と答えているのだから〔253〕、彼を盲目的に愛する少女としては諦めることなど

まだ思いも及ばなかったのだ。いや相手も、「ロック氏の財産に唆られて」、「実りのない愛」に心をすりへらすより、少女と結婚するのもそうばか〳〵しくない選択肢ではないかと心動かした時期もあった〔255〕。革命後二人はダンブルーズ家の晩餐会で鉢合わせする。ただそこには革命が勃発した日にあれだけ誓った逢引きをすっぽかして言いわけもしてこないアルヌー夫人が夫と共にやってきた上に席も隣合わせだったのだから、遠くの席の「野暮ったい」〔345〕少女の御機嫌をとる余裕はなかった。だから帰りにロックの差し金で同じ馬車で帰ることになった時、「あんたは私のことを恥ずかしく思ったに違いない」などと言われるのだが、それにも拘わらず、彼女に「私だけを愛してる？」と聞かれると、青年はそれを誓ったり断言したりする。ただ二、三日中に求婚に来るようにという急な話になると、慌てて言を左右にして引延ばしにかかるだろう〔352〕。好きでもないのに決裂をさけて徒な望みをつないでおくわけだが、これは家付き娘との結婚が彼にとってまさにビジネスになっていたからではないだろうか。その後青年が彼女のことなどもはや念頭にないように、その主人筋のダンブルーズ未亡人と婚約するのは、上流社会の魅力とかセンスの良さとか他に理由がなかったわけではないだろうが、それもこれも煎じつめれば三〇〇万フランの遺産があればこそだったと気を廻しても間違いではないだろう。いくらロック嬢が背伸びしても届く身代ではなかったのだ。だからこの遺産が取らぬ狸の皮算用に終った時、明敏なる企業家の脳裡には早速「ルイーズの思い出が蘇って」くる〔417〕。彼がノジァンのルイーズに会いに行くのは、求婚という仕事のためだったと考えられるのだ。もっともその理由としては、「彼女は世間知らずの百姓娘で、殆ど野蛮人だが、気立てだけは良い！」〔Ibid〕と人柄にふれるだけで、金銭には言及されていないのだが、彼が捨てた未亡人になお三万リーブルの年収があったとしても、しかしこれから会いに行く娘の方は年収四万五千リーブルだったことを思い出すべきではないだろうか。ちなみに叔父の遺産は、その後大分目減りしているだろうが、当初は年収二万七千リーブルである。意

地悪くいえば、親の遺産をあてにして成長し、結局叔父の財産を貰って紳士として世渡りをしている彼には、ひとさまの大金を懐に入れるこの仕事のうまみが忘れられなかったろうから、労多くして身入りの少ないそれ以外の稼ぎ方に手を出す気はなくなっていたに違いないのだ。

ところでこの時ルイーズと結婚してまんまとその財産を手に入れる友人デロリエは、かつてフレデリックが叔父の遺産を貰った時には、彼をペテンで財をなしたある人物と比較し、さらに傍系相続そのものにも反対して、それは「次の革命で廃止される」という見解を述べていた〔113〕。彼には現今の相続法への反撥があるらしいのだが、それは彼の財政的不遇と関係がある。相続とは社会的富の再配分の最も重要な分野だからである。だから持たざるもののこの反撥には、いわば彼の提出した学位論文が賞讃を浴びながらその後の教授資格試験には惨憺たる成績で敗退して、年来の法学部教授の夢を無念にも断つにいたった廻り合わせと緊密に結びつくものがあるといってよいだろう。まず相続に関するデロリエの個人的状況に一瞥を投じておくと、彼は父親が、死んだ母親の遺産を息子に引き渡そうとしないことに兼々悩まされていた。それを要求すると返って生活費を打ちきられる〔15〕。父親は、十年で息子の相続権が失効するのを待つ気でいるらしいのだ。しかし息子はやがてお得意の法律的知識を駆使して母の遺産はすべて奪い返すのだが〔43〕。息子の権利さえ侵害してその財産をひとり占めにしようとする父親が、その息子を自分の相続者に指命するかどうかは大いに疑わしい。遺言権を揮って直系の自分に遺産を譲らない不安を息子が抱いたとしても不思議ではない。叔父の遺産を貰ったばかりのフレデリックを彼がペテン師扱いする〔113〕のはこの状況と関係がある。友人がそれで大金を手に入れた傍系相続に彼が敵意を示すのは、まさにそれによって逆に自分が父の富を取り逃がす危惧と裏表をなしているに違いないのだ。しかしなぜそれが社会的不正として「次の革命で」〔ibid.〕廃止されるべきなのか？　厳しく咎嵩な父への個人的恨みが社会制度への弾劾の動機

として、ここでも公と私が結びつくのだが、それはどのようにしてなのか？　息子の取るべき財産をさえ自分の勝手にする横暴な父の掟と、人民の富を横取りして手放すまいとする富裕者層そして彼らが自分たちの利益を守るために牛耳る社会の諸制度が重ね合わせられているからなのだとひとまずいえるだろう。デロリエが博士論文を賞讃されながらも〔86〕教授資格試験は不合格になった〔111-2〕ということは、能力はあるが教授として社会の支配者階級の一員になる適性が彼には欠けていたからではないだろうか。それは彼がすでに共和主義にかぶれていたからというだけではない。学位論文が何を主題にしていたのか示されていないが[5]、教授資格試験で提出した論文は、まさに「遺言権」についてだったのである。富の最も一般的な再配分である相続について、もし彼が父親の権利を現行通り認める立場から意見を述べていたなら、試験は合格していたのではないだろうか。ところが遺言権の乱用が父からの相続を危うくしかねない立場におかれている彼は「それはできるだけ制限しなければならない」と真向から反論してしまうのだ。さらに悪いことに籤で選んだ口答試問の題が、父との葛藤で丁度悩まされていた時効なのだからよくよく運に見離されていたのである。「それを廃止しよう」〔112〕と主張していきり立っても仕方がなかった。どうして所有者に満三一歳にならないと資格がないからと自分の財産を剝奪されねばならないのか？　これでは金持ちになった泥棒の相続者に、正直な人間のための安全を確保するようなものではないか？「あらゆる不正は、圧制であり力の乱用であるこの権利の拡大によって確立されているのだ」〔111〕。父への怨根に発するだろうとしても、これは現体制への正面切った告発である。これらの法律によって富の特権的専有を享受する人々にこうも敵対してかかる人物を合格させて、大学教授への途を開いてやったのでは、審査員が何のためにいるのか判らないことになる。こうして支配階級への入口を閉ざされた弁護士は「その辛辣さで保守党を震えあがらせ」、かつてのセネカルのような赤いフラネルの裏地付きコートをはおって登場することになる〔112〕。相続問題が、もと

もと共和主義的素地のあったこの有望な才能を、革命支持者としてセネカルの思想に傾斜させる第一段階をなしていたのだが、それはこの作品が私利私欲を追求して動きまわる人々を通しての富の再配分を動機としており、相続はそこにおいて貧富両陣営のいずれに属すかを示す試金石となるからである。

八章　いよいよ清算

あの負債の一件は、革命前の瑣末なエピソードとして、今では思い出すものさえいないかのようにみえる。デロリエは革命後の騒然とした情勢をこれ幸いと地位や名誉を求めてとび廻り、当のフレデリックも今度こそはと期待の高まった夫人との逢引きの約束をものの見事に破られてからは、ただちにロザネットを愛人に囲い、フォンテーヌブローに逃避行としゃれるかと思えば世俗的野心を燃やして革命政権の代議士に打って出ようと画策する。そればかりか、やがて子までなした情婦を見限って、大金持ちのダンブルーズの妻に誘惑の手を伸ばすというふうだから、あの時貸した金どころか夫人への至高の愛までもはやどこ吹く風といった気配なのである。世は日々に変わりつつあり、誰も彼もが忙しい。ついに旧政権は打倒され新しい時代がやってきたのに、昔のことをほじくり返してどうなるのか。好機到来とばかりに目の色を変えた男たちが殺到する世の中に過去を詮索するひまなどあるはずがない。そういうことではないのである。何が起ころうとあのシステムだけは揺るぎがないのであり、革命もそれには手をつけなかった、というより革命もその支配下に進行したのだから、不図したことで埋もれた証書がいつ古い地層から蘇って威力を発揮しないとも限らないのである。かつて隠然たる権威を揮って、人々を走らせていた一五、〇〇〇フランのことを口にするものはもはやいないにしても、それが人々の間を掠めすぎた痕らしきものは認められる。いやふり返ると、すでにそれ以前からやがて重要な意味を持つこの数字への合図のようなものが、幾度とな

く送られていたようだ。主人公がアルヌー夫妻に吹聴していた父の遺産額（年収一五、〇〇〇リーブル、P.91）、持ち株の一五フランの値上り〔236〕、その倍数まで考慮すればそれによる三〇、〇〇〇フランの儲けと六〇、〇〇〇フランの損失（つまり三〇フランの値下り P.242）は、テクストの中心的数字にわれわれの注意をひきつけていたのではないだろうか。革命後もそうした目配せが投げつけられるのだ。実業家フュミションが財をなしたその元手が、前述のようになぜか同額の一五、〇〇〇フランだったし、マルチノンが大資本家ダンブルーズの娘と結婚してその遺産として懐に転がりこんだのが年収三〇〇万フラン（これも倍数）、彼がこの大金的を射抜いたのは自分の財産を卒直に告白して資本家の心を動かしたからだが、その額が単位違いの一五、〇〇〇リーヴルなのである。思わせぶりなこれらの数字は風化にさらされて消滅したかにみえるある出来事を怠惰な眠りから目覚めさせようとしているのか、作品を呪縛するシステムのそれとない警告なのか。いずれにせよ数字が同じなだけこの二人の成功者との対照は、貨金回収もろくにできない主人公のていたらくに重くのしかかる。分身マルチノンと違って三〇〇万フランの遺産を取り損ね、フュミションと違って同額の金を持ちながら財を築くことのなかった主人公の姿が彼らの陰画として浮かびあがり、返済されないままの安閑たる一五、〇〇〇フランに活気を取戻させようとする。しかし結局、あらゆる無関心と忘却の気配にも拘わらず、革命的共和主義者たちも資本家たちも、その未来への道のまさぐりをあのコードの掣肘を受けずには行えないのだから、結局すべては、保守派の復活が示すように元通りであって、だから一度記載された負債は当人たちの勝手で立消えになることは許されない。何が何でも返済されねばならないのであり、度々いうように清算なしにはそれと表意一体をなす物語も終りようがなかった。となると、場所からいっても大詰めのあたり、『感情教育』三部四章から五章に掛けて、それもわずか十頁前後の部分に、債務履行を求める四件ほどの訴訟と、その一件の帰結としての差押えおよび競売という清算の追求が矢継早に行われ

ていたことに注意を向けないわけにはいかない。ただし、今度の四件の訴訟で巾をきかせる数字は四、〇〇〇とか一二、〇〇〇で、肝心の一五、〇〇〇は見当らない。その件は十数年後に負債＝物語を終らせようとアルヌー夫人が訪ねてくる次の第六章のエピローグに委ねたということなのかというと、そうとばかりも言えず、よく透して見ると、これらの訴訟は三件とも、数字は異なるがあの片のつかない古い負債がその蓄えたエネルギーを形をかえて吹き出させていたことに気付くのである。たとえば弁護士デロリエが、今やその分身というべきセネカルと組をつくって、この公的な復讐形態の遂行に暗躍していたことに疑いの眼を向けなければならない。なぜ彼らがアルヌー夫人を破滅させるための、いわば他人の訴訟に首を突っこむ必要があったのかと言えば、その動機をあの古い債権の請求以外に探ることはできそうにないのだ。

共和政権樹立後の騒然たる世相の中で、ダンブルーズの一言に急に功名心を煽られた主人公は、代議士になる野心に捉えられる。無為徒食に暮してきた感傷的な青年が、ようやくここでそれらしい血気に駆られて世に打って出ようとする段ともみえるが、相憎その出鼻は思いがけないところから出たちょっかいで挫かれる。思い掛けないのだが、しかし大変筋の正しい障碍だったと言わねばならない。代議士選挙の演説をするための適当な政治クラブを物色していた彼は、デュサルディエの見つけた「知性クラブ」が適当ではないかと、そこへ友人たちと揃って出掛ける。中に入ると、その議長としてやがて登場したのが、少し前に友人たちと出所祝いをしてやったセネカルで、彼は革命後ここで重きをなしているらしい。前の祝いの集りで仲間の一員として「厚い共感の念」をもって迎えられていた主人公としては、思いがけず頼もしい後楯をえたと考えられるところなのである。しかしそのセネカルが災いになる。彼が提出した異議のために、主人公はそこで演説をさせてもらえるどころか、立候補の資格においてすでに問題ありとされ、無念にも出馬の断念を余儀なくされるのだが、その言い分が他でもないあの負債の一件な

のである。議長によれば、「この立候補を志願する市民は、ある民主主義的な新聞の創刊のために約束した金を支払わなかった」〔310〕。忘れられていた弁護士への一五、〇〇〇フランの一件が、こんなところで突然セネカルの口をついて出る。既に述べたように、デロリエは殉教者通りを下った日、やがてアルヌー夫人を訪問した日と、一五、〇〇〇フランを取逃すごとにセネカルへと思想的にも人格的にも傾斜を深め、彼の分身のような存在になるのだが、革命後ほどなく保守派が息を吹き返す頃から関係は逆転して、むしろセネカルがデロリエの分身的性格を帯びてくる。その後六月事変で政治犯となったセネカルが無一文で出所した時、辛うじて糊口をしのぐのは弁護士の下働きとしてであり、しかもその服は弁護士のお下がりなのだ。そういう意味でも、この時彼が横槍を入れたのはデロリエの代理人としてではないだろうか。但し弁護士をセネカルに接近させた彼のフレデリックへの恨みには、社会的な負債への要求（革命となって現われた復讐）も分ちがたく含まれていた。従って主人公の立候補を忌避する第二の理由としては、革命への参加が問われねばならない。セネカルは弾劾をこう続ける、「それに、二月二二日、彼はそのことを充分に知らされていたにも拘わらず、パンテオン広場の集会に加わらなかった」〔ibid.〕。「機は熟した」というデロリエからのデモへの呼びかけを尻眼に逢引きに出かけたフレデリックは、社会的負債の点でも、彼とその仲間を裏切っていたことになる。しかも逢引きの相手が、デロリエから新聞社の資金を横取りしたうえに代償としての愛を拒んだ当のアルヌー夫人なのだから、公私二重となった恨みの根ははなはだ深いのだ。弁護士とセネカルにとって彼の立候補は、金輪際受けいれるわけにはいかなかった。もっとも相談を受けた弁護士は政府委員として赴任していた地方から、「強い激励の言葉」を送って立候補の決意を煽りたてていたのだから、悪く取ればこれは二人で罠にはめたようなものである。ところが主人公はその身にのしかかるこの負債の重みがよく判っていなかった。こりもせず、やがてもう一度代議士の野望を抱きはじめるからである。

世の中の状況が少し変化していたことは事実である。一時は全盛だった貧者のための共和主義政権の下から、保守派が勢いを盛り返してくる。何もかも躓いて、資本運営のノウハウを心得たブルジョワジイの手腕が必要になっていたのだ。一時は猫も杓子もなびいていた革命風が衰え、ダンブルーズ氏邸の客間をこれ見よがしに飾っていたペルランの「革命的な絵」〔343〕がいつの間にか姿を消す。そんなご時勢だから、上流社会を「自分の真の世界、殆ど自分の住居」〔350〕と感じる主人公は、再びチャンスがめぐってきたと判断したのかもしれない。なんと言っても同郷の最大の保守派実力者ダンブルーズの推薦を貰えることになり、今度の勝負は手固いはずだった。ところが話を持ちかけた相手が悪いとは気付かなかった。こともあろうに、またしてもあのデロリエに胸の内をあかしてしまうのだ。いや、むしろデロリエがその気にさせたというべきだろうか。いずれにしてもそれだけで帰趨は自ずから知れる。政界の右傾化で尾羽打ち枯して地方から舞い戻った友人に、主人公は、この節は保守が強くなったが有力な新人に欠ける、ひとつ君でも立候補してはどうか、と話を切りだすのだが、弁護士は心得たもので、相手の意のあるところをただちに汲みとって、「いや君こそ、どうして自分で代議士に打って出ないのだ?」と逆に乗せにかかる。「フレデリックは再び例の野心が燃えあがるのを感じた」〔372〕。こうして二の舞を踏むことになるのだ。この件で一足先に選挙地盤のノジャンに出かけたデロリエは、幸先は良さそうなので急いでこちらに来いと言ってくるが、その手紙を持参するのが――なぜ直接当人に出さなかったものか――セネカルなのだからますます幸先が悪い。前と同じ不吉な顔ぶれが揃ったことになるのだ。そうとも知らず友人の忠告に従おうとしていた主人公だが、案の上というべきか、その矢先にロザネットが子を出産しその側に足どめをくっているところへ、友人からの第二信が届く。時遅し、すでに二人も立候補者が名のりをあげてしまい、君は折角の機会を逸したというのだ。ただし真の理由はその後に述べられる。新聞につながりを持っておくべきだったよ、と。「ああ、君があの時ぼくの忠告

に従っていたらね！　ぼくたちが自分の新聞を持っていたらね！」〔388〕あの時一五、〇〇〇フランをアルヌー夫人ではなく、ぼくの手に渡していたらね……かくして主人公の夢は昔の負債のために二度までも挫折の憂き目をみるのだが、相手の方はこれでもまだ借りは返してもらったとは思っていなかったようだ。それは、代議士になれないことが主人公に取っていわばその一番痛いところまでは届いていなかったからであり、なにより真の清算は裏切りの元凶というべきあの女性を巻きこみ苦しめることなくしてはなしえないからではないだろうか。

四件の訴訟でアルヌー夫人が正式の被告になるのは最後のダンブルーズ夫人によるものだけだが、この件が直接一五、〇〇〇フランではないにしても、あの時交わしたはずの秘密の契約のもう一つの条項、四、〇〇〇フランの返済猶予に端を発していることを見逃してはならない。同じ負債に対する清算の追求が問題になっているのである。ところがその前の、ロザネットがアルヌーに対して起こした二件の訴訟も、この追求とは無縁ではなかったように思われるのだ。しかもそれはさらに次のダンブルーズ夫人による三回目の訴訟と競売に、まるでその原因であるかのようにつながって、二人の真の恋敵であるアルヌー夫人を徹底的に責めたて苦しめようと二人が結託しているかのような具合なのだ。

ロザネットがアルヌーに負債の返済を求めて告訴することになった背景には、その前にヴァトナ女史が彼女に五、〇〇〇フランの借金を催促してきたことがある。しかしそれが告訴の理由だろうか。まず内一、〇〇〇フランは情夫のフレデリックが払う。しかし彼女としてはこれ以上彼から金銭的な世話を受けるのを望まない。かといって残金を工面するあてもないまま、やがて執達吏さえ送ってよこすヴァトナの強硬な構えに追いつめられて、金をつくる必要上、恐らくは前からの負債の件でやむなくアルヌーを告訴するに至った、という筋道をつい考えがちである。しかし、残る四、〇〇〇フランは、その後意外にもヴァトナの愛人のデュサルディエが、「その貯金の全部」を持

参してくれたお陰で急場はしのげることになる。といってもその時はすでに訴えを出した後のようであるから、告訴の動機が金策にあったことを否定する材料にはならない。しかし単にもし金策だけが問題ならそれをこの時取下げることもできたろう。がそうはしなかったし、たとえ告訴の前に四、〇〇〇フランが調達できたとしても、それとは無関係に、訴状は提出されていたに違いないのだ。ロザネットが告訴に踏みきった経緯には、借金対策とは全く別の利害が、例の如く大変紛らわしい形で働いていた形跡があるからである。一言でいえばそれは恋敵への迫害である。そしてそれがそうなった背後には、今度もまたあの忘れられた出来事が燻ぶっていたのだ。ロザネットは相手側の執達吏が登場するに及んで、借金のかたにアルヌーが一筆書き残したらしい書面を電気会社に持ちこみ、彼の株の名義変更を要求するのだが、その株はすでに売却されたものだと追い払われて、泣く泣く家に戻ってくる。夫であるフレデリックとしてはここはただちにアルヌーの家に行って、ことの白黒を明確にしなければならないところである。ところが奇妙なことに、ここに突然あの金が姿を現わすのだ。会いに行けばアルヌーは「一五、〇〇〇フランをそれとなく取り立てに来た」と気を廻すだろう、と。それでは「破廉恥」だと思った主人公は、まっすぐ足が向けられないで、レジャンバールに様子を聞いてから、近頃新しく友人と始めたというその宗教儀式用具店の前まで様子を見に行く（美から信仰へと商域を拡大していたわけだ）。思い切って中に入るが、しかし奥からアルヌー夫人が現われた途端に慌てて踵を返す〔395～7〕。何を遠慮してこうも尻込みするのか。愛に払った金を金銭的に返済されては困るというあの思惑が二度の失敗にもこりずまだ働いているのだろうか。とすれば遠慮ではなく、むしろこれこそ破廉恥なソロバン勘定を弾いていたともいえる。なお、この等価交換（愛と金）のコードは同じ文脈で確認されている。ロザネットが残る四、〇〇〇フランの負債の件で主人公の世話になろうとしないのは、それで愛が相殺されて関係が切られる不安からなのだが、この不安は愛と金のコードを暗黙の前提にしているから

である。実際彼女がその後愛想づかしをされて捨てられるのは、まさにその金を彼から受けとってしまった後なのだ。またその金を持参したデュサルディエにしても、苦しい中から溜めた金の全額が、どうしてよくもこうぴったりとその内縁の妻ヴァトナの請求額と一致したものか。そのわけを知るには、ヴァトナの呵責ない借金の請求が面向きの理由（開店資金の調達）よりもデルマールをめぐる愛の恨みにあったらしいことに気付かねばならない。夫のデュサルディエをぞっとさせた彼女のロザネットへの「理解しがたい憎悪」〔399〕は、おそらく主人公が目撃した二人の女性の激しい諍いの場面〔314～5〕に溯る。国家における女性の役割などについて議論していた二人は、意見の対立が拗れていつの間にか個人的なことで言い争いをはじめている。第三者にはよく意味の取れない棘のある冷笑的な言葉のやりとりの挙句、ついに腹を据えかねたヴァトナが、「覚えてらっしゃいよ！」と捨て科白を吐いてドアをぴしゃりと閉めたところでその場は幕となるのだが、途中では「負債には負債」〔314〕とか、二人に関係のあったデルマールの名が相手の帰った後に泣きじゃくるロザネットの口から洩れ出てくる〔315〕のだから、借金に絡む三角関係の恋の鞘当ての一幕だったと思われる。やがて厳しくヴァトナが借金の返済を求めてきたのは、その折の脅し文句を実行に移したということではないだろうか。すると元々は、ある男への愛が拗れて恋敵への返済要求となったのだから、動機において彼女の夫というべきデュサルディエの立場からみれば、これは一種の裏切り行為である。返済要求は未練を捨てきれない恋の腹いせである以上、それだけでヴァトナは、彼への愛を否定したことになるから、復讐ないし代償として恋敵のロザネットを苦しめようという彼女の四、〇〇〇フランの請求に彼が自分の金をはたいて計画の裏をかくことは、妻の裏切りへの返札であり、これもやはり愛と金の等価交換をふまえたまんじ巴の貸借関係に均衡を回復させるものだったろうからである。となれば彼の持ち合わせは、どうしてもヴァトナの請求する返済額とぴったりと一致しなければならなかったのではないだろうか。

アルヌーの店から逃げ帰った主人公は、彼に会えなかったから、金は公証人に頼んで自分で作るというのだが、ロザネットがその言い訳を頭から信じないのは不思議なくらいである。彼の肚のうちは何もかもお見通しだとでもいうように、「こんな気の弱い意気地なしの男」は見たこともないとくってかかる〔397〕。続いて「でもあんたは、どうしてあの連中がお金を払わないのを黙ってるのよ？」と夫ばかりか夫人も捲きこんでいうのは何の金なのか？この文脈からは彼女自身の債権よりも、彼女が表向きは知らないはずの、しかしそのこだわりからアルヌーにも会えずに戻ったあの昔の負債への、主人公の奇妙な遠慮をあてこすっているように聞こえるのだ。「あんたの昔のいい人を苦しめたくないからでしょ！」という指摘も、正しいとは言えないが、大きな因果のつなげようとしてはだから正鵠を射ていた。相手は図星をつかれて逆上するが、返す言葉もない。そこに彼女は畳みかけてくるのだ、「訴訟をかけてやるわ、あんたのアルヌーに！」彼女の告訴の動機は返済の金をつくることにはなかったのだ。愛の復讐を、負債の追求を通してなしとげようとしていたのだ。それに「あんたのアルヌー」とは誰のことなのか、アルヌー氏なのかアルヌー夫人なのか？　提出される訴状にはアルヌー氏の名が被告人として記載されるだろうとしても、前の愛人への気兼から借金が取立てられずにおめおめ手ぶらで戻ってきた主人公への怒りに発する告訴＝苦情（plainte）の真の相手としては、アルヌー夫人しかいるはずがない。「あんたのアルヌー」とは「あんたの昔のいいひと」のことに違いないのだ。もっとも本当に「昔の」いいひとならここまで猛りたつ必要はなかった。ロザネットは、少し前に自分でアルヌーの家に返済の催促に行った時、二人が親しく一緒にいるところに居合わせている。実はこれは二人の愛が成就する三度目のそして最後の機会だったのだが、その熱い初めての抱擁の最中に現在の情婦が金を返せと――ここでもまた金と愛との交換コードをちらつかせながら――ずかずかと入ってきたのだ。闖入者が抱擁を目撃したかどうかは語られていない。しかしたとえ見ていなくてもその道に通じている彼女に二人

の熱気が伝わらなかったとは思えないから、昔のいいひとなどと安閑とはしていられなかったのである。ところで主人公がアルヌーにロザネットの借金を言いだすどころか、口もきけずに戻ったのは、一五、〇〇〇フランに絡むかねてよりの思惑に縛られてであった。その負債をロザネットは知らないとしても、しかしそのために主人公が用件を果たさずに戻った怒りから訴訟を起こしたのだから、その動機には、では未返済の一五、〇〇〇フランの負債がまぎれこんでいたといえるのではないだろうか。するとその件のもう一人の――負の――債権者と分身がここに影をちらつかせているのもうなづける。ロザネットは告訴を宣言した時、「誰かに相談してみる」と言うのだが、誰かといっても、少し前から「時々二人のところに夕食を取りに来て」、意見がぶつかれば「かならずロザネットの味方をしていた」〔393〕という弁護士以外に、彼女が頼る相手はいるはずがない。それに職業といいこれまでの因縁といい、これ以上にうってつけの人物はいなかった。もっとも一回目の訴訟の経緯は省略されていて、相談する相手が誰なのか示されていないが、それが敗れた段階で、弁護士は訴訟だと息まく彼女をすかしなだめる役割で表に現われてくる。彼は「アルヌーの約束」だけでは法律的な譲渡にはならないと口を酸っぱくして説明してやり、その甲斐あって諦めきれずごねていた相手も結局は忠告に従う。弁護士は、なぜか彼女の「役に立ってあげたい」と思っていたらしいが、それは訴訟の動機に利害の一致があったからではないだろうか。その後彼女が陶土会社の十二枚の株券を見せた時、これは勝ち目があると、二度目の訴訟を推し進めるのは彼なのだ。一回目の訴訟が一五、〇〇〇フランの昔の負債がもつれて、アルヌー夫人の迫害に照準がすえられたのなら、それに敗れた雪辱戦としての二回目は、もはやヴァトナへの借金の憂いは無くなったのだから、その動機はもう少しはっきりしていることになる。弁護士がロザネットに味方しても当然なのである。むしろ彼の方が被害者としては格が上なのだとさえ言える。約束の金を貰えず、アルヌー夫人からは打ち明けた愛を嘲笑され侮辱された彼は、この一五、〇〇〇フ

ランに発する訴訟の愛がらみの動機を自分のものとして抱いており、そこに自分の復讐をとげる機会を見出しうる立場にあったのだ。もっとも今度も正体を明かすことを恐れるかのように、訴訟の担当は昔働いていた事務所の弁護士に依頼する。その進行も分身のセネカルが見守り、何かあれば手紙で知らせるという手筈を整えて、自分はノジャンに出かけて行く。代理による遠隔操作で訴訟に加担していたのだが、しかしこのノジャン行きは唯のアリバイ作りというわけではなかった。彼をロザネットに味方させた復讐の二つの動機（金と愛）において、はるかに実入りのいい清算の仕方がそこで見つかりかけていたのだ。

九章　共同戦線

三回目の訴訟は、これまで徐々に溜まってきた清算へのエネルギーが、少し前から抑えがたく高まってその絶頂に達したところでついに炸裂して、その帰結としての「競売」でとび散った破片が沈落するなかでついに終結を迎える、そんな運びにみえる。あの愛と金の負債の因果につながるあらゆる恨みつらみが――二人の死者のそれさえ加わって――ここに一つに集められ、一挙に復讐としての返済を遂行するのだから、終わりへの条件は整ったことになる。この最後の訴訟は表向きはダンブルーズ夫人が、古い四、〇〇〇フランの約束手形の支払いをアルヌー夫人に求めて起こされる。しかしそう言っただけでは出来していた事の半分も語ったことにはならないのだ。あの折の負債が忘却の淵から息を吹きかえしたことはわかるが、それは未亡人による死んだ夫の遺産整理の一環というようなことではなかった。それならあの四枚の約束手形は今まで通り他の書類と共に放置されていたに違いないのだ。訴訟を通して真に賭けられていたのは、ここでも、未亡人の――そしてこれもある大金の供与から生じた――恋の遺恨なのである。その上この訴訟にはフレデリックの愛に貸しのある関係者たちが、まさに打って一丸となってそ

れぞれの重力を掛けて、是が非にも清算つまり復讐をしはたそうと跳梁していたのである。

ことの発端は直接は、主人公が今や婚約者となったダンブルーズ未亡人から借りた一二、〇〇〇フランの使い途にある。彼はたまたま画家ペルランの口から、アルヌーがある人物に一二、〇〇〇フランの件で告訴され、今頃はひょっとして豚箱入りかもしれない、昨日会った時はパスポートを身に帯びて、家族と船で高飛びするような話だったと知らされる。夫人がパリからいなくなると聞いて、前回に劣らず驚きあわてて町にとび出た主人公は、「彼の心の実質」、「彼の生命の本質そのもの」〔405〕を失うまいと金策のあてを考えるのだが、差当りダンブルーズ未亡人に相談を持ちかける他はない。この程度の金は、主人公ならいつでも自由にできる懐具合ではないかと思えるのだが、緊急には間に合わないということなのか、よりにもよって婚約中の女性に、秘かに愛する女性のための金策を頼むはめになったわけだ。もっともこうして婚約者を踏みつけにすることに、主人公は良心に一抹のかげりも見せない。そうとは知らぬ未亡人は彼の頼みを聞きいれる。とはいえいくら好きな男の頼みでも、右から左へ黙って渡せる金額ではなかったのはよくわかる。執拗にわけをたずねる未亡人に、初め高飛車に出ていた青年の方も段々と下手に出て、その場ででっちあげた口実を仔細らしく並べた後、「これは内証にして欲しい、と懇願しながら彼女の膝に身を投げた」と、つい心底の真剣味を暴けだしてしまうのだ。それは嘘がばれればそれだけ他の女性への愛の深さを否応なく見せつけるわけだから、蔑ろにされた彼女の柳眉を逆立てさせずにはおかない大変剣呑な状況をつくりだしていたのだ。ただし普通ならば、この内証事は十中八九ばれるはずがなかった。それが思えばよくよく巡り合わせが悪かったというしかない経緯で、ことは意外なところから露見してしまうのだ。その径路を見ると、しかしそれは単に運が悪かったとか、軽挙に走ったつけとかいう以上の、必然的な因果に導かれていたことに気付くのである。ようやく借りた一二、〇〇〇フランを懐中に、早速アルヌー夫妻を訪れるのだが、店にも住居にも二

人の姿はない。そこで告訴したミニョという人物とは親しい友人だとペルランが教えてくれたレジャンバールの家を訪ね、詳しい事情を教えてもらう。それによると、アルヌーは五〇、〇〇〇フラン相当の株券をミニョから適当な口実で欺しとったのだが、相手は寛大にもその四分の一の一二、〇〇〇フランでいいから返してほしい、さもないと告訴すると期限つきで通告してきたという。ところがアルヌーはそれにも応じられず、家族ですでにパリを逃げ出してしまったのだ。ところでその場に居合せて二人の話を聞いていたレジャンバールの妻というのが、実はダンブルーズ夫人出入りの婦人服の仕立屋で、間の悪いことに夫の喪が明けるのに合わせて夫人から注文を受けていた色物の服の仮縫いを、その翌日にすることになっていた。ご贔屓の奥様がフレデリックとどういう関係にあるのかは商売柄承知していたろうが、フレデリックは相手のことは知らなかったようだ。彼は、アルヌーが「妻と一緒に」逃げたと聞くや、顔面蒼白になるので、女仕立屋は気絶でもするのではないかと心配する。それだけならよかったが、ミニョに一二、〇〇〇フランの金を催促されたとレジャンバールが述べたくだりで、それは持っている！と思わず口走ってしまう、「ポケットにあるんだ。持って来たんだよ」と〔407〕。このことは仮縫いの最中に逐一職業サーヴィス上の軽いお喋べりのたねとして披露されて、報告した仕立屋はともかく、聞いていたダンブルーズ未亡人には、それがどういう意味なのかわかりすぎるほどわかったのである。「すると、あの金は別の女が行ってしまうのをくいとめるためだったのだ」〔409〕。彼女としては不実な婚約者に煮え湯を呑まされたことになる。一時は激怒の余りあの男を従僕みたいに追い払ってやろうなどとも思うのだが、いきりたつ気持を抑え、より効果的な復讐をしようと一計を案ずる。彼が来ると何くわぬ顔で迎えて、ある用件で友人の弁護士に紹介の口添えを頼む。こうして、儲け話でもあるかと喜び勇んでやってくるデロリエに見せられるのが、あの四枚の約束手形だったのである。これで告訴されたアルヌー夫人はいよいよ身体窮まって、残した家具の一切が競売にふされる羽目になるの

だ。しかしもし主人公がアルヌーの詐欺と訴訟のことを知らなかったら、あるいは少くとも知るのがせめてもう二、三日後だったら、借金の必要はなかったし、それに続く悲劇的な事態は避けられたわけである。もし詐欺の被害者がルジャンバールの友人だと知らなかったら、ミニョにアルヌーの負債を支払うべく、共和主義者の家に赴く必要もその妻を通して内証ごとが筒抜けになる事態も避けられたわけである。ではアルヌーの訴訟とミニョのことを教えたのは画家のペルランなのだから、彼が苛酷な迫害をひきおこした災いのもとだったのだろうか。しかしどうして、折りも折この時に限って最近は疎遠の画家が主人公の家に出入りしていたのか。そこに着目すると、因果の糸はもう少し向うから繰出されていたことに気付く。画家が来たのは、生れたばかりの子供が死んだためではなかったろうか。ロザネットは主人公との間に生んだ男児の余りにも早い死が諦めきれず、初めは死体の防腐保存を主張するのだが、結局その死顔を描かせるという夫の提案に譲歩し、それでただちに画家が呼ばれることになったのだ。それにしても、愛されぬ息子としてはまるで死ぬ時期を選んだかのような成行きなのである。

この子は、すでにダンブルーズ夫人と金目当ての結婚を目論んでいる主人公が、ロザネットと縁を切る口実を狙っている時に生まれたのだから、父親からは最初から呪われた邪魔者でしかなかった。皺だらけで嫌な匂いのする、しかも父にそっくりだという赤黄色いものに彼が感じる「嫌悪」は〔387～8〕、単に生理的なものではない。産褥の妻が心からの愛情をあけひろげに示すのに接すれば、裏切ろうとしている自分がさすがに恥ずかしく、「人道にもとるおぞましいこと」〔388〕と思うのだが、しかしやがて子は父に愛されぬまま、全身白斑におおわれてあっけなく死ぬ。主人公に子殺しの嫌疑をかける物的証拠はないが、父親の目論見には叶っていたと言わねばならない。しかしただでは死ななかった。幸薄く死にながら、自分を直接手を下して殺さないまでも、その存在を否定した父親に対してその一番の弱点に致命的な一撃を加えるような段取りをつけておいたのである。その死が呼びよせた画

家の口から洩れた情報に、父親が踊らされてその後の訴訟から競売への急展開が用意されていたことを考えると、まるでそのためにわざわざ哀れさを掻きたてつつ父親への無念を呑んで、時期は遅すぎも早すぎもせずに、死んだという他はないのである。

父親の一番の弱点とは、彼が母を捨てて走ろうとしていたダンブルーズ夫人との婚約のことではない。むしろ子の死はこの間近な企みの達成を容易にしていた。母による二度の訴訟と同じく、子が自分の生命と引換えにつけた段取りは、その向うのあの女性への愛に照準が定められていたのだ。それは父親の人妻への愛を邪魔することが自分を間違いなく愛していた母親の気持を汲むことに自ずからなるからだが、息子がこの不貞の人妻の毒気を浴びせられていたことも考慮していいのではないだろうか。返済の掛合いにアルヌー家にひとり乗りこんだロザネットは、図らずもアルヌー夫人と主人公が二人切りでいるのを発見して、「あら、あんた、こんなとこにいたの?」と夫人の前で情婦としての狎々しさを存分に見せつけて、彼女の自尊心に平手打ちをくわせ、馬車を待たせてるからと男を一緒に連れ帰る。夫人は屈辱的な思いをしただけではないだろう。お陰で二人の愛の至福は「不可能な取返しのつかぬものになった」〔361〕。主人公は締め殺してやりたいほど愛人が憎くなるのだが、実際それは二人の愛にとってほぼ最後の機会だったのだ。アルヌー夫人の憎しみはそれに劣らぬものだったに違いない。愛がいよいよ成就する寸前だった時に愛する男を連れ去る恋敵を、彼女は階段の上から凝っと身をかがめて見ているのだが、その眼にはさぞ深い怨念がこもっていたに違いない、「鋭い胸を引き裂くような笑いが彼らの上に落ちてきた」。この時ロザネットがすでに身籠っていたかどうかはわからない。しかしどちらにしてもこの鬼気迫る笑い声は、二人の愛のさらなる障害となりうる新しい生命の誕生を、予め蝕み萎縮させる程度の威力は秘めていたのではないだろうか。つまり息子は、父ばかりかその愛人からも存在を呪われていた、というふうに彼の死の意味を考えてみたいのである。

子が死んだ時、フレデリックは「不安で心が締めつけられる」〔402〕が、それは息子の誕生を祝福するどころか、その死を願ってさえいた自分の「怪物性」にさすがに罪悪感を覚えずにいなかったからである。このままでは貸借のバランスが崩れるのだから、それを回復させる悪い事態が生じる予感だと言ってもいい。死は別の死で償われねばならず、前者の死をひきおこしたものに復讐の白羽の矢が立てられるのが似つかわしい。「……この死は始まりでしかなく、その背後でこっそりと（par derrière）もっと深刻な災いが今まさに起ろうとしているように思われた」〔403〕という彼の予想は的中するだろう。たしかに、もう一つの死が「こっそりと」、つまり作品の「背後で」用意されていたのだ。

幼な子はペルランを介して、ダンブルーズ夫人がアルヌー夫人に訴訟を起こす契機を拵えただけではなかった。それによって母の恨みをこの最後の訴訟へとつなぎ、その爆発力を強めてもいたのだ。ダンブルーズ夫人は、彼の母親から夫を奪いとる恋敵であるとしても、それは当面の、そして二次的レベルの問題でしかなく、あの本当の敵に対しては二人が一致団結して当らねばならないことをよく弁えていたかのようなのである。ダンブルーズ夫人の瞋恚を買った一二、〇〇〇フランの負債（それはアルヌーから主人公に移った）には、ロザネットの影が踊っていないだろうか。二度目の訴訟はロザネット側の言い分が認められて勝ったというのだが、不思議なことにではそれで被告がどうなったのかという肝心の帰結が語られていない。デロリエは、詐欺破産の罪で豚箱にアルヌーをぶちこんでやりましょうとそこを目標に意気込んで告訴したのだから、ここは断罪された被告がだからこうこういう処罰を蒙っての一言がどうしても欲しいところなのだ。利害関係の厳密な均衡を物語のメカニズムにしている作品としては腑に落ちない手ぬかりなのである。いや物語そのものがそれでは成立しなくなるのだから、手ぬかりではすまない。だからこれには何かわけがあって、たとえば他の項目にそれが紛れこんではいまいかと目を凝らす必

要がある。というのもそれは、どうやら次のダンブルーズ未亡人による訴訟に繰越されたように思われるのだ。そういう決算の仕方は、司法的論理からは許されない誤ちであるが、語りの修辞法ではありうることなのである。そのレトリックとはおそらくこうだ。勝訴をセネカルから伝え聞いたフレデリックは家に戻り、ロザネットに文句をつけようとするが、相手は突然子を襲った病気に動顛してそれどころではない。しかも固唾をのんで見守る内に子はあれよあれよという間に息が絶え、その死顔を残すために画家が呼ばれるという慌しい展開のなかで、勝訴の件は二人にとってのそれぞれの帰結と共に、一時棚におかれた恰好になる。しかもその息をつぐいとまもないうちに画家の口から聞き知ったアルヌーの別の負債による訴訟の件で、奔走を始めざるをえないのだから、それに手をつけるのはさらにこの問題が片付いた後ということになる。もちろんこの二件の訴訟の間に司法上のつながりはない。しかしミニョが騙りとられた五〇株の株券の返済を寛大にも四分の一の一二、〇〇〇フランに割引した辺りから、両者の間に妙に因縁の糸が絡まりだしてくるのである。なぜ四分の一にしたのかという理由は述べられていないが、それによって、ロザネットがアルヌーを詐欺破産で告訴するための証拠となった陶土会社の十二枚の株券と、枚数において重なってくるのは事実である。いや被害金額においても、両件は一致していたと言えるかもしれない。ミニョの五〇株の「相当額」は五万フラン〔407〕だというのだから一株一、〇〇〇フランの勘定になるだろう。したがって一二、〇〇〇フランの請求は十二株分に等しい。他方のロザネットの十二株だが、これが一二、〇〇〇フランに相当するとは書かれていないが、そう推定する根拠がないわけではない。この作品において有価証券は、なぜか判で押したように一枚一、〇〇〇フランで取引きされているからである。ミニョの五〇株の他に、アルヌーのダンブルーズへの約束手形（四枚四、〇〇〇フラン）も、ロザネットのヴァトナへの手形（五枚五、〇〇〇フラン）もそうだった。ロザネットがアルヌーに告訴した陶土会社の十二株の相当額は、だからひょっとすると次のミニョ

が告訴した負債額と全く同じだった可能性が出てくるのだ。二件は司法上はあくまでも別件の訴訟であって、数字が似ているからといってそこに何かの関係を疑るのは何もないのにあやをつける、言い掛りの類いなのだが、物語テクストの論理はまた別ではないだろうか。類似も内的関係の重要なレトリックになりえるので、これを偶然の一致と割切るわけにはいかないのだ。すると勝訴にも拘わらず清算が遂行されていなかったロザネットの十二株の始末は、じつは次のミニョの訴訟へと繰越されて、後者によるアルヌー夫妻のパリ追放に重圧をかけ、彼女とその薄幸の子を蔑ろにした憎むべき主人公の愛に致命的な打撃を与えようとしていたのではないだろうか。そればかりか余勢を駆って、逃げた夫人に追い討ちをかけてもいる。なぜなら二度目の訴訟の一二、〇〇〇フランが、金策に走らせたフレデリックをこともあろうにもう一人の恋敵ダンブルーズ夫人の膝下に泣きつかせたからである。ロザネットの恋の恨みは、借金のわけを知った未亡人の嫉妬のなかで増幅される。それは未亡人の「復讐」〔504, note 790〕に紛れこみ、競売という悲劇的清算で主人公の愛にとどめを刺した展開にひそかに手を貸していたように思われるのである。ロザネットがなぜかこの最後の競売の場に登場するのも、いわば自らの凱旋の舞台に参列するためだったのではないだろうか。みごと競売へと恋敵を追いつめた未亡人は、「気晴らしに」〔413〕と、心すすまぬ主人公を会場に連れていくのだが、やがて着飾ったロザネットが「勝ち誇った様子で」そこにやってくるのだ〔414〕。いわば、表面的には主人公の取合いで対立するとしても、本当の敵を懲らしめる点では同盟を組んでいた二人が、打ち揃って勝利の席に臨んだという恰好なのである。彼女はこの売却から「利益をひきだす」〔Ibid.〕ために来たという。二度目の訴訟で得たはずの先送りされた清算を、未亡人の訴訟とその帰結を通して払わせよう、自分を足蹴にした二人の愛への復讐をここで一挙に仕遂げようということではないだろうか。するとその前の、彼女に対するフレデリックの誤解も、必ずしも見当違いだったとは言えなくなる。アルヌー夫人の住んでいた極楽通りを歩い

ていた彼は、たまたま彼女の動産売却の掲示を目にして、それを「売らせた」人間がセネカルであることを突きとめる〔410-1〕。一二、〇〇〇フランの件で婚約者の恨みを買ってしまったことに気付かぬ彼は、その前のロザネットの訴訟が終った時セネカルがいやに嬉しそうに勝訴を告げたことを思い出して、これは今回も彼女の差し金に違いないと誤解して激しく彼女を迫めたてる。これは子供の病気と死、続くアルヌーの詐欺事件と逃亡で中断し延引されていた彼女の勝訴への怒り〔411〕を、彼の方も一段落したところでやっと爆発させたというところだろう。ダンブルーズ夫人による訴訟の帰結に向けられたわけだから、そこに前回の清算を繰越して怨みを晴らすロザネットと、いわば足並を揃えているのだ。だから彼女に競売の糸を引いたと面罵するのは、表面的には主人公の見立て違いだが、濡れ衣とはいいきれないのである。「アルヌー夫人を売らせたのはお前だ」とか、「恨みを晴らすためなんだ」という非難の主旨は〔Ibid.〕、それまでの二回の訴訟はいうまでもなく、死んだ息子に手引きをされて三度目の訴訟にも人知れぬかたちで参画する彼女の本音を、だから訴訟の真意を言い当てている。「すでにセネカルはお前の訴訟に首を突っこんでいた」から今回も彼を「表に出して」のお前の仕業に違いなく、「お前たち二人の憎悪が共謀して」のことと責めるのも、二人を四人にすればだが、ほぼ肯綮に当たるのだ。この競売を「お前の一連の迫害の一つ」(la suite de tes persécutions, 411) とも位置づける主人公の状況認識は、全員が一致協力してアルヌー夫人（つまり彼女への彼の愛）の破滅を、訴訟というすぐれて復讐の公的形態を通した貸借関係の均衡追求によって目論んでいるというわれわれの考えと、大掴みにおいて合致しているのである。

すると一二、〇〇〇フランばかりでなく、そこから縺れこんだ三度目の訴訟の四、〇〇〇フランという数字にも、愛憎と貸借の因果の糸が幾重にももつれ絡まっていたことに気がつく。まずこの昔の約束手形は、これもどういうわけか最近ヴァトナが支払い訴訟を起こした手形と同じ額になっているのだが、考えてみると後者の件は最後の訴

訟へと連鎖反応的に続いたもめごとのその最初のきっかけをなしていた。少なくともその支払いを捻出しようとするなかから、「あなたのアルヌー」へのロザネットによる訴訟・1が導き出されたのだし、それが訴訟・2とミニョの一二、〇〇〇フランの件（訴訟・3）を介して最後の訴訟・4へと尾をひくのだから、四、〇〇〇フランの件を通してもロザネットの影はダンブルーズ未亡人による迫害へと呼びこまれていたのである。そしてそれによってもまた、これらの訴訟は終始一貫して裏切られた愛の代償を貸借上の負債で支払わせるものだった。

とはいえ、今頃になってなぜ、反故同然の昔の債権が金庫の書類束の底から日の目をみることになったのか。いわばこの程度の端下金を労苦もいとわず探しだしたのはダンブルーズ未亡人のお手柄であるが、しかしそこまで駆りたてられたのにはやむにやまれぬ事情があったのである。それは、あの市場コードつまり愛と金の交換に基づく厳密な貸借均衡を遵守すればこそだった。彼女は夫の死後待ちかねたように、自分に三〇〇万フランを残したはずの遺書を、金庫、厚紙の箱、机やタンスの抽斗、末は靴拭いの下にいたるまで、血眼になって「発掘して」(fouiller, 385) まわるのだが、見つからなかった。四枚の約束手形はこの大金脈のありかを空しく探し求めた折の副産物として、後になって、足の踏み場もなく散らかった帳簿や書類綴りの一つに、そういえば「回収不能」と記した束があったのが思い出されるというかたちで浮上してくるのだ〔Ibid.〕。生前のダンブルーズに、妻と若い友人の関係を根に持った様子はとりたててない。資本家は妻の頼みをいれて、同郷の青年が代議士になるための根廻しに手を貸してやったし〔374〕、「二人の関係は皆に認められ、受けいれられた」〔375〕というその中には、保護者然たる彼女の夫も入っていたように思える。いずれにしても妬みとか憎しみとかの感情的反応は毛筋ほども見せなかったのだ。ただ、一度こういうことがあった。病気になった彼があやうく死の危機を脱した後、心細がる夫を「あなた一人は行かせないわ」といかにも世話女房めいた言葉で不倫の妻が慰めようとした時だけは、かすか

にだが裏切られた夫の心中の一端を覗かせていたのだと後で思い当る。「彼はそれに答えるかわりに、妻とその愛人に意味ありげな笑いを投げかけた。そこには諦めと寛大さと皮肉と同時に、何をにおわせているのかどこか陽気といっていいものが針の先のようにちらりと覗いていた」〔377〕。皮肉とはたんに妻の不倫へのあてこすりではない。それはまさに寛大に諦めたのだが、いくら社交儀礼上のお愛想だとしても、妻にとっては若い愛人と大いに楽しむうえで自分が唯一の邪魔者でしかなく、その自分が死ねば大金を手中にして共に快哉を叫ぶことは目にみえているのに、いくらなんでも私を置いていかせないでとまでは言うべきではなかったのかもしれない。実際資産家が息を引きとったばかりの枕元で、彼女はまだ体温もひかない夫を毒づくことをためらわないし、即座に若い男に結婚の申し込みをするのだから、夫の見通しは当りすぎるほどだった。そうである以上ここで不倫のカップルに、いよいよお楽しみの三〇〇万フランを遺産として贈与までしては、市場コード上のバランスを欠きすぎるのではないか。愛を始めとする夫への義務と奉仕の代価として相続権は妻に与えられるのだろうから、それを怠るならもう一方の秤皿に載せたものも取りさらねば社会正義を成りたたせているものへの重大な違反となるはずだ。そういう真似はとりわけダンブルーズ家の当主には、代々の紋章（「黒地に金の左腕、銀の手袋をはめた握りこぶし」）の手前できないことだった。その精神を忠実に体現してきた本家本元の銀行家ともあろうものが死の間際になってこの不均衡をなおざりにしたというのではあの世で先祖に合わせる顔がないのである。葬式後、公証人から見せられた遺書はいつ書きかえたのか、全財産を娘のセシルに贈与する文面になっていた。資産家の浮べたどこか陽気で意味あり気な笑いは、落胆する二人の耳元で今や哄笑となって響いていたに違いない。人事百般を貸借対照表の中に収めて帳尻を合わせなければならない資本家にとって、妻の不義密通は嫉妬や怒りの問題ではなく、彼女の負債として数量に換算されて処理されたのである。女性を買いうるもの、交換価値を持つ商品とみなすアルヌーたちと同じ考

えが、ここにも、多分より体系的に整合化されて見出される。この時、そんなはずはないと金庫などは斧で壊してあちこち探し廻った中に、図らずもあの四枚の約束手形が出てきていたのである。この約束手形が再び日の目をみるうえで、これ以上ふさわしい時も場所もなかったのではあるまいか。ダンブルーズは妻の不倫の代償に遺産相続の名義を変えただけではなかった。それによって自分の死後晴れて結婚の甘い夢を描いていた二人の仲を裂くことにもなるのだが、そのきっかけが四枚の約束手形に仕掛けられていたのである。遺産の思惑はずれで落胆したのは未亡人だけではなかった。主人公が彼女に接近し誘惑するに至ったのは、アルヌー夫人との愛が三度目に決定的に挫折した後の空虚な心に叢生した、社交会や政治などの世俗的野心の一つとして位置づけられる。死者の枕もとで未亡人から切り出した結婚の申し出に、青年は一も二もなく同意するのだが、それは彼女が遺産の三〇〇万フランを相手の頭にしっかりと刻みつけた後で行われていた。見ようによっては未亡人が青年の愛を買いとって婚約が成立したわけで、アルヌー夫人の結婚とその点で非常に近いことになる。実際相手は通夜の席で、結婚と引換えに「自分のものになる」この財産の使い途にあれもこれもと勝手な夢に胸をふくらませる。だから彼はそれが取らぬ狸の皮算用に終った時、「失望」の余り「顔面蒼白」になり〔385〕、「あれやこれやの夢よ、送るはずだった豪華な生活よ、さらば！」と心で呟かずにはいない〔386〕。しかしだからといって、すぐに婚約解消を言いだせようか。なぜならまだ商品取引きとして完全に制度化されていない領域のことなので、金がないのなら取りやめだとは言いかねるのだ。「体面（l'honneur）がダンブルーズ夫人との結婚を彼に強いていた」〔386〕とはそういうことだ。言いかえれば、自分の体面を傷つけぬしかるべき口実が見つかれば、さっさと未亡人と別れる魂胆がこの時すでに固まっていたことになる。結婚の動機の必然的な帰結だといえよう。片方の秤皿から金を引込めれば、他方の皿から等価物の愛を取り去らねばならない。その恰好の口実をもたらしたのが遺言書探しで浮かびでた手形なのだ。主人

公が借りた一二、〇〇〇フランの件が拗れてひきおこした四、〇〇〇フランの訴訟で、未亡人側は首尾よく競売へとアルヌー夫人を追いつめるが、この攻撃が逆に利用される。夫人の大切にしていた銀の小函を競り落とそうとして、勝ち誇る婚約者は青年の純真な気持を傷つけてしまうのだ。かくして繊細さの欠如に立腹した彼は、遺産を貰いそこねた未亡人を面倒な別れ話のいざこざもなく、つまり「体面上」とがめだてされる懸念なしに、ふくれ面一つで厄介払いする。これは亡き夫にしてみれば、欲張りすぎた（愛も財産も）妻との関係の帳尻を一銭のくるいもなく合わせたことになるのだろうか。彼女は三〇〇万フランを見つけられないどころか、欲にこと欠きその愛をも破滅させる書類を探し出してしまったわけだ。厳密な市場コードに依拠した、構成上の必然的な仕掛けがここにあったのではあるまいか。危うく間男の前夫にされるところだった資産家の死期も、青年の薄幸の息子に劣らず頃合を見計っている。青年のルジャンバール家訪問が、銀行家の喪明けの服を仮縫いする前日に当っていたから一二、〇〇〇フランの真相が早速未亡人に洩れたのであって、彼に恨みを抱く老幼二人の死者が共謀したかのような運びのだ。それに青年の二度目の代議士の夢が画餅に帰する原因に、新聞を持たなかったことで並んで、この強力な後楯の死が挙げられていたのである〔388〕。

十章　十二月二日、三日

競売が大詰めをなすとしたら、それは元をたぐれば、履行されぬまま忘れさられたフレデリックとアルヌー夫人の暗黙の契約にその後幾筋も絡んできた愛と金のしのぎを削る利害の網目が、それを契機にほぼ一本に絞られて、まさにここで一刀両断の総決算をなし遂げているからである。これも、負債の清算（リキダシヨン）が物語の終結（リキダシヨン）となり、市場が物語のシステムを成していればこそなのだ。アルヌー夫人の動産の売立てとは、その四、〇〇〇フランの名義上の負

債の清算にとどまらず、それを通じて何よりロザネットとダンブルーズ未亡人、デロリエとセネカル、さらにはダンブルーズ、おそらくはヴァトナまで溯上する、愛と金の等価性に立つ、累積する恨みつらみの物語としての総決算であった。だからロザネットと未亡人はどうしても競売に立会わねばならなかったのだが、ではこの晴れの席に肝心の二人の男が姿を見せないのはなぜだろうか。弁護士は、主人公からの伝言でダンブルーズ未亡人のところに馳せ参じた時、目の前に置かれた書類に、忘れもしないあのアルヌー夫人の署名を見出だして、彼女の姿とその折の「屈辱」がありありと蘇える。引き受けるのに迷いはなかった、「復讐の機会が向うから廻って来たのに、放っておく手はない」〔410〕からである。あの負債は幾多の出来事を経た今もしかるべき清算の機を狙って、彼の中で脈々と生きていたのである。したがって「回収の見込みのない債権は競売に出し」てはどうかという弁護士の勧めで始まるアルヌー夫人迫害のこの四度目の訴訟には、二度目と同様に、職業的役柄をこえて彼自身の利害（復讐）が重くのしかかっていた。なお訴訟を進めるに当っては誰か適当な人物の名前を借りた方がいいがと断って、人選を自ら買って出る。もちろん心当りがあったからで、なるほどこれまでの経過からみてその役どころとして分身セネカル以上に適切な人物はいそうにないのだ。こうして今度は、元革命家をダミーに自ら陣頭指揮をとっただろうその働きが功を奏して競売へと漕ぎつけたのだから、二人の関与は未亡人にまさるとも劣らない。それだけにこの競売に二人の女性とともに、弁護士とその分身が出席していないのは腑に落ちないのである。たとえば偶然通りかかったという口実ででも、ここは是非登場してもらいたいところだった。しかしそれはこっちの勝手で、欠席するにはするだけのわけがそれぞれの側にあったのだ。

デロリエについて言えば、彼は儀礼よりも実質をとることにしたらしい。競売が確定すればそれで得られる復讐の利は取込み済みなのだし、競売で得られる金も彼の懐に入るわけではない。この件での表向きの弁護士としての

役目と、それを隠れみのに晴らそうとした私怨とのずれがここで生じてくる。折角の勝利も、物質的には痒いところに手が届かぬ憾みが残るのだ。というより、市場コードにより忠実な本当の「復讐の機会」が別に目の前に差し出されていたのである。それを摑まぬ手は、今度もなかった。主人公を代議士にするための計画を実行すべく、弁護士は一足早くノジャンに乗りこんでいったが、それをきっかけに、適当な口実をもうけて戻ってはロック老人の機嫌を取結ぶ。腹に一物あったことは言うまでもない。そしてその狙いも手口も、前回のアルヌー夫人の場合と驚くほど良く似ている。主人公の分身としての作品内での存在の仕方を改めてなぞって見せるのだ。一言でいえばフレデリックにまたしてもなりすまし、友が享受するはずだった愛や財物をそのまま我が田に引込んで、それでもって彼の昔の負債を支払い済みにしてやろうという目論見なのである。唯これが理屈通りに行かないことは前の失敗で骨身にしみて懲りている。その失敗の原因はどこにあったのか。そこをいくら調べても、だからといって、市場コードそのものに疑惑の眼を向けることにはならなかった。今回もそこに立脚して行動しているからである。しかし等価と等価交換を一緒にしたのはまずかったという反省はあったのかもしれない。ある料理Aを注文した客に別の料理Bを運んでいった場合、値段が同じだからといってそれを食べることに誰もが同意するとは限らない。あいつが好きならおれも好きになるはず、ではないのだ。等価交換が成立するためには料理Aの単なる代りではなく、それがもはや品切れであることを断ったうえで、それに近い料理A′を出すくらいの配意は最底限必要だろう……いずれにしても性急に功を焦った前の失敗を踏まえてその辺りを慎重に弁護士はことを進めている。ロック家に入り浸り、まずは「友人を賞讃する」ことから始めたというから苦労の跡がしのばれる。もちろん同時に、「できるだけ友人の物腰や言葉使いを真似る」ことも怠らず、その甲斐あって「ルイズの信頼」をかちえるに致る。他方、昔世話になった共和派のルドリュ=ロランを攻撃することで、「彼女の父親の信頼」も厚く、かくして等価交換の下地

が着々と醸成される。後は、料理Aへの要望にはお答えできないことをしっかりと認識させたうえで、料理A′を差し出そうという寸法である。やがておもむろに機を見計った弁護士は、友人が社交界にうつつを抜かしていることから始まって、お目当てのひとがいるばかりか、子供までなした愛人を囲っていることまで洗いざらい私生活をぶちまけに掛かる。どれだけの愛がこの衝撃に耐えられようか、「ルイズの絶望は限りもなかった」〔401〕。後もう一押しというところ、第二弾の攻撃が続けられる。再びパリから戻ってきた弁護士は、友人がダンブルーズ夫人と結婚するという噂を町中にひろめるのだ。噂は母親のモロー夫人の口からも確認されて、もくろみは布石通りに運ぶ。「お陰でロック老人は病気になった。ルイズは家に閉じこもった。彼女が発狂したという噂さえ流れた」〔413〕。その頃主人公は競売の後、手際よくダンブルーズ夫人との縁を切って故郷に戻るのだが、それは最後の望みを自分の出方でどうにでもなるこの大富豪の娘に托していたからである。ところが驚くまいことか、久々に帰郷した主人公は、隣家の娘がこともあろうに知事姿の弁護士と教会から結婚式を挙げて出てくるのを目撃するはめになる。この弁護士の成功は「アルヌー夫人に対する失敗の仕返し」〔P. 503, Note 783〕だというシナリオの意図は例の負債に絡んでということなら理解できる。要するにその清算を自分から済ませたのだ。ただしそれによってルイーズのみならず、巨万の資産と知事の椅子まで頂戴しているのは、最初の負債よりもやや多めに返済させたことにならないだろうか。後にこの結婚は破綻して知事の地位からも逐われるのだが、これは取りすぎによって生じた貸借関係の不均衡を匡したことになるのかもしれない。ところで競売が行われた十二月一日といえば、弁護士としてはルイーズとの結婚式の前々日なのだし、知事の任命も決まっていただろうから、この忙しい最中にパリに出てくる余裕などなかったに違いないのである。

ではせめて、あの影的人物に今度も代理出席を頼んではどうだったのかというと、こちらもそれどころの騒ぎで

はなかった。代理というなら今や別の人物の代理になっていて、定職についていたから勝手に行動する自由などなかったのだ。しかも同時に半生を賭けた革命の総決算にも逐われていたのである。というと多忙な勤務の合間を縫って私事にかまけていたように聞こえるが、新たな任務の遂行が、そのまま彼の前半生の清算を要請するものになっていたのだ。この頃彼は、政治犯として獄につながれていたベル・イール島からの釈放以来、その貧困の一生でもとりわけ赤貧の生活を余儀なくされ、デロリエの下働きなどのお情けで食いつないでいた。筋金入りの革命的共和主義者とはいえこれだけ苦汁を嘗めさせられてはさすがに思半ばにすぎるものがあったのだろう、保守反動政府にしきりと色目を使う言動が目立ちだす。それは、このままでは生きていくのもままならぬと見きわめて、国家治安に警官として奉仕するという正反対の立場に方針を転換する最後の過程、思想的豹変の前段階だったらしい。そしてこの転向が保守化という世の大勢と歩調を合わせることになったとしても偶然ではなかった。七章で述べたように、ここでの革命は人道的な社会的正義や進歩の実現というより、富者による偏った富配分への貧者の是正要求、平等な富の再配分を暴力的に遂行するための、純粋に経済的な問題であった。この経済的下部構造の権威の前では、その行為に正当性を帯びさせる思想や理念の影は薄くなり、それは個々人の私利私欲（「おれの家族に金をよこせ！」）が、これまでの再配分で割をくった者同志の階級的な利害の一致において集団化する過程で形成された、自己正当化の言説に過ぎないのではないかという印象さえ与える。となれば誰もかれもがやり方こそ違え、結局は市場コードという同じ権威の御機嫌を取り結んでいたに過ぎない。だから革命が成功し政権が交替すると、まず直面するのが今や自分たちの手に委ねられた富の再配分を現実にはどう行うのかという問題なのである。本来は社会の構成員全員に属する富を、「泥棒」のようにそれを奪い取り勝手に占有していた富者たちから長年の負債として取立てるという大筋では一致しているのだが、仲間うちでの新たな、しかも公平なる再配分は具体的にどうするの

か。誰もが新政府の宰領する富と利権を自分の懐に引きいれようと殺到する。革命は社会の富を餌食にする別の人間を増やしただけなのか。貪婪なる陳情の群を見たルジャンバールの、「連中は共和国をくいものにしているんだ」〔299〕という呟きは、革命の大義という眼金を外すと、富と利権を好機到来とばかりにこの火事場に漁る姿しかそこにはないということである。革命直後の、仮政府成立以前のパレ・ロワイヤルに押しよせた人々のふるまいは、そういう革命の経済的な動機をあらわに見せていた。それまで抑えつけられていた人々の欲望は、富＝権力の象徴だった王宮の前で不均衡を回復しようと、破壊や乱癖気騒ぎのうちに、一度に拙劣に噴き出す。唯それは余りに性急で見通しに欠けていた。そこに革命の陥りやすい問題もまた見えてくる。破壊はそのどこかで所有の幻想を鋭く充足させるが、しかし所有とは結果的に正反対の場所に導かれてしまうからである。暴力による制度変更である以上混乱はさけられないとしても、この狼藉ぶりは、悲しくも所有に慣れぬ者の知的継承の限界を暴露しているのだ。富は獲得するより、その後の管理・運用の能力こそが問われるのだが、その知は支配階級が世の始めに誕生して以来、連綿と伝えられてきた人民統治の秘密の技法に属していて、誰もが参入しうるものではないのである。祝祭的な衝動に引きずられるままに破壊し掠奪し、飲み騒ぐのは誰にもできるとしても、その後はどうなのだろうか。たとえばこの火事場泥棒で掠めたものを元手に手固い商売を始めたような御仁がそう沢山いたとは思えないし、少なくともこの作品には登場しない。たとえいたとしてもせいぜい小金を貯める程度のことで、個人的心要に応じたやりくりならともかく、公共的性格も帯びうる大きな資金を動かすとなると話は違ってくる。その点では富の所有に慣れ、管理・運用の技能を富と共に継承・畜積しているだろうブルジョワジーには到底敵うはずがないのである。それに、たとえ共和政府に有能な人物が多々いただろうとしても、その民主的な建前に基づいて新しく統一的な経済制度を創案・再整備し、徹底させるのはきわめて難しいだろうことは容易に想像がつく。内部の

利害の衝突や足の引っ張り合いに加えて、「〈所有〉が〈宗教〉的崇拝にまで高められ、〈神〉と混同される」〔299〕時勢で、富者が既得の財産や権利を黙って吐きだすはずもないからである。第一、前の政府をひっくり返せば全てよくなると信じていたに違いない人々の性急なユートピア願望を叶えること自体が、もともと無理なことなのである。政府は、過渡期の不安定な経済基盤〈債権の低落、通貨の危機、新たな課税方式への抵抗……〉への不満と失望の中で、早晩行きづまざるをえない。不安と混乱が蔓延し、共和主義者は後退し、反動的にブルジョワジーの出番が廻ってくるのである。この点もレジャンバールは見抜いていた。革命直後この共和主義者は、唯二つのことしか言わなかった。一つが先程の連中は共和国をくいもの……云々なのだが、そのもう一つは「気をつけろよ、おれたちは押し出されてしまうぞ！」〔Op. cit〕であって、これは六月事変以後保守が地力を盛返してくるのを言い当てていたのではないだろうか。保身のために革命賛美の絵を客間に飾っていたダンブルーズは、風向きの変化を察して、いち早くそれを引込め〔343〕、その絵の作者で、画家の団体を作って共和政府から甘い汁を吸おうと企んでいたペルランは、今度はこの資本家の提灯持ちに貌変して時流に迎合する。ユソネもまた、世の中が変るごとに次々に首をすげかえて乗りきってきたこの資本家の生き方にふさわしい『ヒュドラ』という題の小冊子を印刷して、「反動サークルの利益」の擁護に転じる。前に過激な意見を開陳し共和政府の代議士に打って出ようとしたフレデリックも例外ではない。「保守派有利」の状勢に乗じダンブルーズの威勢を後楯に、もう一度立候補を画策するのだ。但しこれらの政治的転向には、寝返りや思想的断絶に伴う批判とか反省などの後暗い気配はみじんも漂っていない。まさにそこに、この作品の革命観が如実に現われていたわけである。共和も保守も利害の対立を越えて結局は同一の市場的規範に立っている以上、革命からの転向といってもそれはより有利な企業へと再就職の口を探すのと選ぶところはなかった。二月革命となったデモへの参加を主人公に呼びかけ新政府の下でしかるべき地位を得ていたデ

ロリエも、保守の抬頭と共にそこを逐われて尾羽うち枯してパリに戻ってくるが、その彼が今や革命に幻滅し、「労働者への唾棄」を隠さないとしても、それは期待していた利益が共和政府から得られないことが判ったからではないだろうか。労働者たちは思想も信念もなく唯自分の利害のことしか考えず、だから相手がロベスピールであれナポレオンであれ、またルイ・フィリップであれ、「自分の口にパンを投げこむ人間に永遠の忠勤をはげむ虫けら」〔371〕だと罵るのだが、これはたとえそうだとしても労働者に限ったはなしではない。むしろ誰よりペルラン、ユソネの変節とも意識されぬ変節、さらに彼自身の変わり身の早さに適用しうるだろう。一八四八年の革命直後、ルドリュ・ロランに泣きついて地方委員の口にありつき、一八五二年この落ち目の政治家の悪口を言うことで今度はナポレオンⅢ世下の県知事の椅子を手にいれたのは誰だったろうか。だがこの点でも労働者やプチブルなどより大ブルジョワの方がはるかに進退を心得ている。あの金と銀の紋章に守護されたダンブルーズ家の当主ともなれば海千山千の貌変君子で、「ナポレオン、コザック兵、ルイ十八世、一八三〇年、労働者たちとあらゆる政権」〔380〕の靴の垢を五〇年来顔色ひとつ変えずになめてきたのであり、権力に対しては「身を売っても、それに金を払っただろう」〔Ibid〕、そういう人物なのだ。では肝心のセネカルはどうなのかといえば、彼も結局は利害の勘定に導かれて友人たちと歩調を揃えていたという他はない。革命前には目立たなかったが、彼が決して無欲な人物でないことは、アルヌーの陶器工場で働いていた時給料の値上げを執固く主人公に働きかけていた〔194〕ことに窺える。しかしとりわけベル・イール島から戻ってからの方向転換にそれは著しい。デロリエと同じように、「民衆の駄目さ加減」〔376〕をこきおろし、現在の――保守化にある――政府は、じつは「共産主義へと進んで」いて、「公共的利益」（utilité publique）のためになることをしているから、私は「権力の味方になる」と宣言する。どう見ても共和主義から保守派への寝返りなのだが、当人の意見ではにも拘わらずそれは従来の社会主義的信念をまっすぐ

貫ぬいた生き方なのである。民衆からいつの間にか権力に比重を移した変節の正体を「公共的」(Publique) の多義性の下に隠したつもりなのだろう。しかしこれは彼なりに言い分は立っているようなのだ。すべてがあの市場システムに帰着する登場人物たちの行動において、この転換は主義主張の裏切りではなく、いわば潰れかかった企業を辞して将来性のありそうな別の企業に再就職することなのだから、これを身売り (se vendre) というなら、最初の就職（共和主義への）自体がすでに身売りだったことになるからである。あるいは共和主義に身を捧げたこととその後「権力の味方」になることとの間に、発想の違いはなかった。要するに彼もまた、「ナポレオン、一八三〇年、労働者とあらゆる政権に喝采した」労働者からダンブルーズにいたる、「自分の口にパンを投げこむ人間に永遠の忠勤をはげむ虫けら」の一人であることがはっきりしたにすぎない。たしかに彼ほど生活に恵まれなかった人物は珍らしい。革命前の貧しさはともかく、ついに夢叶ったはずの新政府の下でも、私的な某革命クラブの議長に迎えられた位で、その革命への寄与をたとえ考慮しなくとも、地方委員として羽振りを聞かせたデロリエとは待遇のうえで名実ともに格段の差があるだろうし、しかもやがてその政府の手で獄舎に捉われたうえ、出獄後は友人のお情けに縋って走り使いをしたり、お古を着せて貰ってどうにかその日その日をしのいでいた。四八年の革命は彼の半生の奉仕と功績に対して、ほとんど一銭の報酬も与えなかったことになる。するとセネカルは、革命に貸しがあったことになるだろう。では革命に見切りをつける前に、その負債の返済を要求しなければならない。清算しなければ、革命とのくされ縁もまた断ちきれないのではあるまいか。その辺りに彼のふるまい方の主要動機が仄みえてくる。だがその清算をどう行うのか。できるだけ彼の人となりを生かして、そのうえで革命信奉の誤りを自他ともに明らかにするやり方があれば越したことはないだろう。まず当面の課題、その労働に対して革命がそれに見合う代価（金、地位、名誉）を支払わないのだから、清算の前に、早急に別の身売り相手を探して生計をたてねば

ならない。とはいえデロリエやダンブルーズ夫人の訴訟の下働きは当座しのぎのアルバイトであって、厳格なる秩序の人であると同時に革命家としての特性を存分にいかした仕事が見つからないだろうか。そんな彼を願ってもない天職が思いかけないところで待っていた。主人公を用事で訪ねたセネカルは、政治の動向にふれて自分は現政府の味方であると語るが、それは彼にいわせれば保守への転換では決してなく、政府が革命路線の真の継承者だからなのだ。しかもこの路線を尖鋭的に押し進めるには、独裁者の方が現政権よりもさらに望ましい。革命家は独裁者をこう礼賛していた。「ロベスピエールは少数者の権利を擁護してルイ十六世を国民公会の前に引き出し、それでもって人民を救済した」、さらに「独裁制は時として不可欠である。専制ばんざい！」〔376〕フランス大革命を錦の御旗に、ナポレオン三世待望論を唱えていたわけだが、ある意味では食いはぐれての就職運動だったともいえる。この独裁者の下で、それも警官として働ければ生計がたつのはもちろん、革命家としても筋が通り、かつて瑣末な規則で女工に罰金を科した厳格なる秩序の人となりにおいても面目を施すことは間違いない。やがて十二月二日、待ちにまったクーデタが勃発し、アルヌー夫人の売立てはその前日だったのだから、ようやく彼は運命の定めた仕事を発見する間際だったわけで、いつから採用されたにせよ、前のかりそめの世過ぎを顧みるいとまなどなかったとしても許される。唯、「目分の口にパンを投げこむ人間に永遠の忠勤をはげむ」うえで、過去を清算し革命に結着をつける機会だけがまだ欠けていた。が、それももう一日の辛棒なのである。

ところで皆が保守へと雪崩をうって進んで行くなかで、一人だけそういう世の中の事情がよくのみこめていない人物がいた。三年前の革命直後には、「民衆の勝利だ！」と叫び、「労働者とブルジョワが抱きあっていたよ！（……）なんて良い人たちなんだ！　すばらしいことだ！」〔295〕と心から感動を表明する。この両者の抱擁は反・一八三〇年体制という束の間の利害の一致から生れたのだから、一転して激しい憎悪と闘争へと変るのにさして時

間はかからない。にも拘わらず彼は、それは人類が圧制の桎梏から解放される自由への大きな前進を画すものだと考えた。正義・人道・進歩といった革命の大義を文字通りに受けとったわけである。「共和国が宣言された！　これからは皆幸福になるんだ！」〔295〕。まもなくポーランドもイタリアも解放され、「王はもはやいなくなる！」、そして「全地上が自由になるんだ！」とわがことのように喜ぶ。しかし彼とても、やがて保守が勢力を盛返すなかで、必ずしも「皆が幸福」にもならなければ「自由」になるわけでもなく、むしろ事態は「以前よりも悪化」〔399〕したことに気付かざるをえない。「自由の木は伐り倒され、投票権は制限され、検閲が復活し、パリは兵隊に固く警備され、十六の県では戒厳令さえ敷かれている」〔400〕。「連中はおれたちの共和国を殺している」〔399〕。この新たな圧制の開始は何なのか？　それは王と民衆の善悪二頃対立の図式などでは解けないことだった。民衆内部の――富の再配分の仕方をめぐる――争いの意味がはっきりと見えてこないので、もっと誠意をもって努力していたら「理解しあえたのでは」〔400〕などとお間違いの人道主義的幻想を抱くのだ。といって理想が地にまみれる現実が見えていないわけではない。そういう世の動きを驚きの眼を見張って眺めてきた結果、「労働者だってブルジョワより値打ちがあるわけじゃない！」〔Ibid〕というデロリエ的な考えに彼も逢着する。ではどちらを向いても救いがない。「皆がわれわれに敵対している」〔Ibid〕。しかし作中の共和主義者が足並揃えて権力に廻れ右をしている時に、われわれとは誰をさすのだろうか。どうやら一人残されてしまったのだが、それに気付かず、気付いたところでペルラン、ユソネ、デロリエ、セネカルの驥尾に付す器用さがあったのかは疑わしい。市場システムへの理解が足りないので、芸もなく「のしかかる重み」に耐えているが、「このままだと、おれは気が狂うだろう」〔Ibid〕。おそらく気息えんえんたる〈共和国〉とそれに身を捧げた「誠実で勇敢な青年」の絶望とが一つに重ね合わせられている。「ひと思いに誰かに殺してもらいたい気分だよ」〔Ibid〕。これは、唯ひとりの共和主義者となった青年の

絶望であるとともに、そこに最後の避難所を見出した〈共和国〉の理念も、打つ手もなく断末魔の苦しみを迎えているということなのだ。彼の死はだから同時に〈共和国〉の死となる。すると革命家セネカルにとってこの青年の殺害以上に、半生の努力をその実現に捧げながら一銭の代償も貰えなかった〈共和国〉の負債を払わせるうえで、恰好な清算＝復讐の仕方はなかったのではないだろうか。すでに半ば殺されていた〈共和国〉は十二月二日のクーデターによって決定的に倒壊する。その理想を抱懐する青年が斬殺されるのは翌三日であるが、彼とともにこの政体への最後の希望も息の根をとめられたに違いない。ついでながら、この殺害は加害者も被害者もそれぞれに本領を発揮させている。その日、抜き身の剣をかざして大通りを疾駆する龍騎兵の一隊を恐るおそる眺めている群衆を路地に押し戻すために、警官隊が警備に当っていると、一人だけ指図に従わずに凝っと動かない男がいる。警官の一人が剣で威嚇するが相手は返って前に一歩進み、「共和国万歳！」と叫んで、その直後仰向けに転倒する。何も殺さなくてもと思われるが、この警官がセネカルだったのだから仕方がない。厳格なる秩序の人としては、ついに収まるところに収まった独裁者下の警官の職務に忠勤をはげめばそうなる他はない一徹さで、整理の名目で人命を奪うところに彼の面目が躍如としているのだ。もちろん職務遂行というだけではない。独裁者にとって共和国の礼賛は、このクーデタ直後の不安定な時期には最も忌むべきことだから、この殺害は過剰防衛ともいいきれないが、しかしそういう権力の意を体しつつ、それが彼の半生の清算・復讐ともなっていたことに注意しなければならないのだ。ところが他方デュサルディエも、この死に方は、願いに叶っていたのである。以前から共和国の前途に絶望して、ひと思いに殺してほしいとまで口走っていた彼にとって、その政府が前日に決定的に崩壊した今、これ以上生き続けることは苦痛になっていただろう。セネカルが剣で威した時、彼は、「共和国ばんざい！」と叫ぶばかりか、前に一歩進み出ているのだ。これは殺害というより、理想に殉じた自害である。かの秩序の人が、権力への挑発

にどういう風にしか答えられないかを見抜いたうえで、その融通のきかぬ厳格さに付けこんで自分の生命を断ったかのような具合なのだ。そういえばわれわれは、これに似た英雄的な場面をすでに目撃している。三年前の六月騒動の最中、三色旗で身体をくるんだ青年が、バリケードの上から国民軍に「お前たちの兄弟が撃てるものなら撃ってみろ」と息巻いた時、国民軍の背後から割って出てきて、バリケードに跳びあがるや、古靴で反乱分子をなぐり倒し国旗を奪い取った男がいる〔338〕。彼は後で腿に銃創を負って瓦礫の下にいるところを救出され、一躍英雄的名声を得るのだが、これは彼の労働者としての立場からも共和国の理念からも実は大変不本意な成行きだった。彼の二頃対立図式からは同じ立場の「兄弟」同志の反目はよく理解できないし、「おれは一度も悪いことはしなかった」〔400〕と主張するにしても、そのブルジョワに組した英雄的行動は、飢えた囚われの労働者がパンを求めた時に「これでも喰え」と銃弾をみまった国民軍のロック老人〔340〕とさして変らぬものなのである。ところが今度は彼が、立場を変えてブルジョワ政府の一警官に、同じような状況で殺害される。それは唯共和国に殉じるというだけではなく、心ならずも仲間を裏切ったあの時の借りもできるだけ正確に返さなければならなかったからではないだろうか。この殺害はだから、革命家から警官になったセネカルにとっても、死に場所を探していた被害者のデュサルディエにとっても、それぞれに願ってもない形での清算の遂行になっていたのである。

十一章　アルヌー夫人の一掃販売

こうして三日程の間に貸借関係の多層な不均衡が一挙に清算されて、作品の終結をせきたてるのだが、そこには死が濃厚な影を落としていたことに気が付く。そしてそれは十二月二日、三日だけではなく、一日の清算、つまりアルヌー夫人の競売においてもそうなのだ。liquidation には清算や物事の結着の他に体制の崩壊、邪魔者の抹殺や

粛清の意味もあり、se liquider などは自殺する意味で使われるのだから、清算による終結が二日の共和国の制度的崩壊、三日のデュサルディエの殺害（反乱分子の粛清）と、共和国とその理念の抹殺という形をとったとしても不思議ではない。しかし一日の場合死の影は、むしろ清算を掟として要求する市場システムの内部から射していたように思われる。一言でいえば、売却とは死なせることだからである。商品化とは、あるものをそれとは異質な一般等価交換の体系の中へと力づくで拉致し、価格という価値づけを余儀なくさせるのだが、それは他とは換え難いそれ自身の特異性を譲渡させる過程を含んでいる。それに関連して興味深いのは、ドイツ語 Veräußerung（売却・譲渡）のフランス語訳として vente の他に、aliénation が用いられることである。後者の元のラテン語の形容詞 alienus は他人の、疎遠なという意味であるが、おそらくそこからこのフランス語に財産や権利との疎隔、その放棄、喪失という意味が生じ、その一形態としての他人への譲渡が商業の発達とともに広く使われるようになったのであろう。しかし他方、疎隔、喪失するものの中に自由や独立、他人の敬意・同情なども含まれ、さらにそこに自己自身も加わって、マルクス主義用語 Entfremdung の訳語としての aliénation（自己疎外）という用法が二〇世紀に入って定着する。しかし、今は司法用語として以外は余り使われない古い用法に、強度の自己喪失ないし自己の他者化という点ではそれに近い、発狂という意味がすでにあった。一つの語が、大雑把には売却と自己喪失という一見全く性質を異にする二つの意味領域を持つことになるのだが、語義の史的形成がどういう過程を辿ったのであれ、両者には内的なつながりがあるように思われる。ものは売却においてあのすべてを平準化する虚構の価格体系へと深淵を跳びこえさせられるのだが、それは、この商品化を通じて自己の特性ないし自己同一性（ipséité）を否応なく譲渡する過程だったからである。売却とは、自己の譲渡とその結果としての喪失を――次第に語られにくくなる側面として――伴っており、二つの意味領域は裏表の関係にあるわけだ。潜在的に目録化された商品価格表へと、自

己の他者化において跳びこえる深淵は、自己喪失の、従って多かれ少なかれ死の深淵であると言えるだろう。といっても売りに出されるもの自体の死を問題にしているわけではない。ものはどれも、その所有者の人格の一部ないし表現なのである。にも拘わらず、われわれは譲渡（もの＝自己の）において死をその都度意識することは殆どないとしても、それは生産者と消費者を隔てる流通過程の複雑化や、その版図を世界にまで拡げ重ねてきた市場の浸透、さらに大量生産などに訓化されて、流通する商品が人格的に投影されにくくなる、あるいは投影されても度重なる死を経験することへの恐れと怠惰からそれを回避するか、最少限度にしか感受しない、つまり生活の便宜上その経験を生の外側の回路へと排除してしまうからである。その回路は確かにできあがっている。そして見おろすのも恐ろしい断崖絶壁でも、高速道路が開通すればそこを車で走ることに深淵を渡る危険をいちいち意識することは難しい。しかしその通路がまだ充分に踏み固められていないために感覚の麻痺が充分に進んでなくて、しかもものないし商品が生産量が少なくてその生産者ないし所有者と人格的により密接に結びついているような場合、死の深淵はそれを跳びこえる恐れを通じてよりはっきりと輪郭を現わしてくるだろう。例えば、仮に生涯に二、三の作品しか描かなかった画家がいたとしたら、彼はそれを売り渡すことに強い抵抗を感じるだろう。それは他と換えがたい特殊な個人的出来事として実現したものを、数量的平準性に引渡す習慣になじんでいないからである。まして女性が愛を売る場合は、商品と売り手の所有者が人格的にさらに密接に一体化しているだけにそれはなおさらであるまいか。おそらくはどの娼婦も、最初に自己の商品化にふみきった時は、この譲渡（アリエナション）による自己喪失（アリエナション）という死を――たとえ意識しないにしても――経験しているに違いない。この死は、他者としての男の欲望に自分を供するジェンダー的な屈服が含意しうるものと紛れながらも、それとは異質な経験である。アルヌー夫人の動産の譲渡に死の影がつきまとうのは、まさしくそのためではないだろうか。売らせることは彼女の自己（identité）を侵犯し、他者へと

引渡して喪失させることなのだ。そういう意味で競売は――デュサルディエの最期のように――群衆の視線下の殺害であり、それが市場コードへの違反処分である限りこれもつまりは処刑だったことになるだろう。そしてそれが成立していたのは、liquidation の多義性（清算=粛清）と aliénation の多義性（売却=自己喪失）が重なり合う場所においてだったと言えるかもしれない。なお liquidation にはさらに在庫一掃セールの意味もあることをつけ加えても場違いではあるまい。彼女の家具から身のまわり品のいっさいが、売りつくしを目標に販売されるからだが、この譲渡を通して彼女は死の淵を渡らせられるのである。

競売の場面は、ロマン派好みの廃墟のモチーフの、しかしそれに伴う詠嘆の色調はいっさい排除した、凄惨・荒涼の美を湛えている。しかしそれが稀といっていい程の効果を収めえた理由は、それ自身の描写ではなくそれを用意した全体の構成の中にしか見出せないだろう。そういう意味で、これまで問題にしてきた重畳、屈折する貸借関係の解きほぐしは、他ならぬ競売の凄惨な感銘の効果を分析し検討すること以外ではなかった。これまでの出来事はどれも、実はこの競売による夫人の譲渡と死を手繰りよせるために綿密に準備されていたように思われるのだ。曲折を経ながら主人公の愛において最後まで神聖不可侵なものにとどまったアルヌー夫人を、さまざまな負債の糸で絡めとりつつついに市場システムによって無理無体に譲渡させること、彼女をその身の廻りの品によって換喩的に凌辱し冒瀆し、そして殺害することが、究極の目標だったのではないだろうか。作品を支配していたあの恐るべき市場システムはそれまで登場人物の行動の私的動機のなかに隠見してはいたのだが、ここでいよいよその構造をあらわにして夫人の販売にたずさわる。といってもきわめて簡潔な装置においてである。つまり、商品が部屋に山と積まれていて、槌をもった競売吏が売台の前に陣取り、買い手たちが品物を載せる台のまわりを取り囲む。商品と売買の当事者、これがその正体なのだが、そこでは品物は「単調な」声と身振りで、つまり死の深淵を渡る時の

情動的思い入れなど一切入る余地なく、運ばれ買われる。冗談ひとつ言わず進行するそのしかつめらしさはおどけているようにも見え、この一体どこにあれだけの強い権威があったのか不思議なのだが、その権威はこけおどしの武力ではなく、我々の欲望の内に根を張る論理によって培われているのだから、体裁など構ってはいないのだろう。げんにこの装置は確実に機能を果たしている。アルヌー夫人の私的な世界をつくっていた事物がその生きた文脈から剝ぎとられて衆人環視に否応なくさらされ、一般等価物と交換されて見も知らぬ人間の手にわたるのであるから、ある意味で aliénation の売台は、最も縁遠いものが突然深淵を乗りこえて等価物として結びつく暗喩の魔術的意味交換の場、あるいはロートレアモンの手術台に似た眩惑的な交流の磁場をなすと言えなくはない。しかしそれには自己譲渡による死を受けいれねばならないのだから、自己を開き、自己をひろく深く実現する暗喩の交流とは反対のことが起きているのだろう。どんな神聖なものも、どんな個人の内奥の秘密に属していたものも、一般的価値の有無だけを評価する無関心で平準的な視線によって抹殺され、他とは換えがたい至高の価値をもたらしていた個人的唯一性を剝ぎとられて、商品の表情をむりやりに取らされる。しかしどれも一様にこの自己の殺害にすぐ応じられるわけではない。所有者との親密さの深かったものほど、質から量へのこの転換に困惑し、こだわり、ためらい、殺される犠牲者の悲痛な面持ちを、一瞬隠しきれずに差し向けてくる。フレデリックが会場の中に入った時、丁度夫人のペチコート、肩掛け、ハンカチ、下着などの白いものが、値ぶみする買い手たちの「手から手へと」廻され、「裏返しにされ」、「遠くからほうり投げられ」ているところなのだが、それが彼に「残虐な行為」と感じられるのは〔414〕、衣類の所有者である夫人を、つまり主人公の彼女への愛がその上に成立していた唯一性を、冒瀆的に破壊する商品化の過程に立ち会わされているからである。しかもこの商品化は愛のそれとしての気配を滲ませている。利潤の創造をねらう男たちの荒々しい欲望に翻弄される彼女の商品化（「アルヌー夫人を売らせる」）は、とり

も直さず彼女の夫の女性観を実現するかたちで、彼女に愛を売らせる趣きを帯びているのだ。男たちの手から手へと廻され裏返しにして吟味され値をつけられている内に、おそらく男たちの欲望はそのままでいながら、しかし彼女を商品化する彼らの視線を介していやおうなく、彼女はある変質を迫られる。売り台の「羽根が折れて垂れ下った彼女の帽子」は、まるで商品化の帰結として寝台に拉致された肉体の空しい抵抗の跡を語っているようでさえある。たしかに夫人はここにいないのだが、所有物が所有者を表現する兼合をもとに、返って不在はその現前を濃く描きだすのである。そういえば作品冒頭でフレデリックは、始めて見かけた夫人に対して、「彼女の部屋の家具、彼女が身につけた全てのドレス」〔6-7〕を知りたいという欲望を抱いていた。それらの事物は、中に彼女が包まれているという隣接関係をこえた何かだったからではないだろうか。それらが彼女の人格を構成するもの、それも単なる一部分などではなく、彼女の本質を開示するもの、彼女以上に彼女自身をなすものとして考えられていたのではないだろうか。すると今、まず下着類が売り台に載せられ、次いでドレス、毛皮、深靴といった身につけるものが登場し、その挙句かつてのフレデリックの願い通り家具も搬入されるのだから衣服も家具も裳抜けの殻どころか、それを肌につけ触れて生きてきた女性を不在なればこその奔放さで現前させているのである。身を包むものの売却は、包まれていた女主人を巻きぞえにしているのではないだろうか。これをフェチシズムというなら本来の積極的な意味でのそれであって、女ものの下着を盗む人々の夢想と合致しているかどうかは判らないが、生身の夫人の中に捉ええなかった彼女の魂、その真の存在がそこに宿っているからこそなのだ。

実際、衣服は今その中に夫人の身体を包み呪縛しつつ主人公の前にたち現われていた、「彼はそこに〔=それらの衣服に〕彼女の手足の形を定かではないが見出した」〔414〕。家具は、それを使いなれた懐かしい夫人の身体を彼の眼にありありと蘇らせる。しかもそれは「寝室の家具」だというのだから、空しく愛を求めた青年の前で今や何

を彼女に売らせようと目論まれているのか想像してみるまでもない。寝室の女として売り台に呼びだされた夫人は、愛を売る女のしなをつくって登場しなければならない。「椿を散らした青のじゅうたん」は「彼のそばに来る時に彼女の小さな可愛い足が軽やかに踏んだ」ものであり、「綴れ織張りの小型肘掛け椅子」は「二人切りの時彼女と向い合わせに坐った」ものなのだ。主人公だけに与えられていた愛の特別な恩寵は、彼女の人格を構成していた掛けがえのないものがどこにでもある中古品として販売されることで、今や誰でも金で買える愛へと変貌させられる。そしてこの買える女への商品化は、それによって殺害を含意する。

彼女の持ちものが次々に売られ運びさられ「姿を消す」(disparaître)〔414〕と、それとともに「自分の心を構成しているものまで幾つか去って行く(s'en aller)よう」に彼には思われる。夫人は「彼の心の実質(シュブスタンス)」〔405〕なのだから、所有物を通して夫人が売られれば、当然彼の心もそれとともに失われるわけである。disparaître, s'en aller には「消える」、「去る」の他に「死ぬ」という意味もあるが、競売は持ちものを通しての夫人の死、さらには彼女を生命の実質としていたフレデリックの心の死、そして彼女への愛の死ともなるらしい。翌朝フレデリックは、「破れた夢の残骸の中に閉じこもり、調子をこわし、苦しみに浸り意気消沈する。」無理もない、あれほどの愛が結局は破れた沈痛なる胸のうちはいかばかりかと同情を誘われるのだが、にも抱わらず「アルヌー夫人のことは気にかけていない」〔417〕と続くのだから面くらう。主人公について大変な思い違いをしていたのではないかと、来し方に再点検の眼を向けてみたくなるのだが、そういえばそういう思い切りの良さはこれが初めてではなかったと思いあたる。しかしこの心変わりを、愛の対象がなくなれば当然愛も存在しなくなるという理屈で差当り見逃しておくことにしよう。売立ての台は手術台や凌辱の拷問台であるばかりか、夫人の、そして彼女への愛の処刑台でもあったわけだ。思い入れ深い主人公の死者への哀悼とは対照的な、それを「大いに楽しむ」ダンブルーズ夫人や

「そこから利益を引き出す」勝ち誇ったロザネットという復讐者たちの見せ物見物の陽気さは、かつての処刑場を包んだにぎにぎしさに通じているのかとも思える。死の気配はすでに、競売場に入ってすぐの中庭に、「洗面器のない洗面台、肘掛け椅子の骨組み、磁器の破片、空ビン、マットレス」〔413〕などの残骸が転がる生活の墓場のような情景に滲んでいた。その上で、アルヌー夫人の下着などの衣服の売却は「彼女の遺品（ルリク）の分配」と見てられ、それを手にいれようとしている買い手たちは、「まるで彼女の屍骸をカラスたちがずたずたに引裂いている」かのようだし〔414〕、その後に主人公が覚える「無気力」は「葬式の」（une torpeur *funèbre*, 414）時のそれだと、一つの死が囁きつづけられる。夫人とロザネットの家を往き来したあの銀の小函に目をつけたダンブルーズ夫人が、「恋文でも入れておこうかしら」と主人公の制止をふりきってせり落としに掛かるのに、「死者たちの秘密は暴かぬものだ」と主人公は取りすがるのだから、これではまるで肝心の愛人が先を切って彼女の死を宣告してしまったようなものではないか。

競売の翌日がクーデタで、「議会は解散させられ」て共和主義の夢が崩壊し、翌々日はアルヌー夫人も今度こそ「死んだも同然」となって忘れられたらしく、主人公はあてにできる愛の相手として唯ひとり残された女性に会うために戻った故郷で、彼女が友人と結婚式を挙げるのを目撃してパリに帰ると、共和主義を信じていた最後の人物が、始末よく元共和主義者の警官に虐殺され、こうしてすべてに清算を行届かせて物語の結着がつく。後は後日譚が付されるばかりである。十二月一日の競売におけるアルヌー夫人の譲渡による死と、続く十二日二日三日の共和主義の死とは単に継起する出来事というだけではなく、理想的なものの滅亡という点でおそらくは照応し通底して、より大きな死と終結として低く弔鐘を奏でている。それは言葉使いにも窺え、夫人の死は彼女を「生命の基盤そのもの」〔405〕とする主人公の死でもあったから、競売は彼に une dissolution〔414〕をひきおこす。やや強引な使い

方であるが、「解体」による精神的な死といった意味で使用したのだろう。ところが翌二日の議会の「解散」にもこの語が過去分詞形で用いられている（l'Assemblée *dissoute*, 416）。これは通常の用い方なのだが、愛と革命に同一の語を使うことで主人公のうちに理想の解体という共鳴音が解き放たれるのだ。この三日間の集中的清算は、アルヌー夫人というより、むしろ彼女を愛していた、そしてまさに――後述するように――それ故に革命の夢を共和主義に托していたフレデリックに対して、それまでに畜えられた負債的反動を利用して一気に、愛と革命において総合的に遂行されたということになるだろう。デュサルディエを共和主義者に仕立てたのはセネカルたちとの交際を彼に開いてやり、何より自分の持つ書物の貸与や議論によってそれを鼓吹したフレデリックだったのではないだろうか。彼の死は、したがって主人公自身の内なるある希望の消滅と響きあっていた。アルヌー夫人を中心とする三人の女性との愛、さらに革命の夢が、すると主人公においてこの時一度に清算されたわけである。

清算ないし復讐というこの貸借関係の厳密な均衡の回復は、言うまでもなく市場システムと呼んできたものの仕業であり、その前には全てが屈服する凱歌のフィナーレとしての高まりさえ競売の場面には聴きとれる。それが作者の時代認識の表現であるらしいことは彼のもう一つの現代小説を見ても首肯けるし、またその認識が作者一人ではなく広く共有されていただろうことも同時代の作品を通じて窺える。だがこのシステムがそれ程重要ならば、ではあの一五、〇〇〇フランの負債はどうなったのかと、もう一度問わなくてはならない、あれは一体きちんとこの競売で返済されたことになるのだろうか、と。だがそれに答える前に、その清算追求の道すじをそもそもの暗黙の契約に溯って辿り直してみると、次のような穏やかならぬ逆説に突きあたるのである。そこで彼女を「売らせる」ことは、最初に支払われたあの大金の本来の意図と決して矛盾していない、それどころかむしろそこで願われた通りのことが実現していたのではないかと。競売において主人公はその「むごたらしさ」に「胸がむかむか」し、銀

の小函を「買おう」とした婚約者には神聖なものへの冒瀆だとでも言うように憤慨し、それを口実に婚約も解消（デイスードル）する。たしかに競売は、彼に裏切られた女や男たちの打って一丸となっての復讐なのだから、主人公がここで被害者の面持ちで嘆き悲しんでも似合わなくはないのだ。しかし、にも拘わらず、ここでの夫人の譲渡はよく考えてみれば結局一五、〇〇〇フランと引換えに彼女の愛を求めていた、あの暗黙の契約にまさしく叶うものだったと言わねばならない。この契約にそって主人公は行動してきたのだし、一連の訴訟と競売はその帰結だったのだ。ではこの競売における彼女の譲渡による娼婦化、それにおそらくはそれを通しての死さえもが、本当は主人公のある欲望に深いところで答えるものだったのではないだろうか。

注

(1) *L'Éducation sentimentale*, établi par Peter Michael Wertherill, Ed. garnier, 1984. 訳書として生島遼一訳（世界文学大系、筑摩書房、一九六一年）、山田爵訳（新集・世界の文学、中央公論社、一九七二年）を参照した。

(2) A. Plessis, De la fête impériale an mur des fédérés, 1852-1871, Ed. du Seuil, 1979, p. 168による。また一八二二年生れのある中級官吏の場合、一八五九年主任書記として年俸にして三、〇〇〇フラン、一八七一年係長として四、二〇〇フラン、一八七五年課長補佐として五、〇〇〇フラン受給している（壽里茂『ホワイトカラーの社会史』、日本評論社、一九九六年、二三〇頁）。フレデリックが一五、〇〇〇フランを用立てたのは一八四八年二月革命の、おそらく一年程前だが、フロベールが作品を書きおえたのは一八六九年なので、この金額のおよその評価が可能になる。

(3) 本作品では、概して愛の欲望が裏切られた時、男は関与する人物を「締め殺したい」という衝動にかられるが、このことは本稿第二部で重要な意味を持つだろう。

(4) 「平等」がとりわけヨーロッパの階級社会で育ったのは、やはりキリスト教における普遍的な神の愛、神の前の平等が理念的基盤になっていたからではないだろうか。それに聖書は人類の祖先は一人しかいないと説くのだから、人類はすべて兄弟だと保証しているわけで、支配者の系譜を語りきかせる日本の神話とは大分趣きが違うのだ。

(5) デロリエの学位論文は、構想の段階では代理の効力と債権譲渡を主題にしていたらしい〔451〕。となると一五、〇〇フランの取立てでアルヌー夫人を訪問する弁護士は、得意の分野でひと働きしようとしていたわけである。